罪と罰「4」（ドストエフスキー）

第四篇

一

『いったいこれは夢の続きだろうか？』もう一度ラスコーリニコフの頭にこんな考えが浮かんだ。

用心深い信じかねるような目つきで、彼はこの思いがけない客に見入った。

「スヴィドリガイロフ？　何をばかばかしい！　そんなことがあってたまるものか！」彼はとうとういぶかしさに堪えかね、声に出してこう言った。

客はこの叫び声にも、いっこう驚いた様子はなかった。

「わたしは二つの理由があってお訪ねしたのです。第一には、もうよほど前からあなたのことを、あなたにとってきわめて有利な方面から、いろいろ聞かされていたので、親しくお近づきになりたいと思ったわけです。第二には、お妹さんのアヴドーチャ・ロマーノヴナに直接利害関係のある一つのことについて、あるいはあなたも援助を拒みはなさらんかもしれないと、こんな空想を持っているからです。わたしが一人で紹介もなしに行ったら、お妹さんはある先入見のために、庭先へも入れてくださらないかもしれません。ところが、あなたのお口添えがあれば、その反対に……とこう目算しましてね……」

「悪い目算ですよ」とラスコーリニコフはさえぎった。

「ちょっと伺いますが、おふたりはつい昨日お着きになったばかりでしょうな？」

ラスコーリニコフは答えなかった。

「昨日です、知っていますよ。わたしも実はおとといあいたばかりなんで。そこで、ね、ロジオン・ロマーヌイチ、あの件については、あなたにこう申し上げようと思うのです。弁解は無用だとは思いますが、これだけのことは言わしてもらいます。いったいあのことについては、あの一件については、全くのところ、わたしの方にそれほど犯罪めいたものがあるでしょうか？　偏見を抜きにして、良識で判断してですな？」

ラスコーリニコフは無言のまま、いつまでも彼をじろじろ見回していた。

「自分の家で頼りない娘を追っかけ回して、『けがらわしい申し出でその娘をはずかしめた』ということですか――そうですか？　（どうも自分の方から先回りしますな！）――しかし、わたしだって人間です、そしてnihil humanum（すべて人間的なものには無関心でない）……一口に言えば、わたしも人並に誘惑を感じて、惚れることもできるんです、それをまず考えてください。そうすれば、すべてきわめて自然に解釈がついてしまいます。いっさいの問題は、わたしが悪人か、それともあべこべに犠牲なのか？　という点にあるんですよ。犠牲とはどういうわけか？　ほかでもありません、あの時アメリカか、スイスへでも駆け落ちしようと言い出した時、わた

しはこの上もない敬虔（けいけん）な感情を持っていたのかもしれませんよ。そればかりか、双方の幸福を築こうと考えていたのかもわかりませんぜ！　何しろ理性ってものは、情欲に奉仕するものなんですからね。事によったら、わたしの方がよけいに自分の身を破滅さしたのかもしれませんぜ。ほんとうに冗談じゃない！……」

「いや、問題はまるでそんなことじゃありませんよ」と嫌悪の表情でラスコーリニコフはさえぎった。「僕はただもうあなたがいやでたまらないんです。あなたが本当だろうと間違っていようと、お近づきになるのもいやなんです。さ、こうして追い立ててるんだから、帰ったらいいでしょう！……」

スヴィドリガイロフはふいに大きな声でからからと笑った。

「どうもあなたはなかなか……あなたはなかなかごまかしがきかない！」思い切りあけっ放しな笑い方をしながら、彼はそう言った。「わたしは細工で物にしようと思ったんだが、あなたはすっかり本当の足場に立っておしまいになった！」

「ところが、今そういいながら、あなたはまだ小細工を続けている」

「それがどうしたんです？　それがどうしたんです？」とスヴィドリガイロフはあけすけに笑いながらくり返した。「だって、これはいわゆる bonne guerre（々堂々たる戦い）で、立派に許さるべき小細工ですからね！……しかし、なんにしても、あなたは話の腰を折っておしまいなすった。で、もう一度念をおしますが、例の庭先の一件さえなかったら、なんにも不快なことはなかったんですよ。マルファ・ペトローヴナが……」

「そのマルファ・ペトローヴナだって、やはりあなたがなぐり殺したそうじゃありませんか？」とラスコーリニコフは無作法に口を入れた。

「あなたもその話をお聞きでしたか？　もっとも、お耳にはいらずにゃいないわけですなあ……さて、このご質問に対しては、全くなんと申し上げたらいいかわかりませんよ。もっとも、自分の良心はこの点にかけては、しごく平静なものですがね。といって、このことでわたしが何か心配していたように、思ってくだすっちゃ困りますよ。あれはごくごくあたり前な、正確無比な状態のもとに起こった事なんですからな。臨検の警察医も、酒をほとんど一びんもやっつけて、飯をたらふく食って、すぐ水にはいったために起こった卒中だ、とこう診断しましたよ。それに、ほかの原因なんか、けっして出てくるはずがないんですからね……いやね、それよりわたしはしばらくの間、ことにこんど汽車に乗ってくる途中、こういうことを考えたんですよ。自分はあの……不幸を、何かのはずみで間接に招来したのじゃないか？　何か精神的刺激とか、そんな風の原因でね。ところが、わたしは自分で結論しましたよ。それさえ断じてあろうはずがないって」

ラスコーリニコフは笑い出した。

「そんなに心配するなんて、いい物好きですね！」

「いったい何をお笑いになるんです？　まあ考えてもみてください。わたしは前後を通じてたった二度、鞭で打ったきりですよ。しかも、あとさえつかないくらいなんで……どうか、わたしを恥知らずだなどと思わないでください。わたしだって、あれが愚劣千万なことだくらい、百も承知していますよ。が、それと同時に、マルファがわたしのこの、なんといいますか、前後を忘れた行為を、むしろ喜んでいたらしいのも、わたしは確かに知っております。あなたの妹さんに関する物語も、すっかり滓も残らないほどおさらいしてしまった。で、妻はもう三日も家にくすぶっていなけりゃならなかったんです。何しろ町へ持って行く材料もなくなったし、手紙の朗読も（手紙を読み歩いたことはお聞きになったでしょう！）町の人に飽かれてしまったんでね。そこへふいにこの二つの鞭が、まるで天の賜物のように、降ってきたわけなんですよ！　で、あれはまず第一番に、馬車のしたくを言いつけました！　わたしはもう今さらしく申しませんが、女ってものは、たとえどんなに怒った顔をしていても、侮辱されるのが非常に、非常にいい気持だ、といったような場合があるものです。もっともそれは、そうした場合は誰にでもありますがね。概して人間は、侮辱されることが大好きなんですよ。これにお気がつきましたか？　しかし、女はこれが格別なんです。それどころか、ただそれだけを楽しみに過ごしてる、と言ってもいいくらいですからね」

一時ラスコーリニコフは立ち上がって部屋を出てしまい、それでこの会見を打切ろうかと、ちょっと考えてみたけれど、多少の好奇心と一種の打算ともいうべきものが、ほんの一瞬間彼を引止めた。

「あなたは喧嘩がお好きですか？」と彼はぼんやりした調子で問いかけた。

「いや、大して」とスヴィドリガイロフは落ち着き払って答えた。「マルファとだってほとんど一度も、つかみ合いなんかしたことはありませんよ。わたしどもはごく睦じく暮らしていて、あれはいつもわたしに満足していました。わたしが鞭など使ったのは、七年の結婚生活のあいだ、あとにもさきにもたった二度きりです。もっとも、どうにでも意味のとれる第三の場合を別にしてね、初めての時は、結婚後ふた月して、田舎へ引っ込む早々でした。それから今度の最近の場合ですな。あなたはさだめしわたしのことをひどい悪党で、時代逆行者で、農奴搾取者だと思っておられたでしょうな？　へ、へ……ときに、ロジオン・ロマーヌイチ、一つ思い出していただきましょう。五、六年まだあのありがたい言論自由時代（農奴解放前後の風潮をさす）に一人の貴族が――名を忘れましたが――公衆の面前ですこぶる文学的に面皮をはがれたことがあります。先生、汽車の中でドイツ女を鞭で引っぱたいた、というわけなんです、おぼえておいでですか？　その時分もう一つ、やっぱりその年のことですが、『ヴェークの醜悪な行為』が起こったのです（ね、そら、『エジプトの夜』（プーシキン作）の公開朗読、おぼえておいでですか？　黒き目よ！　おお、わが

青春の黄金の時よ、汝(なれ)は今いずくにかある！　ね)。さて、わたしの意見はこうです。そのドイツ女を引っぱたいた先生には、あまり深く同情しません。なぜって、実際それは……何も同情することなんかないからです！　しかし、にもかかわらず、わたしはこう声明せずにいられません。どうかすると、どんな進歩主義の人でも絶対に紳士的な態度で終始一貫しうると、自分で自分に保証しかねるような、そうした挑発的な『ドイツ女』どもが、この世の中にいるもんですよ。その当時は、誰一人としてこの見地から、事件を見る人はなかったのですが、その実この見地こそ、真の人道的見地だったのです。いや、まったくですよ！」

　こう言って、スヴィドリガイロフはまただしぬけに笑い出した。ラスコーリニコフの目にはもう疑う余地もなかった。この男は何か堅く決心して、胸に一物ある男に相違ない。

「あなたはきっと五、六日の間ぶっ通しに、誰とも口をきかずにいたんでしょう？」と彼は尋ねた。

「まあそうですね。それがどうしたんです。わたしがこんな調子のいい人間なので、あなたはきっとびっくりなすったんでしょう？」

「いや、あなたがあまり調子がよすぎるのに、驚いてるんです」

「つまり、あなたの無作法な質問に腹を立てなかったからですか？　そうなんですか？　しかし……何も腹を立てることはありませんからね。あなたがお尋ねになったとおりに、こちらも返事をしているんで……」不思議なほど素朴な表情をして、彼はこう言い足した。「実のところ、わたしはなんにもこれという興味を持たない男なんですよ、じっさい」彼はなんとなくもの思わしげな調子で、ことばを続けた。「ことに今はそれこそ、なあんにもしていない……もっともあなたとしては、何か当てあってとり入ろうとしているのだ、とそうお思いになっても無理じゃありません。ことにあなたの妹さんに用があるなどと、自分で明言したんですからね。しかし、露骨に言ってしまいますが、わたしは非常に退屈なんです！　特にこの三日というものはね。だから、あなたに会ったのがうれしくてたまらないくらいなんですよ……悪く思ってもらっちゃ困りますがね、ロジオン・ロマーヌイチ、あなただってわたしの目には、なぜかどうも恐ろしく妙な人のように見えますよ。なんとおっしゃっても、どうもあなたには何かあるようだ。ことに今ね――」

といって、今のこの瞬間をいうのじゃありません、全体にこのごろ……いや、いやもう言いません、もう言いません、そんなに顔をしかめないでください！　これでわたしだって、あなたの思っておられるような、そんな熊男じゃありませんからね」

　ラスコーリニコフは陰鬱(いんうつ)な表情で彼を見つめた。

「それどころか、あなたはまるで熊男じゃないかもしれませんよ」と彼は言った。「僕の見たところでは、あなたは上流社会の人か、少なくとも場合によっては、立派な紳士になれる人です」

「いや、なに、わたしは別だん誰の評価にも興味を持っちゃいないんですよ」そっけない、いくらかごうまんな影を帯びた調子で、スヴィドリガイロフは答えた。「だから、時には俗物になったって、いいわけじゃありませんか。だって、この俗物という着物が、わが国の気候では着ごこちがいいし、それに……自分でもそれに対して、生来の傾向を持っているとすればね」と彼はまた笑いながら言い足した。

「でも、僕の聞いたところでは、君はここに大勢知人を持っておられるそうじゃありませんか。いわゆる『相当縁故や伝手のある』方じゃありませんか。だとすると、いったいどうしてなんの当てもないなんていわれます？」

「それはおっしゃる通りです、知己はあります」とかんじんな点には答えないで、スヴィドリガイロフは引きとった。「もうちょくちょく出会いましたよ。もうこれで三日ぶらつき歩いていますからね。で、こっちも気がつけば、先方でもこっちに気がつく様子です。そりゃあもちろん、わたしも身なりはきちんとしていますし、全体に貧乏な方じゃありません。だって、農奴解放もわたしの方には大したこともなくてすんだんですからね。森林や河沿いの草場などが主で、収入は少しも減らなかったわけなんです。しかし……わたしはそんな連中のとこへは行きません。前からもうあきあきしていましたからね。これでもう三日も出歩いていますが、誰にも声をかけないくらいですよ……それにまたこの街！　まあ、いったいどうしてこんなものがロシアにできたんでしょうなあ、あきれたもんじゃありませんか！　役人どもとあらゆる種類の神学生の街ですからなあ！　もっとも、八年ばかり前に、ここでぶらぶらしていた時分には、ずいぶんいろいろ気のつかないこともありましたがね……ただ一つ解剖にだけは、今でも望みを託していますよ、全く！」

「解剖学って？」

「が、いろんなクラブとか、デュッソートだとか、諸君の好きな爪先舞踏（トーダンス）だとか、それからまあ、進歩（プログレス）というやつも加えていいでしょう――まあ、こんなものは我々がいなくたって、勝手に存続させたらいいでしょうよ」彼はまたもや質問を無視して、こうことばを続けた。「それに、いかさまカルタ師になるのも、ぞっとしませんからね？」

「あなたは、いかさまカルタ師までやったんですか？」

「どうしてそれをせずにいられます？　八年ほど前、われわれはこの上もない立派な仲間を作って、時を過ごしていたもんですよ。それがね、みんな態度や押し出しの堂々たる人間ばかりで、詩人もいれば、資本家もいるという有様でした。それに全体わがロシアの社会では、もっとも洗練された態度や作法は、ちょいちょいやられたことのある連中に属しているものなんですよ――あなたそれにお気がつきましたかね？　わたしがこのとおりなりふりかまわなくなったのは、このごろ田舎に逼塞（ひっそく）しているからですよ。それでもやっぱり、当時はわたしも借

金のことで、牢へぶち込まれようとしたこともあるんです。相手はネージンのギリシア人でしたよ。その時偶然マルファ・ペトローヴナなる人物が現われて、種々掛け合ってくれた上、三万ルーブリでわたしを身受けしてくれたのです（わたしの借金は全部で七万ルーブリだったんで）。そこで、わたしとマルファは正式に結婚しました。マルファはわたしを宝物か何かのようにして、すぐさま自分の田舎へ連れて帰った。何しろ、あれはわたしより五つも年上でしたからね。たいへんわたしを愛してくれましたよ。わたしは七年間というもの、村から外へ出ないで暮らしましたよ。ところで、どうでしょう、あれはずっと死ぬまで、例の三万ルーブリというわたしの借用証文を、他人の名義にして握っていたんですよ。だから、わたしが何かちょっと謀叛気でも起こそうものなら、すぐわなへかかってしまうわけです！　またそれくらいのことはしかねない女でしたよ！　何しろ女ってやつは、そうしたいろんな気持が一緒くたに入り交じってるものですからなあ」

「もしその証文がなかったら、あなたは逃げ出しましたかね？」

「それはなんともご返事に困りますね。わたしはそんな証文なんかにはほとんど束縛されてなかった。自分でどこへも出て行きたくなかったんですね。マルファは、わたしがつまらなさそうにしているのを見て、自分から二度も外国行きをすすめてくれたものです。しかし、そんなことをしたって仕様がないじゃありませんか！　外国へは前にもちょくちょく行ったことがありますが、いつもいやあな気がするばかりでした。いやな気がするというのとも違うが、朝、東が白むころ、ナポリ湾の海を見ていると、なんとなく気がめいってくるのです。分けてもいやでたまらないのは、実際、何か気の滅入る原因がありそうなことなんです。いや、やっぱり故郷が一番いいですよ。故郷では少なくとも、万事を人のせいにして、自己弁護をすることができますからね。わたしはいま北極探険にでも出かけたいくらいの気持なんです。何ぶん J'ai le vin mauvais（私は酒癖が悪いもんですからね）しかも、飲むのがいやでたまらないんです。でも、酒をやめたら、あとに何も残りゃしません。もうやってみたんですよ。ときにどうです、この日曜にユスーポフ公園で、ベルグが大きな軽気球に乗って飛ぶので、一定の料金で同乗者を募集してるそうですが、ほんとうですか？」

「じゃなんですか、あなた飛ぶつもりなんですか？」

「わたしが？　いいや……ただちょっと……」スヴィドリガイロフは真剣に考え込んだ様子で、こうつぶやいた。

『いったいこの男はどうなんだろう、本気なのかしらん？』とラスコーリニコフは考えた。

「いいや、証書なんかに束縛されたんじゃありませんよ」とスヴィドリガイロフは物思わしげにことばを続けた。

「わたしは自分の勝手で村から外へ出なかったのです。それに、もうかれこれ一年になりますが、わたしの命名日にマルファはその借用証書を返してくれて、おまけにまとまった金まで添えてくれました。あれはなかなか財

産家だったんですよ。そして『わたしがどんなにあなたを信じているか、これでわかりましょう、アルカージイ・イヴァーヌイチ』って――ほんとうにあれはこのとおりなことばを使っていったんですよ！　しかしあなたは、あれがこんなことばを使っていったなんて、ほんとうになさらないんでしょうな？　それはとにかく、わたしは村で押しも押されもせぬひとかどの地主になって、近在でも人に知られるようになったんですよ。書籍などもやはり取り寄せて読みました。マルファは初めそれに賛成してくれましたが、しまいにはあまり勉強に凝りすぎはせぬかと、心配するようになりました」

「なんだかなくなったマルファ・ペトローヴナが、しきりに懐しく思い出されるようですね！」

「わたしが？　そうかもしれません。いや、大きにそうかもしれません。ときに、ついでですが、あなたは幽霊の存在をお信じですか？」

「どんな幽霊です？」

「どんなって、普通の幽霊ですよ！」

「じゃ、あなたは信じますか？」

「さあ、もしなんでしたら、信じないといってもいいかもしれませんな……でも、信じないというのとも違うかな……」

「じゃ、出てくるわけなんですか、え？」

スヴィドリガイロフはなんだか妙な目つきで彼を見やった。

「マルファ・ペトローヴナが時おりご来訪あそばすんです」と、なんとなく奇妙な微笑に口をゆがめながら彼は言った。

「ご来訪あそばすって、どうなんです？」

「なに、もう三度もやって来たんですよ。最初は葬式の当日、墓場から帰って一時間ばかり後で、あれに会った。それはこちらへ向けて発つ前の晩でした。二度目はその途中、一昨日の夜明け方に、マーラヤ・ヴィシェーラの停車場で見たし、三度目はつい二時間ばかり前、わたしの泊まっている宿の部屋の中でしたよ。その時わたしは一人きりでしてね」

「夢でなくうつつに？」

「うつつですとも。三度ながらうつつなんです。やって来て、一分ばかり話をすると、戸口から帰っていくんです。いつも決まって戸口から出ていくんです。足音まで聞こえるようでした」

「いったいどういうわけだろう、君には必ず何かそんな風なことがあるに相違ないと、僕は初めからちゃんと考えてたんですよ！」とふいにラスコーリニコフは言った。

と、同時に、そんなことを口走ったのにわれながらびっくりした。ひどく興奮していた。

「へーえ？　あなたはそんなことをお考えになったんですか？」と驚いてスヴィドリガイロフは尋ねた。「いったいほんとうですか？　だからそう言ったじゃありませんか、われわれ二人にはどこか共通点があるって、ね？」

「そんなことはけっしておっしゃりゃしませんよ！」やっきとなってことばするどく、ラスコーリニコフはこう

答えた。
「申しませんでしたか？」
「そうですとも」
「なんだか言ったような気がしますがね。さきほどはいって来たとき、あなたが目をつむって横になったまま、寝たふりをしておられるのを見て――わたしはこうひとりごとをいったようなしだいです、『これがあの男だな！』と」
「それはいったいなんのことです、あの男とは？　いったいそれはなんの話です？」とラスコーリニコフはどなりつけた。
「なんの話ですって？　全くのところ、なんの話やら、わたしも知らないんですよ……」自分でもいささかまごつき気味で、スヴィドリガイロフは心底からそうつぶやいた。
　ちょっとの間、二人はだまりこんだ。二人とも目をいっぱいに見張って、たがいに見合っていた。
「こんなことはみんな愚にもつかぬことだ！」といまいましそうにラスコーリニコフは叫んだ。「いったい奥さんは出てきて、どんな話をするんです？」
「妻ですか？　まあ、どうでしょう、思い切ってくだらない話ばかりなんです。ところで、人間って妙なものじゃありませんか、わたしはそれがしゃくにさわるんでしてね。最初の時にははいって来て（実はわたしは疲れていたんです。葬儀、冥福祈祷、それからミサ、饗応と続いたあげく、やっと一人になって、書斎でシガーを吸いつけながら、考え込んでいたちょうどその時なんです）、戸口からはいって来ましてね、『ねえ、アルカージイ・イヴァーヌイチ、あなたはきょう忙しさにとりまぎれて、食堂の時計を巻くのをお忘れになりましたね』と言うんです。ところがその時計は、実際七年の間毎週きまって、わたしが自分で巻いていたので、どうかして忘れると、いつもあれが注意したものなんです。その翌日、わたしはもうこちらへ向けて発ちましてね、明けがた停車場の食堂へはいったわけです――前の晩にちょっとうとうとしたばかりなので、体はくたくただし、目はとろんとしている――わたしはコーヒーを手にとって、ふと見ると、いつの間にかマルファがカルタを一組手に持って、わたしの傍に腰をおろしながら、『あなた道中を占ってあげましょうか、アルカージイ・イヴァーヌイチ？』という。あれはカルタ占いの名人だったんです。いや、わたしはあの時占わせなかったのが、われながら残念でたまりませんよ。びっくりして、いきなり逃げ出したわけなんで。もっとも、そのとき発車のベルも鳴りましたがね。それから今日は、仕出し屋から取ったお粗末きわまる昼食をすまして、重苦しい腹をかかえながらすわっていました。腰かけて煙草をふかしてると、またしてもふいにマルファが、新しい緑色の絹服の長い長い尾をひきながら、恐ろしくめかしこんではいってくるじゃありませんか。『今日は、アルカージイ・イヴァーヌイチ！　いかがですこの服は、お好みに合いまして？　アニーシカでもこうは仕立てられませんよ』と言うん

です（アニーシカというのは、わたしどもの村のお針で、農奴あがりなんですが、モスクワへ修業に行っていたかわいい娘です）。それから、マルファはわたしの前に立ったまま、ぐるりと一回りして見せましたよ。わたしは服をながめて、それからじいっと気をつけて妻の顔を見てやりました。『お前もいい物好きだなあ、マルファ・ペトローヴナ、こんなくだらないことで一々ご苦労千万にわたしのところへやってくるなんて』と言いますと、『あらまあ、もうちょっとくらいおじゃまをしてもいけませんの』と言います。わたしは少しあれをからかってやるつもりで、『わたしはね、マルファ・ペトローヴナ、結婚しようと思ってるんだよ』というと、『そりゃあなたのご了見しだいですけれどね、アルカージイ・イヴァーヌイチ、女房の問い弔いを十分すまさないうちから、すぐ結婚に出かけたりなすっちゃ、あまりご名誉な話でもありますまいよ。せめて相手でも、れっきとした人を見つけなすったのならともかく、わたしはちゃんと知っていますが、あの娘のためにも、あなたのためにもなりゃしません、ただ世の笑い草になるだけですよ』こう言ったかと思うと、とたんに出て行きました。まるで尾の衣ずれの音まで聞こえるようでしたよ。ねえ、なんとばかげた話じゃありませんか、え？」

「しかし、いい加減なことを言っておられるのかもしれませんね」とラスコーリニコフは応じた。

「わたしはめったに嘘をつきません」とスヴィドリガイロフは物思わしげに答え、質問の無作法なのにまるで気もつかない様子だった。

「じゃ以前、それまでに、幽霊をごらんになったことは、一度もなかったんですか？」

「いーいや、見ましたよ。生まれてからたった一度、六年前のことでした。わたしどもにフィーリカという邸奉公の百姓がいましたが、その男を葬ったばかりの時に、わたしはついうっかりしてフィリップ、パイプだ！　と大きな声でいいつけると、そいつがいきなりはいってきて、わたしのパイプののせてある隅棚の方へ、つかつかと歩いて行くじゃありませんか。わたしはじっと腰かけたまま、『こいつおれに仕返しに来やがったな』と考えましたよ。というのは、そいつが死ぬ前に、ひどく言い合いをしたからなんです。で、わたしは『よくもきさまは肘の抜けたものを着て、おれのとこへはいってこられたな――とっとと出て行け、このやくざ者！』と言ってやりました。すると、くるりと向き直って出て行ってしまいましてね、それきりもう出ませんでしたよ。マルファにはその時話をしませんでした。わたしはその男のために法事でもしてやろうと思いましたが、気恥ずかしくなって、よしてしまいました」

「医者に見ておもらいなさい」

「そりゃおっしゃるまでもなく、ちゃんと承知しとります。正直、どこが悪いかわからないけど、健康でないことだけは確かですな。が、わたしに言わせれば、わたしの方があなたより確かに五倍は丈夫ですよ。わたしがお尋ねするのは、幽霊の出現を信じなさるかどうか、とい

うのじゃありません。わたしがお尋ねしたのは、幽霊の存在をお信じになるかどうか、ということなんです」
「いや、断じて信じません！」声に一種の憎悪さえ響かせながら、ラスコーリニコフは叫んだ。
「だって、普通なんて言っています？」スヴィドリガイロフはそっぽを見ながら、頭を少し傾けて、ひとり言のようにつぶやいた。「世間のものは『お前は病気だ、したがってお前の目に見えるものは、ただ現存せざる幻にすぎない』といいます。がそれには厳密な論理がないじゃありませんか。なるほど、幽霊はただ病人にだけ現われるものだ、ということにはわたしも同意です。しかしこれは単に、幽霊は病人以外のものには現われない、ということを証明するだけで、幽霊そのものが存在しない、ということにはなりませんからね」
「もちろん存在しませんよ！」とラスコーリニコフはいらだたしげに言いはった。
「存在しない？　あなたはそうお考えですか？」スヴィドリガイロフはゆっくり彼を見やりながら、ことばを続けた。「では、こういう風に考えたらどうです（一つ知恵を貸してください）。『幽霊はいわば他界の断片であり、その要素である、もちろん健康な人間には、そんなものなど見る必要もない。なぜなら、健康な人間はもっとも地上的な人間だから、したがって充実と秩序のために、この世の生活のみで生きなければならん。ところが、ちょっとでも病気をして、肉体組織が少しでもノーマルな地上的秩序を冒されると、たちまち他界の可能性が現われ始める。そして、病気が進むにつれて、他界との接触がいよいよ多くなってくる。で、すっかり死んでしまうと、たちまち他界へ移ってしまう』わたしはこのことをだいぶ前から考えていたのです。もし来世というものを信じておられるのでしたら、この考え方も信じていいわけですよ」
「僕は来世など信じやしません」とラスコーリニコフは言った。
　スヴィドリガイロフは物思わしげにじっとすわっていた。
「どうでしょう、もしそこには蜘蛛か何か、そんなものしかいないとしたら？」と彼はだしぬけにこう言った。『こいつは気ちがいだな』とラスコーリニコフは考えた。
「われわれは現にいつも永遠なるものを不可解な観念として、何か大きな大きなもののように想像しています！　が、しかし、なぜ必ず大きなものでなくちゃならないんでしょう？　ところが、あにはからんや、すべてそういったようなものの代わりに、いなかの湯殿みたいなすすけたちっぽけな部屋があって、その隅々に蜘蛛が巣を張っている、そして、これがすなわち永遠だと、こう想像してごらんなさい。実はね、わたしはどうかすると、そんな風のものが目先にちらつくことがあるんですよ」
「いったい、いったいあなたの頭には、それよりもちっと気安めになるような、もちっと公平な考えは浮かばないんですか！」と、病的な感じを声に響かせながら、ラスコーリニコフは叫んだ。

「もちっと公平な？　そりゃわかりませんよ。ことによったら、これがあなたのおっしゃる公平なのかもしれませんからね。それにわたしは必ず、わざとでもそうしたいんですよ！」なんともつかぬ微笑を浮かべながら、スヴィドリガイロフは答えた。

この醜怪な答えを聞くと、ラスコーリニコフは一種の悪寒（おかん）に打たれた。スヴィドリガイロフは頭を上げて、じっと彼を見つめていたが、急にからからと高笑いをした。

「いや、こりゃ実にどうしたことでしょう」と彼は叫んだ。「つい三十分ばかり前までは、われわれお互いにまだ顔を知らないでいたんだし、今でも敵同士のように思っていて、しかも二人の間には片づかない用事があるんですよ、ところが、われわれは用事をそっちのけにして、こんな文学談をおっ始めたんですからね！　え、わたしが言ったのはほんとうじゃありませんか、われわれは一つ森の獣だって？」

「どうかお願いですから」とラスコーリニコフはいらいらしてことばをついだ。「失礼ですが、早く用件をおっしゃってくださいませんか。何用でご来駕（らいが）をかたじけのうしたのか、それを聞かしてくださいませんか、……それに……それに……ぼく急ぐんだから。ぼく時間がないんです、ちょっと出かけたいんですから……」

「承知いたしました、承知いたしました。さて、お妹さんのアヴドーチャ・ロマーノヴナは、ルージン氏と結婚なさるんですね。ピョートル・ペトローヴィッチと？」

「どうかして妹に関する問題はいっさい避けて、あれの名を口にしないようにしていただけないでしょうか？　あなたが僕の目の前で、よくもあれの名を口に出されると思って、僕はそれが不思議なくらいです――もしあなたが本当にスヴィドリガイロフだったら？」

「だって、わたしはあのひとのことを話しに来たんですもの、口に出さずにゃいられませんよ！」

「じゃよろしい。お話しください。しかし、なるたけ手っとり早く！」

「実は家内の親戚（しんせき）に当たるあのルージン氏については、あなたご自身もうちゃんと意見をおもちのことと信じます。よし半時間でもあの男と面会なさるとか、あるいは何に限らずあの男について確かな、ほんとうの話をお聞きになるとかすればですね。あの男はお妹さんの配偶になる資格はありません。わたしに言わせると、アヴドーチャ・ロマーノヴナは今度のことについて、きわめて高潔な打算を無視した心持から、その……家族のために一身を犠牲にしようとしていらっしゃるのです。わたしは、これまであなたのことで聞いた噂を綜合（そうごう）して見た上で、利害関係を破壊することなしに、この結婚を破談にできたら、あなたの方でもきっとご満足になるだろう、とこんな気がしたしだいなのです。ところが、今こうして親しくお目にかかってみると、わたしはむしろそれを確信してしまいました」

「あなたとしてそれはあまり無邪気すぎますね。いや、ごめんなさい、僕はついずうずうしすぎると言いかけましたよ」とラスコーリニコフは言った。

「というのは、つまりわたしが自分の利益のためにあくせくしてる、というご解釈なんですね。ご心配には及びませんよ、ロジオン・ロマーヌイチ。もしわたしが自分の利益のためにあくせくしてるんでしたら、こうまともに言やしません。わたしだって、まんざらばかじゃありませんからね。このことについて一つの心理的不思議をあなたに打明けてお目にかけましょう。先刻わたしはアヴドーチャ・ロマーノヴナに対する愛を弁解するとき、自分の方が犠牲だったと言いました。で、はっきり申し上げますが、現在わたしは愛など少しも感じていません、絶対に。だから、わたし自身不思議なくらいなんです。だって実際あの当時は、何かしら感じていたんですからなあ……」

「遊惰と淫蕩(いんとう)のためです」とラスコーリニコフはさえぎった。

「実際わたしは淫蕩無為の人間です。しかしお妹さんは、いろいろ多くのすぐれた点をもっておいでになるので、わたしだってある種の印象に対して、抵抗ができなかろうじゃありませんか。だが、こんなことは皆くだらないことだ、今では自分でもそれがわかりますよ」

「よほど前からおわかりでしたか？」

「わかりかけたのはもう前からですが、いよいよそうと確信したのは、一昨日ペテルブルグへ着いた瞬間でした。もっともモスクワでは、まだアヴドーチャ・ロマーノヴナの愛を求めて、ルージン氏と競争する気でいたのです」

「話の腰を折ってすみませんが、お願いですから、話を少しはしょって、いきなりご来訪の用向きに移っていただけませんか。僕急ぐんですから、ちょっと外出したいんですから……」

「かしこまりました。わたしはここへ着いてから、今度ある……航海をしようと決心したので、その前に種々必要な処置をつけてしまいたい、という気になったのです。わたしの子供たちは伯母(おば)の所へ残っていますが、それぞれ財産を持っていますから、わたしという人間は別に用がないのです。それに、わたしなんか父親の資格などありゃしませんよ！　わたし自身は、一年前にマルファがくれたものだけを持ってきました。わたしにはこれで十分なんです。ごめんなさい、今すぐ用件に移りますから。ついては、おそらく実現するだろうと思われる航海に出かける前に、わたしはルージン氏との話もつけていきたいと思うのです。あの男はきらいでたまらないというわけでもありませんが、あいつのおかげでマルファとも喧嘩(けんか)したんですからね。つまり、この縁談もマルファのきもいりだということが、わたしの耳へはいったわけなんです。で、わたしは今度あなたを仲介にして、お妹さんとお目にかかりたいと思うんです。なんなら、あなたも列席してくだすってもいい。まず第一にお妹さんに向かって、ルージン氏との結婚は、けっしてこれっぱかりの利益にもならないのみか、みすみす損になるということを、なっとくのゆくようにお話ししたい。それから、せんだってのいろいろな気まずいでき事についておわびをした上、わたしから一万ルーブリ贈呈することを許し

ていただきたいのです。つまりそれによって、ルージン氏との決裂から生ずる損害を軽減してさしあげたいと思いましてね。もっとも、この決裂にはお妹さんもたいしてご異存はない、ただ機会さえ来てくれれば、とこう思っていらっしゃるのは、わたしの信じて疑わないところです」

「あなたはほんとうに、ほんとうに気ちがいです！」ラスコーリニコフは腹が立つというよりも、むしろあきれてこう叫んだ。「よくもそんなことが言えますね！」

「あなたにどなられることは、わたしもちゃんと覚悟していましたよ。が、第一ですね、わたしは金持というではありませんが、この一万ルーブリはあってもなくてもいい金なんです。というより、わたしにはぜんぜん不用なんです。もしアヴドーチャ・ロマーノヴナが納めてくださらなければ、わたしはおそらくいっそうばかげたことにつかってしまうでしょう。これが一つとして、二つには、わたしとして良心にやましいところは毛頭ありません。つまり、いっさいなんの思わくもなしに、この金を提供するのだからです。まあ、ほんとうになさろうとなさるまいと、いずれあなたにしろ、アヴドーチャ・ロマーノヴナにしろ、わかってくださる時がありますよ。問題はすべて、わたしが尊敬すべきあなたのお妹さんに苦労をかけたり、不快な思いをおさせしたりした点なのです。だから、いま衷心から悔悟して、誠心誠意こう思い込んでいるのです――といって、何も金で帳消しにしようとか、自分の加えた不快に対して賠償しようとか、そう言った意味じゃありません。唯々あの方のために、何かご利益になることをしたい、というにすぎないのです。つまりわたしだってほんとうに、何も悪いことばかりする専売特許を握ったわけじゃない、という点を基礎にして申し出たしだいです。もしわたしのこの申し出に、百万分の一でも打算が含まれていたら、わたしはこうまともに言い出すはずがないし、またわずか一万ルーブリやそこいらの金を提供などしません。現につい五週間前も、ずっと多額の金をお妹さんに提供したんですからな。のみならず、ことによると、わたしはごく近々ある娘と結婚するかもしれないのです。してみれば、アヴドーチャ・ロマーノヴナに野心を持っているのじゃないか、というようなお疑いは、いっさい自然に消滅するはずでしょう。結論として申しますが、アヴドーチャ・ロマーノヴナはルージン氏と結婚されても、この程度の金はおとりになるわけですよ。ただ出どころが違うだけでね――まあ、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたも腹をお立てにならないで、落ち着いて冷静によく考えてください」

こういうスヴィドリガイロフ自身も、しごく冷静に落ち着き払っていた。

「お願いですから、それで切り上げてください」とラスコーリニコフは言った。「なんにしても、許すべからざる暴言です」

「けっして、けっして。そんなことをおっしゃったら、人間はこの世でおたがい同士、くだらない世間的な形式のために、ただ悪いことばかりし合って、いいことはこ

れから先もできないことになってしまう。それはばかばかしいじゃありませんか。では、もしかりにわたしが死んで、それだけの金をお妹さんに遺言で残したとしても、それでもやはりお妹さんは拒絶なさるでしょうか？」
「そりゃ大きにありそうなことです」
「いや、それはどうも違いますよ。もっとも、だめならだめでいい、そういうことにしときましょう。しかし、一万ルーブリの金はいざという時、なかなか悪いものじゃありませんがね。いずれにしても、今お話ししたことを、アヴドーチャ・ロマーノヴナにお伝え願います」
「いや伝えません」
「そういうことでしたら、ロジオン・ロマーヌイチ、わたしはやむをえず、自分で無理にも会見の機会を求めます。つまり、ご迷惑をかけることになりますよ」
「じゃ、僕が伝言すれば、あなたは会見を強要しませんか？」
「さあ、なんと申し上げたらいいか、ちょっと困りますね。一度だけはぜひお目にかかりたいと思うんですが」
「あてになさらない方がいいでしょう」
「残念ですなあ。もっとも、あなたはわたしをよくご存じない。やがても少し意気投合するようになるでしょう」
「あなたは、われわれが意気投合するなんて、考えてるんですか？」
「なぜそうならないと言い切れます？」スヴィドリガイロフはにやりと笑ってこう言うと、立ち上がって帽子を取った。「わたしも実は、是が非でもあなたをわずらわそうという気はなかったのです。で、こっちへ来る道々も、さほどあてにしてはいませんでしたよ。もっとも、今朝ほどあなたの顔を見て、はっと思うには思ったのですがね……」
「今朝どこで僕をごらんになったんです？」とラスコーリニコフは不安げに尋ねた。
「偶然のことでね……わたしはどうもあなたを見てると、何か自分に似通ったところがあるような、そんな気がしてならないんです……しかし、どうかご心配なく。わたしはしつこい人間じゃありませんから。いかさまカルタの仲間ともうまを合わすことができるし、遠い親戚にあたるスヴィルベイ公爵という高官にもうるさがられなかったし、ラファエルのマドンナに関する感想をプリルーコヴァ夫人のアルバムに書く腕もあったし、マルファ・ペトローヴナみたいな女とも、七年間ひと足も村を出ないで同棲（どうせい）したし、昔は乾草広場（センナヤ）のヴィャーゼムスキイ公爵の家に泊まったこともあるし、おまけにベルグと一緒に軽気球にも乗って飛んでみるかもしれないという人間なんですよ」
「まあ、いいです、ときに、伺いますが、あなたはじき旅へお発ちになるんですか？」
「旅って？」
「ほら、あの『航海』ですよ……あなた自分で言ったじゃありませんか」
「航海？　あっ、そうだ！……ほんとうにわたしは航海の話をしましたっけ……いや、それは広範な問題ですよ

……だが、もしあなたの尋ねていらっしゃることが、どういうことだかおわかりになったらなあ！」と彼は言い添え、だしぬけに大きな声で引っちぎったように笑った。
「わたしは事によると、航海の代わりに結婚するかもしれないんです。縁談を世話する人がありましてね」
「ここで？」
「そうです」
「いつそんな暇があったんです？」
「それにしても、アヴドーチャ・ロマーノヴナには、ぜひ一度お目にかかりたいと思っています。まじめなお願いです。では、さようなら……あ、そうだ！　だいじなことを忘れていたっけ！　ロジオン・ロマーヌイチ、どうかお妹さんにお伝えください。あの方はマルファの遺言で、三千ルーブリもらえることになっていらっしゃるんですよ。これは全く確かな話なんです。マルファは死ぬ一週間前に、わたしの見てるところで、その処置をしたんですから。二、三週間たったら、アヴドーチャ・ロマーノヴナはその金をお受け取りになれるはずです」
「あなたそれはほんとうですか？」
「ほんとうですとも。どうぞお伝えください。ではごきげんよう。実はわたしの泊まってる所は、ここからごく近いんですよ」
　スヴィドリガイロフは出しなに、戸口でラズーミヒンにぱったり出会った。

二

　もうかれこれ八時だった。二人はルージンより先に行きつこうと、バカレーエフの下宿へ急いだ。
「おい、いったいありゃ何者だい？」通りへ出るとすぐラズーミヒンは尋ねた。
「あれはスヴィドリガイロフだ。妹が家庭教師を勤めているとき、侮辱を加えた例の地主さ。あいつが妹の尻を追い回しやがったために、妹は細君のマルファ・ペトローヴナに追い出され、あすこの家から暇を取らなきゃならなくなったんだよ。そのマルファ・ペトローヴナは、あとでドゥーニャにわびをしたんだがね。今度突然頓死したんだよ。さっきあすこで話していたのは、その女のことさ。なぜだかしらないが、僕はあの男が恐ろしくてたまらないんだ。やつは細君の葬式をすますと、すぐここへやって来たんだが、実に変わった男で、何か決心したことがあるらしいんだ。どうも何か知っているような風だよ……やつを用心して、ドゥーニャを守ってやらなくちゃならない……このことを君に言おうと思ってたところなんだ、いいかい？」
「守る？　あんなやつがアヴドーチャ・ロマーノヴナに対して、何をすることができるものかい？　いや、ロージャ、そういう風に言ってくれてありがとう……よし、よし、大いに守るとも！……だが、どこに住んでるんだい」

「知らない」
「なぜきかなかったんだ？　ちょっ、惜しいことをしたなあ！　もっとも、僕がすぐに探り出してやらあ！」
「君はあの男を見たのかい？」ややしばらく沈黙の後ラスコーリニコフは尋ねた。
「うん、見た。しっかり頭へ入れといた」
「君はあの男を正確に見たのかい？　はっきり見たのかい？」とラスコーリニコフは追及した。
「うん、そりゃはっきりと覚えてるよ。千人からいる中でも見分けられる。僕は人の顔を覚えるのが得意なんだからね」
　二人はまたちょっと黙っていた。
「ふむ！……そうだそうだ……」とラスコーリニコフはつぶやいた。「ねえ、君……僕ちょいとそんな考えが浮かんだんだ……ぼく始終そんな気がするんだが……あれは事によったら、幻想かもしれないな」
「そりゃいったいなんのことだい？　僕は君のいうことがはっきりわからないよ」
「だって、君らはみんなそう言ってるじゃないか」とラスコーリニコフは、薄笑いに口をねじ曲げてことばを続けた。「おれのことを気ちがいだってさ。ところが、いま僕自分でもふいとそういう気がしたんだよ――もしかすると、僕はほんとうに気ちがいで、ただ幻を見ただけかもしれない」
「いったい君それはどうしたというんだ？」
「だって、それは誰にもわからないじゃないか！　実際、僕は気ちがいかもしれないさ。そして、この二、三日の間にあったことは、何もかも想像の産物にすぎないかもしれないよ……」
「ああ、ロージャ！　君はまた頭をめちゃめちゃにされたな！……いったいあの男は何を言ったんだ。何用でやって来たんだ？」
　ラスコーリニコフは答えなかった。ラズーミヒンはちょっとしばらく考えていた。
「まあ、一つ僕の報告を聞いてくれよ」と彼は口を切った。「僕は君のところへ寄ったが、君は寝ていた。それから食事をすまして、ポルフィーリイのところへ出かけたんだ。ザミョートフはやはりまだあそこにいるんだ。僕はすぐあの話を持ち出そうとしたが、根っからうまくいかないんだ。どうしてもほんとうにちゃんと話せないのさ。やつらは、まるで話がわからない、合点がいかない、というようなようすなんだ。が、いっこうまごついたらしいようすもない。僕はポルフィーリイを窓の方へ呼んで、話を始めてみたが、またどうしたわけか、とんちんかんになってしまうのだ。あの男がそっぽを見てると、僕もそっぽを見てるといった風でね。とうとう僕はやつの鼻先へ拳固を突きつけて、親戚としてきさまをたたきなますにしてやるぞ、と言ってやったよ。ところが、やつは唯じろっと僕を見ただけなんだ。僕ぺっと唾をはいて出てしまった。これでおしまいさ。実にどうもばかげてるよ。ザミョートフとは一つも口をきかなかった。ところで僕は、こいつかえってへまをやってしまったぞ、

というような気がしたんだが、階段をおりているうちに、ひょいとある考えが浮かんで、僕の迷いをさましてくれたんだよ。ほかでもない、なんだって僕らはお互いにこうあくせくしてるんだ？　もし君に危険なことか何かあるというなら、そりゃもうもちろん騒がなきゃならないが、実際なんにもないじゃないか！　君はまるでこの事件に風馬牛なんだから、あんなやつらには唾でもひっかけてやりゃいいんだよ。あとであいつらを笑ってやろうじゃないか。もし僕が君だったら、かえってからかってやるんだがなあ。なに、あとでやつら恥ずかしくてたまらなくなるんだから！　くそくらえだ！　あとでまたとっちめてやる方法もあるんだから、今のところは笑ってやろうじゃないか！」

「もちろんそうさ！」とラスコーリニコフは答えた。

『明日になったらなんというつもりだい？』と彼は腹の中で考えた。不思議なことに、『わかった時には、ラズーミヒンはどう思うだろう？』という考えは、今まで一度も彼の頭に浮かばなかったのである。今ふとそれを考えると、ラスコーリニコフはじっと相手の顔をながめた。ポルフィーリイ訪問に関する今のラズーミヒンの報告には、彼はほんのちょっとした興味しか持たされなかった。あれ以来、彼の利害を左右する事情に、あまり多くの増減があったのである！……

　彼らは廊下でぱったりルージンと出会った。ルージンはきっかり八時にやって来て、部屋をさがしているところなので、三人はそろってはいって行ったが、たがいに顔も見合わなければ、会釈もしなかった。青年二人はずんずん先へ通ったが、ルージンは作法を守って、控室で外套を脱ぐのをわざと手間どらせた。プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナは彼を迎えに、すぐさま敷居のところまで出てきた。ドゥーニャは兄と挨拶していた。

　ルージンは部屋へはいると、かなり愛想のいい態度ではあったが、前にもまして容態ぶりながら、婦人たちに挨拶した。もっとも、ちょっとへどもどして、なんといっていいかわからないような様子だった。プリヘーリヤはなんとなく照れた形で、サモワールのたぎっている円テーブルのまわりに、急いで皆に席をすすめた。ドゥーニャとルージンは、テーブルの両端に相対して座を占めた。ラズーミヒンとラスコーリニコフは、プリヘーリヤと向き合うことになったが、ラズーミヒンの方はルージンに近く、ラスコーリニコフは妹の傍にすわった。

　ほんの一瞬間、沈黙が襲った。ルージンは香水のぷんぷんにおう麻のハンケチを悠々と取り出して、君子然とした品位を保ちながらも、傷つけられた自分の面目に対して、十分説明を求めようとかたく決心したような態度で、ちゅんと一つ鼻をかんだ。彼はもう控室にいた時から、このまま外套も脱がずに帰ってしまい、たちどころに二人の婦人に万事を思い知らせ、腹にしみるだけ厳重にこらしめてやろうか、という考えが浮かんだのであるが、さすがに決行はできなかった。その上この男は、はっきりしないことがきらいだったので、この場合、事情闡明の必要があった。かくも露骨に命令がじゅうりんさ

れたところをみると、そこに何かなければならない。してみれば、まずそれを知ることが第一だ。こらしめるのはいつでもできるし、それは彼の手中にあることだ。
「道中べつにおさしさわりもなかったことと存じますが」と彼は改まった口調で、プリヘーリヤに話しかけた。
「おかげさまでね、ピョートル・ペトローヴィッチ」
「何よりけっこうなことで。アヴドーチャ・ロマーノヴナもお疲れにはならなかったですか？」
「わたしは若くって丈夫ですから、疲れなんかいたしませんが、母はよほどつらかったようですわ」とドゥーネチカは答えた。
「どうもいたし方がありませんな。お国名物の道がばか長いんですから。いわゆる『母なるロシア』は偉大なものと相場が決まっておりますので……昨日はお出迎いに行きたいのは山々でしたが、どうしても間に合わせかねましたしだいです。しかし、まあ大した面倒もなくすんだことと思いますが」
「いいえね、ピョートル・ペトローヴィッチ。わたしたちはもうもう、がっかりしてしまったんでございますよ」特別声に力を入れながら、プリヘーリヤは急いで言った。
「もし神様が昨日このドミートリイ・プロコーフィッチを、わたしたちのところへおつかわしくださらなかったら、二人は全く途方に暮れてしまうとこだったんでございますよ。この方が、そのドミートリイ・プロコーフィッチ・ラズーミヒンさんですの」と言いそえて、彼をルージンに紹介した。
「もうお知合いになったようです……昨日」いまいましげにラズーミヒンをしり目にかけて、ルージンはこうつぶやいた。そして眉をしかめながら、黙りこんだ。
いったいルージンは人中にいるとき、見かけはきわめて愛想らしく、また愛想のいいのを得意にしているくせに、ちょっとでも気に食わぬことがあると、たちまち取っときの手をすっかりなくしてしまい、座を賑わす気さくな紳士というより、むしろ粉袋という方が似つかわしくなる、そうした部類に属する人間だった。一同はまた黙り込んでしまった。ラスコーリニコフはかたくなに黙りこくっているし、アヴドーチャはある時機まで沈黙を破らないつもりでいたし、ラズーミヒンは何も話すことがなかった。で、プリヘーリヤはまた気をもみ始めた。
「あの、マルファ・ペトローヴナがおなくなりになりましたねえ。あなたはお聞きになりましたか？」例の取っときの種をまた持ち出しながら、彼女は口を切った。
「そりゃ聞きましたとも。まっさきに聞いて承知しております。それどころか、アルカージイ・イヴァーヌイチ・スヴィドリガイロフが、奥さんの葬式をすますとすぐ、急いでペテルブルグへ向けて出発したことも、お知らせしようと思ってあがったんですよ。少なくとも、わたしの受け取った確実無比な情報によると、そうなんで」
「ペテルブルグへ？　ここへ？」とドゥーネチカは不安らしく問い返して、母親と目を見合した。
「たしかにそうです。そして、出発のあまり急なことや、その前のことを考慮に入れてみると、もちろん何か当て

あってのことですよ」
「まあ！　あの人はまたここでも、ドゥーネチカを困らせるんでしょうかねえ？」とプリヘーリヤは叫んだ。
「わたしが思うには、あなたにしろ、アヴドーチャ・ロマーノヴナにしろ、何も格別ご心配なさることはありませんよ。それはむろんあなたが、あの男と何かの関係をつけよう、という考えさえお出しにならなければですな。わたし自身としても気をつけて、今でもあの男がどこに泊まっているか、捜しておるしだいです……」
「ああ、ピョートル・ペトローヴィッチ、あなたが今どんなにわたしをびっくりおさせになったか、とてもおわかりにならないくらいですよ！」とプリヘーリヤはことばをついだ。「わたしはあの人をたった二度見たきりですけれど、恐ろしい、恐ろしい人のように思われましたよ。なくなったマルファ・ペトローヴナも、あの人が殺したに違いないと、わたしは思い込んでいるほどですの」
「その点はそうばかりも決められないんです。わたしは正確な情報を手に入れていますがね。そりゃあの男が、いわば侮辱というような精神的な影響で、あの事態を早めたかもしれない、その点はわたしもあえて争いはしません。何しろ、あの人物の平素の行状や道徳的傾向に至っては、仰せのとおりですからな。あの男はいま財産を持っているかどうか、マルファ・ペトローヴナがあの男にどれだけのものを残していったか、そこはわたしも知りません。もっともそれはごく短期間にわたしの耳へはいりますがね。けれど、もちろんこのペテルブルグへ来たら、たとえわずかの金でも持っているでしょうから、あの男はたちまち前と同じことをやり出すに相違ありません。あの男はすっかり堕落しきって、道楽に身を持ちくずした随一人なんですからね！　わたしは確たる根拠をもっていうのですが、運悪くも八年前にあの男に惚れ抜いて、借金から救い出してやったマルファ・ペトローヴナは、もう一つ別の点でも、あの男に尽くしているんです。全くあの婦人の尽力と犠牲のおかげで、たしかにシベリア行きになってしまいそうな、ある残虐無類な犯罪事件、いわば怪奇きわまる殺人、といったような分子を交えたものが、きわめて初期のうちにもみ消されてしまったのです。まあ、あれはこんな風な男ですよ、もしご承知になりたければ」
「まあ、なんということでしょう！」とプリヘーリヤは叫んだ。
　ラスコーリニコフは注意深く聞いていた。
「あなた正確な情報を握っていらっしゃるって、それはほんとうですの？」ドゥーニャは相手の腹にこたえるような、きびしい調子で尋ねた。
「わたしはただなくなったマルファ・ペトローヴナから、自分の耳で秘密に聞いたことを言ってるだけなんです。お断りしておきますが、法律上の見地からすると、この事件はすこぶるあいまいなものです。当地にレスリッヒといいまして、小金を貸したり、外の商売にも手を出したりしている外国女がいた、いや、今でもいるらしいのです。このレスリッヒなる女と、スヴィドリガイロフ氏

は、昔から一種きわめて親密な、しかも神秘な関係を持っていたんです。この女のところに遠縁の娘、たしかおしでつんぼだったと思いますが、年のころ十五か、ひょっとすると十四くらいかもしれない、姪が一人おりました。それをこのレスリッヒがむやみに憎んで、箸の上げおろしにもがみがみ叱りつける、いや、それどころか、むごたらしく打ち打擲するんです。それがある時、屋根裏で首をくくっているところを、見つかったわけなんです。娘は自殺と判定されて、型どおりの手続で事はすんだ。ところがあとで、その小娘は……スヴィドリガイロフのために無残な凌辱を受けたと、密告する者があったんです。もっとも、その辺がどうもあいまいなんで。というのは、その密告したやつがやはりドイツ女で、信用のおけないあばずれものなんですからね。それに、厳重な意味で密告というほどのことでもなかったので、結局マルファ・ペトローヴナの尽力と金のおかげで、事件はほんの噂だけですんでしまったのです。とはいうものの、この噂は意味深長なものでした。もちろんあなたはね、アヴドーチャ・ロマーノヴナ、あの家で拷問のために死んだ、下男のフィリップの話をご存じでしょう。六年前、まだ農奴制時代の話です」

「わたしの聞いたのはまるっきり違います。フィリップは自分で首をくくったんだそうですわ」

「それは正にそうです。しかしそれは、スヴィドリガイロフ氏の絶え間のない虐待やせっかんが、あの男にそういう不自然な死に方をさせた、いや、もっと適切に言えば、死ぬるようにしむけたわけなんですよ」

「わたしそんなことは存じません」とドゥーニャはそっけなく答えた。「わたしはただなんだか妙な噂を聞いたばかりですの。つまり、そのフィリップという男は、憂鬱症の気味のある、いわば独習哲学者で、みんなのことばをかりていうと、『本に読まれた』んだそうです。首をくくったのも、スヴィドリガイロフさんに打たれたためじゃなくって、人に冷かされたからだということですわ。わたしがいた時分、あの人は召使の扱いがよくて、みんなもあの人を愛していたくらいですわ。もっとも、フィリップの死んだことでは、あの人を責めてはいましたけれど」

「アヴドーチャ・ロマーノヴナ、お見うけしたところなんだかあなたは、急にあの男を弁護なさりたくなったご様子ですね」あいまいな微笑に口をゆがめながら、ルージンはこう言った。「実際、あの男は女にかけたら煮ても焼いても食えない男ですよ。それには、あの奇怪な最後をとげたマルファ・ペトローヴナが、悲しむべき実例ですからね。わたしはただ、疑いもなくあなた方の眼前に迫っている、やつの新しい計画について、あなたとお母さんにご注意申し上げて、お役に立とうと思ったまでです。わたし一個としては、あの男はまた債権者から監獄へぶちこまれるに違いないと固く信じております。マルファ・ペトローヴナは子供の将来を思って、あの男に何か所有権を移してやろうなんて考えは、毛頭もっちゃおりませんでした。だから、たとえあの男に何か残して

いったにしろ、それはただ必要かくべからざる程度のものだけで、大した価値もない一時のものに違いないから、ああいう習慣をもっている男なら一年ともたないに決まっておりますよ」
「ピョートル・ペトローヴィッチ、どうぞお願いですから」とドゥーニャは言った。「スヴィドリガイロフさんのお話は、もうこれきりにしようじゃありませんか。そんな話を伺ってると、いやあな気がしてまいりますから」
「あの男はつい今し方、僕んとこへ来てたんだよ」ふいにラスコーリニコフは初めて沈黙を破った。
四方から叫び声が起こった。一同は彼の方へひとみを向けた。ルージンさえわくわくし出した。
「一時間半ばかり前、僕が寝ているところへはいってきて、僕を起こして名乗りを上げたんだ」とラスコーリニコフはことばを続けた。「かなりくだけた態度で、愉快そうな風だったよ。そしてなんだか、そのうちに僕と意気投合するものと、すっかり一人であてこんでいたっけ。いろいろ話のあった中で、あの男はしきりにお前と会いたがってね、ドゥーニャ、僕にその仲介をしてくれと頼むんだ。あの男はお前にあることを申し入れたいといって、その内容を僕に打明けたよ。そのほかにね、ドゥーニャ、あの男は確実な話として、マルファ・ペトローヴナが死ぬ一週間前に遺言して、お前に三千ルーブリ残してくれたと、僕に報告したよ。そして、その金はごく近いうちに、お前の手にはいるだろうという話だった」
「まあ、ありがたいこと！」とプリヘーリヤは叫んで、十字を切った。「あの人のためにお祈りしてあげなさいよ、ドゥーニャ、お祈りして！」
「それは全く本当です」とルージンはつい口をすべらした。
「で、で、それからどうだったの？」とドゥーネチカはせきたてた。
「そう、それからあの男のいうには、自分も大して金持じゃない、財産は全部、いま伯母のところにいる子供たちに渡ってしまうのだ。それから、どこか僕の近くに泊まってるとか言ったが、どこだか知らない。聞かなかった……」
「でも、あの人はいったい何を、何をドゥーニャに申し入れるんだろうね？」とプリヘーリヤはおびえ上がって尋ねた。「お前に話したって？」
「ええ、話しました」
「なんなの？」
「あとで言いましょう」
ラスコーリニコフは口を閉じて、茶の方へ手を伸ばした。
ルージンは時計を出して見た。
「わたしは仕事の都合で、おいとましなくちゃなりません。そうすればおじゃまにもならないし」彼はいささかむっとしたような顔つきで、こう言いたしながら、椅子から腰を浮かしかけた。
「いらっしゃらないでくださいまし、ピョートル・ペトローヴィッチ」とドゥーニャは言った。「あなたは一晩

じゅういるつもりで、いらしってくだすったんじゃありませんか。それにあなたはご自分で、何やら母と話したいことがあるって、そう書いていらっしゃるじゃありませんか」
「それは正にさようです。アヴドーチャ・ロマーノヴナ」とルージンは再び椅子に腰をおろしながら、相手に思い知らせるような調子で言ったが、帽子は手に持ったままだった。「わたしは、おっしゃる通り、あなたともご母堂とも、よくお話ししたい考えでおりました。しかも、ごく重要な件に関するお話です。けれどご令兄が、わたしの前ではスヴィドリガイロフ氏の申し出をいうわけにはゆかないとおっしゃる、それと同じりくつで、わたしも……ほかの人の前では……きわめて重要な二、三の件についてお話ししたくもありませんし、またできもしないわけです。それに、あれほど堅くお願いしといたかんじんな点が、実行されていないような始末ですから……」
　ルージンは苦い顔をして、しかつめらしく口をつぐんだ。
「兄が、この会見に同席しないようにという、あなたのご希望を実行しなかったのは、ほかでもありません、わたしがそれを主張したからでございますの」とドゥーニャは言った。「あなたは兄に侮辱されたとかって、お手紙に書いていらっしゃいましたが、それなら猶予なく事情をはっきりさして、お二人に仲直りしていただかなければならないと、こう考えましたの。もしロージャがほんとうにあなたを侮辱したのでしたら、兄はあなたに謝罪しなければなりませんし、またするだろうと思います」
　ルージンはとたんに元気づいてきた。
「アヴドーチャ・ロマーノヴナ、この世の中には、いかに善良な意志をもっていても、忘れられない侮辱があります。何事にも一定の限界があって、それを踏み越えるのは危険な業(わざ)です。一度越したら最後、あとへ返すことはできません」
「わたしが申し上げたのは、その事じゃございませんの、ピョートル・ペトローヴィッチ」と少しじれったそうにドゥーニャはさえぎった。「ようくお考えになってくださいまし。わたしたちの将来というものは、この問題ができるだけ早くはっきりして、円満に解決するかどうか、それだけで決まるんじゃありませんか。わたしは遠慮なくぶっつけに申しますが、そうするよりほか考えようがないのでございます。もしあなたがいくらかでも、わたしを大切に思ってくださいますなら、むずかしいことではありましょうけれど、この話は今日にもすぐ片づけてしまわなければなりません。もう一度申しますが、もし兄に失礼がございましたら、兄がお詫(わ)びをいたしますから」
「あなたがそんな風に問題をおとりになるとは、驚きましたね、アヴドーチャ・ロマーノヴナ」とルージンはしだいにいらいらしてきた。「わたしはあなたを大切に思い、かつ尊敬してはおりますけれど、それと同時に、ご家族のうちの誰かを愛しないということは、きわめてありうべき事柄ですよ。僭越(せんえつ)ながら、あなたの愛という幸

福こそ求めてはおりますが、同時に不可能な義務を負うことはできません……」

「ああ、そんなに了見の狭いことはよしてくださいまし、ピョートル・ペトローヴィッチ」とドゥーニャは情のこもった調子でさえぎった。「そして、わたしがいつも信じていたように、また信じたいと願っているように、あのよく物のわかった上品な人になってくださいまし。わたしはあなたに大切なお約束をいたしました。わたしはあなたの許嫁（いいなずけ）です。だから、この話はどうぞわたしにおまかせくださいまし。そして、わたしに公平な裁きをつける力があるものと、信じてくださいまし。わたしが裁判官の役を引受けるということは、兄にとっても、またあなたにとっても、思いがけない贈物でございます。わたしは今日あなたのお手紙を拝見してから、ぜひこの席に来てくれと兄に頼んでやりました時も、自分の考えは少しも知らせてやりませんでした。ね、とくと合点してくださいまし。もしあなた方が仲直りしてくださらないと、わたしはあなた方ふたりのうち、どちらかを選ばなければなりません。あなたの方からも兄の方からも、問題がそういう風になって来たんですの。わたしこの選択は誤りたくありませんし、また誤ってもならないのです。あなたのためには兄と別れなければなりませんし、兄のためにはあなたと手を切らなければなりません。今わたしは、あの人がわたしの兄かどうかということを、確実に知りたいと思います。そして、知ることができると思います。またあなたについては、わたしがあなたにとって大切な人間かどうか、あなたがわたしを尊重してくださるかどうか、つまりあなたはわたしの夫かどうか、ということをね」

「アヴドーチャ・ロマーノヴナ」ルージンはむっとして言った。「あなたのおことばはわたしにとってあまりにも意味深長です。いや、もっと突っ込んでいいますが、あなたに許していただいているわたしの位置から見て、むしろ心外千万なくらいです。わたしとこの……高慢ちきな青年を同列に扱おうとなさる、心外千万な合点の行かぬ対照のなさり方は、今さら申し上げないとしても、今のおことばでみると、あなたはわたしになすった約束を、破棄する可能を認めておいでなさるわけです。あなたは『わたしか兄さんか』とおっしゃる。してみれば、わたしがあなたにとって大した意味を持っていないことを、思い知らせていらっしゃるわけです……わたしは、おたがいの間に存在している関係からいっても……義務からいっても……そういうことは断じて許容するわけにいきません」

「なんですって！」とドゥーニャはかっとなって「わたしはあなたの利害を、今までわたしにとって大切であったもの、わたしの生活全部だったものと、同列に見なしているんですよ。それだのに、わたしがあなたを十分尊重しないといって、急に腹をお立てになるんですのね！」

ラスコーリニコフは無言のまま、皮肉ににやりと笑った。ラズーミヒンは全身をぴくっとさせた。が、ルージンはこの反駁（はんばく）を頭から相手にしないで、一言一言にいよ

いよ執念ぶかく、いらいらしてきた。まるでしだいに油が乗ってくる、というようなあんばいだった。
「やがて生涯の伴侶になろうという人、つまり夫に対する愛は、兄弟に対する愛を凌駕(りょうが)しなければならないはずです」と彼は教訓的な調子で言った。「いずれにもせよ、わたしは……なにとひとしなみに見られるのはたまりません……先刻わたしは訪問の用向きをご令兄の前では申し上げたくもなし、また申し上げるわけにいかないと主張しましたが、それにもかかわらず、わたしは今一応ご母堂にお願いして、一ばん根本的な、しかもわたしにとって心外千万な点について、ぜひとも事態を闡明(せんめい)いたしたいと思うのです。ご子息は」と彼はプリヘーリヤの方へ向き直った。「昨日ラッスードキン氏……（それとも……確かそうでしたね？　ごめんください、お名前をつい失念しまして……と彼は愛想よくラズーミヒンに会釈した）この方の前で、わたしの考えを曲解して侮辱されたのです。つまり、いつぞやあなたとコーヒーを飲みながら、内輪話の中に申し上げたことですが、世間の苦労を味わった貧しい娘さんとの結婚は、わたしの考えでは、何不自由なく育った娘さんと結婚するよりも、道徳的にも有益なことであるから、夫婦関係の上からいっても有利だと申し上げた、あのことなのです。わたしの見たところでは、ご子息はあなたご自身の通信を基礎として、故意にばかばかしいくらいことばの意義を誇張して、何か悪だくみでも持っているように、わたしを非難なすったのです。プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ、どうかわたしの誤解をといて、安心させてくだされば、わたしはそれをもって幸福といたします。つまり、わたしの言ったことをどんな形で、ロジオン・ロマーヌイチ宛ての手紙にお伝えになったか、一つ聞かせていただきたいものです」
「わたしはもう覚えておりませんので」とプリヘーリヤはへどもどした。「わたしは自分で伺ったとおりに書いてやりましたので、ロージャがあなたになんとお伝えしたか存じませんが……ことによったら、あれがほんとうに何か大げさに申したかもしれません」
「しかし、あなたの暗示がなかったら、ご子息も誇張なさるわけにいかないはずですよ」
「ピョートル・ペトローヴィッチ」とプリヘーリヤはきっとなった。「わたしとドゥーニャとが、あなたのおことばを大して悪い方へとらなかったのは、わたしたちのここへ来ている事が証拠でございます」
「そうだわねえ、お母さん！」と賛成するようにドゥーニャは言った。
「してみると、このこともやはりわたしが悪いわけなんですな！」とルージンはむっとした。
「ピョートル・ペトローヴィッチ、あなたはそういう風に、何もかもロージャをお責めになりますけれど、あなただって、先刻のお手紙に、あれのことで嘘を書いていらっしゃるじゃありませんか」とプリヘーリヤは急に元気づいて、こう言いたした。
「わたしが何か嘘を書いたなんて、そんな覚えはありま

せんな」
「あなたはこう書いておられるのです」ルージンの方をふり向こうともせず、ラスコーリニコフはずけずけと言い出した。「僕がきのう金をやったのは、まさに轢死者の寡婦だったのです。それを寡婦ではなくて、娘にやったのだなんて書いておられる（その娘というのは、僕きのうの日まで見たこともなかったんですよ）。あなたがそれを書かれたのは、僕を家族のものと喧嘩さすためで、そのために陋劣きわまる文句で、自分の知りもしない娘の行状を書き添えたんです。それはみな卑しい陰口というものです」
「失礼ですが」憤怒に身を震わせながら、ルージンは答えた。「あの手紙であなたの性格や行為にまで言い及んだのは、ただそれによって、ご令妹とご母堂の依頼を履行したまでです。つまり、あなたをお訪ねした時の模様はどうだったか、あなたがわたしにどんな印象を与えられたか、そういうようなことを細かく知らせてほしいとのことだったのです。ところで、いま指摘された手紙の文面に関しては、そこに一行でも事実相違の点があったら、見せていただきましょう。つまり、あなたが金を使われなかったかどうか、あの家族はたとえ不仕合せだとはいい条、汚らわしい人間は一人もいなかったかどうか、というような点に関してですな」
「が、僕に言わせると、あなたなんかありたけの美点をかき集めても、あなたがいま石を投げているあの不幸な娘の、小指だけの価値もありゃしない」
「すると、あなたはあの女をご母堂や、ご令妹と一座させるだけの決心がおありですな？」
「それはもう実行しましたよ、もし知りたいとおっしゃれば申しますがね。僕は今日あの娘を、母とドゥーニャと並んですわらせましたよ」
「ロージャ！」とプリヘーリヤは叫んだ。
ドゥーネチカは顔を赤らめ、ラズーミヒンは眉を寄せた。ルージンは毒々しく、高慢ちきににやっと笑った。「アヴドーチャ・ロマーノヴナ」と彼は言った。「ごらんのとおりですから、これじゃ話の折り合うわけがありません。わたしはもうこれで永久に万事了したもの、事情闡明したものと考えさしていただきます。もはやこの上親子兄妹対面のお楽しみや、秘密ご伝達のおじゃまをしないように、遠慮することといたしましょう（と彼は椅子から立ち上がって、帽子を取った）。けれど、帰りがけにあえて注意させていただきますが、こんな出会い、いや、あいまいな妥協は、ごめんこうむりたいものですな。プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ、あなたには特にこの点をお願いしておきます。ましてあの手紙はほかの誰でもない、あなたに宛てたものなんですからな」
プリヘーリヤも少々むっとした。
「あなたはなんですか、わたしたちをご自分の権力で、自由にしようとしていらっしゃるようですね、ピョートル・ペトローヴィッチ。どうしてお望みどおりにしなかったかというわけは、もうドゥーニャが申し上げました。あれはいい考えを持っていたのでございます。それにあ

なたのお手紙は、まるで命令でもなさるような書き方ですもの。いったいわたくしどもはあなたのお望みを、一々命令のように守らなくてはならないでしょうか？　それどころじゃありません、わたしはっきり申し上げますけれど、あなたは今わたしどもに対しては、かくべつ優しく寛大にしてくださらなければならないはずです。だって、わたしたちは何もかも振り捨てて、ただあなたを頼りにここまで出て来たんですもの。してみれば、それでなくても、大方あなたの権力内におかれてるわけじゃありませんか」

「いや、そうばかりでもありませんよ、プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ。ことに今しがた、マルファ・ペトローヴナの遺言状に書かれた、三千ルーブリのご披露があった後ですからな。しかもそれはわたしに対するお話し振りの変わったのから見ても、たいへんいい折だったらしいご様子で」と彼は毒々しく言い足した。

「そのおことばからみますと、ほんとうにわたしどもの頼りない身の上を当てにしていらしったものと、想像してもよさそうですね」といらだたしげにドゥーニャは言った。

「けれども今は少なくとも、そんなことを当てにするわけにいきません。ことにアルカージイ・イヴァーヌイチ・スヴィドリガイロフ氏の秘密な申し出を伝達される、おじゃまをしたくもありません。あの男はご令兄にその全権を委任したわけなんでしょう。わたしの見るところでは、その申し出はあなたにとって重大な意味、いや事によったら、きわめて愉快な意味を持っているのかもしれないようですな」

「まあ、なんということを！」とプリヘーリヤは叫んだ。

ラズーミヒンは椅子にじっとしていられなかった。

「お前これでも恥ずかしくないのかい、ドゥーニャ？」とラスコーリニコフは尋ねた。

「恥ずかしいわ、兄さん」とドゥーニャは言った。「ピョートル・ペトローヴィッチ、とっとと出て行ってください！」彼女は憤怒にさっと青ざめながら、彼の方へふり向いた。

ルージンもこうした結末になろうとは、夢にも思いがけなかったらしい。彼はあまりに自分自身と、自分の権力と、二人の犠牲の頼りない境遇に、希望をかけすぎていたのである。今でもまだ本当にならないほどであった。彼は真っ青になり、唇がわなわなと震え出した。

「アヴドーチャ・ロマーノヴナ、わたしが今こんなはなむけをもらって、この戸口から出てしまったら、その時には――どうか覚悟してください――わたしはもう二度と帰っては来ませんから。ようっくお考えなさい！　わたしの言ったことに変改はありませんぞ」

「なんてずうずうしい！」ドゥーニャはすっくと席を立ちながら叫んだ。「えええ、わたしもあなたに帰って来ていただきたくありません！」

「えっ？　なるほどそうですか！」最後の瞬間までこうした大団円を信じていなかったルージンも、今はまるでつぎ穂を失って、思わずこう叫んだ。「なあるほど、そ

うですか！　しかし、いいですか、アヴドーチャ・ロマーノヴナ、わたしは抗議することだってできますよ」
「あなたはどんな権利があって、娘にそんなことをおっしゃるんです！」とプリヘーリヤは熱くなって割ってはいった。「いったいどんな抗議がおできになるんですの？　いったいどんな権利を持ってらっしゃるんですの？　ふん、あなたのような人に可愛いドゥーニャを上げましょうかい？　さ、出て行ってください、わたしたちにかまわないでいただきましょう！　もともとわたしたち自分の方が悪いんです。こんな間違ったことを思い切ってしようとしたんですからね。とりわけわたしが一ばん悪かったのです……」
「しかし、プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ」とルージンは狂憤のあまり夢中になってしまった。
「あなたはああした約束で、わたしを縛っておきながら、今さらそれを破棄するなんて……そして、そして、おまけに……おまけにわたしはおかげで、余計な失費をさせられたじゃありませんか……」
　この最後の抗議は、あまりにもルージンの性格にはまっていたので、憤怒の発作とそれを押える努力のために、真っ青になっていたラスコーリニコフも、急にがまんし切れなくなり、からからと笑い出した。けれど、プリヘーリヤは思わずわれを忘れてしまった。
「失費ですって？　それはいったいどんな失費なんですの？　まさかあなたは、わたしたちのトランクのことをおっしゃるんじゃありますまいね？　だって、あれは車掌があなたにただで乗せてくれたんですよ。まあ、なんてことでしょう、わたしたちがあなたを縛ったんですって！　まあ正気になってくださいよ、ピョートル・ペトローヴィッチ、それはね、あなたの方がわたしたちの手足を縛ったので、わたしたちがあなたを縛ったのじゃありませんよ」
「もうたくさんよ、お母さん、後生だからもうよして！」とドゥーニャは哀願した。「ピョートル・ペトローヴィッチ、どうぞお願いですから、出て行ってくださいまし！」
「出て行きますとも。ただ最後にたった一言いっておきます！」もうほとんど自制力を失って、彼は叫んだ。「ご母堂はもうすっかり忘れてしまわれたようですが、わたしはあなたのああした風評が、近所近在一円にひろがったにもかかわらず、あなたをもらおうと決心したんですよ。わたしはあなたのために輿論（よろん）を無視して、あなたの名誉を回復してあげたのだから、もちろん、大いばりでその報酬を当てにしても、いや更にあなたの感謝を要求しても、いいわけだと思いますがね……しかし、今ようやく目があけてきました！　ことによると輿論を無視したのは、きわめてきわめて軽率な行為だったかもしれない、それが自分でもわかります……」
「この野郎、頭が二つあるとでもいうのか！」ラズーミヒンは椅子からおどり上がって、今にも制裁を加えようと身構えながら、こうどなりつけた。
「あなたは卑劣な、意地の悪い人です！」とドゥーニャ

は言った。
「何もいうな！　何もするな！」と、ラズーミヒンを押し止めながら、ラスコーリニコフは叫んだ。それから、ぴったり顔を突き合わさないばかりに、ルージンの傍へ進み寄った。「さあ、とっとと出て行ってください！」と彼は低い声で、はっきりことばを分けながら言った。
「もう一言も口をきかないで、さもないと……」
ルージンはややしばらく、憤怒にゆがんだ真っ青な顔をして、じっと彼を見つめていたが、やがてくるりとくびすを転じて、そのまま出て行った。今この男がラスコーリニコフにいだいたほどの憤怒と憎悪は、誰しもめったに感じることがなかったに相違ない。彼はラスコーリニコフを、彼一人のみを、いっさいの原因にしてしまったのである。しかし、ここに特筆しなければならないのは、もう階段をおりて行きながらも、事はまだぜんぜん瓦解してしまったのではないかもしれない、二人の婦人に関しては『十分、十分』回復の見込みさえあると、こんな風に考えたことである。

三

何よりかんじんなのは、最後の瞬間までこうした結末を、夢にも予期しなかったことである。彼はいよいよのどんづまりまで、赤貧洗うがごとき頼りない二人の女が、自分の勢力下から脱出するかもしれないなどと、そうした可能性を想像もしていなかったので、傲然と力み返っていたのである。この信念を手伝っていたのは、彼の虚栄心と、うぬぼれと呼ぶのがもっともふさわしい自信の念であった。雑輩からたたき上げたルージンは、病的なほどうぬぼれがつよく、自分の頭脳と才知を高く評価していた。時とすると一人でそっと、鏡に映る自分の顔に見惚れることさえあった。しかし、彼がこの世の何より愛していたのは、あらゆる方法を尽くしながら粒々辛苦の結果手に入れた自分の金だった。その金こそは彼を引上げて、自分より上にあったあらゆるものと、同列にしてくれたのである。
今さっき彼がドゥーニャに向かって、自分は悪い風評があるにもかかわらず彼女をめとろうと決心したのだと、悲痛な語調でほのめかしたのは、あくまでまじめな気持で言ったのであった。それどころか、ああした「浅ましい忘恩のふるまい」に対して、深い憤懣の情さえも覚えたほどである。もっとも、ドゥーニャに縁談を申し込んだ時には、すでにマルファ・ペトローヴナ自身が、公然とそうした風説を根底からくつがえしてしまい、町

じゅうの人もそんなことなど忘れて、ドゥーニャをかばっていたので、彼もそれが愚にもつかない妄説だということを、十二分に信じていたのである。それに彼自身も、そういう事情をあの当時から知っていたのを、否定するわけにはいかなかったろう。にもかかわらず、彼はドゥーニャを自分と同じ地位まで引上げてやろうとした自分の決断を、やはりどこまでも高く評価し、それを功業のように思っていた。で、今ドゥーニャにこのことを言い出したのも、これまでひたすら愛で慈しみ、内心ひとりで嘆賞していた大事な秘密の想念を表白したわけなので、どうして人がこの功業を嘆賞しないのかと不思議でたまらなかった。もうラスコーリニコフを訪ねて行ったあの時からして、彼は十分に自分の功業の成果を収め、この上もない甘美な謝辞を聞くつもりで、恩人気取りではいっていったものである。で、いま階段をおりながら、彼が自分の真価を認められず、この上ない侮辱を受けたように考えたのは、無理からぬしだいである。

ドゥーニャは彼にとって、もうそれこそなくてならぬものだった。彼女を思い切るなどとは、思いも及ばないことである。もう長い間、五、六年このかた、彼は結婚という事を楽しい空想にしながら、それでも絶えず金をちびちび蓄めて、時節到来を待っていたのである。彼は希望に満ちた気持で、心の深い深い奥の方で、品行がよくて貧乏な（どうしても貧乏でなくてはならない）、若くてきりょうのいい、素性も正しければ教育もあり、しかも浮世の苦労をなめつくして臆病になった娘――あくまで従順な（彼一人だけに）、生涯自分を恩人として敬い崇め、頭も上げないような娘を夢想していた。彼が仕事のひまひまに静かなところで、この魅惑に富んだ楽しいテーマについてどんな甘いエピソードや情景を空想の中に描いたかわからない！　そこへ急に、数年来の空想がほとんど実現されるばかりになった。アヴドーチャ・ロマーノヴナの容色と教養は、彼を驚嘆させ、その頼りなげな境遇は、いやが上にも彼の欲望をそそったのである。しかもそこには彼が空想していたのより、より以上のものさえあった。この娘は誇りが強くて意地があり、品行は模範的で、教養と頭脳の発達は彼以上である（彼はこれを直感した）。しかも、これほどな尤物が一生涯彼の偉業に奴隷的感謝をささげ、彼の前にうやうやしくおのれをむなしゅうする。そして、彼は絶対無限に君臨しようというのである！……ちょうどわざとねらったように、彼はそのちょっと前から、長い熟慮と期待の後に、ようやく根本的に方針を改めて、一層広い活動圏内へ踏み出すと同時に、もう久しい間おぼれるほど憧れていた一段上の社会へも、徐々に移って行こうと決心していた……一口に言えば、彼はペテルブルグへ打って出ようと決心したのである。彼は女というものが仕事の上で、「あくまで、あくまで」助けになることを知っていた。美しく、品性の高い教養ある女性の魅力は、彼の人生行路を飾り、人々を彼の方へひきつけ、彼のために一種の後光となることができる……それが、急に何もかも崩壊しようとしているのだ！　この思いもかけぬ醜悪な決裂

は、彼にとって落雷のような作用をしたのである。それは一種醜悪な悪ふざけだった、ばかげた話だった！　彼はほんの少しいばって見たばかりで、ろくろく言いたいことも言えなかった！　彼はただちょっと冗談をいって、調子に乗り過ぎただけなのだが、こんな重大な結果になってしまった！　おまけに、彼はもう自己一流の愛し方で、ドゥーニャを愛していた。心の中ではもう彼女に君臨していた――しかるに、がぜん！……いや！　明日にも、明日にもさっそく事態を回復し、手当てを加え、修正しなければならない。第一――いっさいの原因たるあのごうまんな乳くさい青二才を、ぺしゃんこにやっつけてやらねばならぬ。それからラズーミヒンのことも、この時病的な感覚とともにわれともなく思い出された……が、しかし、それについては、彼もすぐ安心してしまった。『もちろんあんな男はあいつと十ぱひとからげだ！』けれど、彼が真剣に恐れたのは誰かというと――それはスヴィドリガイロフだった……とにかく、いろんな心労が目の前に控えていたのである……

……

「いいえ、わたしが、わたしが一ばん悪いんだわ！」母を抱きしめて接吻しながら、ドゥーネチカはこう言った。「わたしはあの人のお金に目がくらんだのよ。でも、兄さん、わたし誓って言うわ――わたしはまさかあの人が、あれほど取るに足りない人だとは、夢にも思わなかったわ。もし前からあの人をよく見抜いてたら、どんなことがあっても迷やしなかったんだけど！　兄さん、わたしを責めないでね！」

「神様が救ってくだすったのだよ！　神様が救ってくだすったのだよ！」プリヘーリヤは、いま起こったいっさいのことが、まだはっきり腑に落ちないらしく、なんだか無意識のようにそうつぶやいた。

一同はたがいに喜び合った。五分もたつと、笑い出しさえもした。ただ時々ドゥーネチカが、始終のことを思い浮かべながら、青い顔をして眉を寄せているばかりだった。プリヘーリヤは、自分も一緒になって喜ぼうなどとは夢にも思っていなかった。つい今朝ほどまで、ルージンとの決裂が恐ろしい不幸に思われていたのである。ただ、ラズーミヒンは有頂天になっていた。彼はまだ思い切って十分にその歓喜を表白できなかったが、まるで五プードもある錘が胸から取りのけられでもしたように、まるで熱病やみのように震えた。今こそ彼は自分の全生涯を投げ出して、彼女たちに奉仕する権利を得たわけである……それに、今だって何事が起こるか、しれたものではないのだ！　しかしそれから先の事となると、彼はなおのこと小心翼々として、そういう考えを追いのけ、自分自身の想像を恐れていた。ただ一人ラスコーリニコフはじっと同じ椅子に腰かけたまま、ほとんど気むずかしいといっていいくらいに、放心したような様子をしていた。彼は何よりもまずルージンを遠ざけることを主張しておきながら、今のできごとに誰よりも一ばん興味がないような風だった。ドゥーニャは、兄がまだ自分にひどく腹を立てているのだと考えた。プリヘーリヤは

おどおどと彼の方へ視線を投げていた。
「スヴィドリガイロフは兄さんになんと言って？」とドゥーニャは彼の傍へ近よった。
「あっ、そう、そう！」とプリヘーリヤは叫んだ。
ラスコーリニコフは頭を上げた。
「あの男はどうしても、お前に一万ルーブリ贈りたいというのだ。それについて僕も立会いの上で、一度お前に会いたいというのだ」
「会いたい！　そんなことはこんりんざいできません！」とプリヘーリヤは叫んだ。「よくもこの子にお金を贈りたいなんてそんなことが言えたものだ！」
それからラスコーリニコフは（かなりそっけない調子で）、スヴィドリガイロフと会見の顛末（てんまつ）を物語った。もっとも、余計なことも言いたくなし、また実際必要以外なことには何一つ話頭を向けたくなかったので、マルファ・ペトローヴナの幽霊の話は抜いてしまった。
「で、兄さんはどう返事をなすったの？」とドゥーニャは尋ねた。
「はじめ、お前に伝言などしないと言った。するとあの男は、あらゆる手段を講じて直接会見の目的を達すると声明するのだ。彼の断言するところによると、お前に対する狂気の沙汰（さた）は、あれは一時の迷いだった。今ではお前に対して何も感じちゃいないというのだ……あの男はお前をルージンと結婚させたくないんだよ……まあ、全体としても、なんだかあいまいな話ぶりだった」
「兄さん自身は、あの人をどう解釈なすって？　どんな風にお思いになって？」
「正直、なんにもわけがわからないんだ、一万ルーブリ提供するというかと思えば、自分は金持じゃないという。どこかへ行ってしまうつもりだと言うかと思えば、十分もたたぬうちに、そういったことを忘れてるんだ。それからまた急に、結婚しようと思っている、相手も世話する者がある、とも言ったっけ……もちろん、何か目的はあるに違いない。そして十中八九、ろくなことじゃないだろう。が、それにしても、もしあの男がお前に対して、よくないもくろみを持ってるとすれば、あんなとんまなやり方をしようなんて、ちょっと想像しかねるし……もっとも、僕はお前に代わって、その金はきっぱり断わっといてやったよ。概してあの男は、僕の目には妙に思われたよ……いや、むしろ……発狂の徴候があるようにさえ思われた。しかし、僕だって間違ってないとも限らない。ことによると、それは単に独自なごまかしにすぎないかもしれん。しかし、マルファ・ペトローヴナの死んだことは、あの男にもがんと来たらしい……」
「おお、神様、どうぞあの女（ひと）の魂をお安めくださいまし！」とプリヘーリヤは叫んだ。「わたしはいつまでも、いつまでもあのひとのために祈ります！　ねえ、ドゥーニャ、その三千ルーブリがなかったらわたしたちは今どうなっていたろうね！　ほんにまあ、天からでも降って来たようだ！　どうだろう、ロージャ、今朝わたしたちの手もとにはもう天にも地にも、たった三ルーブリしか残っていなかったんだよ。で、わたしとドゥーニャは時

計でも質に置こうかと、そればかりいろいろ考えたくらいなんだよ。先方から言い出さないうちには、あの男からもらうまいと思ったのでね」

ドゥーニャはスヴィドリガイロフの申し出に、よほどショックを受けたらしく、じっと考えに沈んだまま、いつまでも立ちつくしていた。

「あの人は何か恐ろしいことを考え出したんだわ！」彼女はほとんど震え上がらんばかりに、ささやくような声でひとりごちた。

ラスコーリニコフはこの並々ならぬ恐怖に気づいた。「なんだか僕はまだちょいちょい、あいつと会いそうな気がする」と彼はドゥーニャに言った。

「あいつに気をつけてやりましょう！　僕が居どころを突きとめてやる！」とラズーミヒンは元気よく叫んだ。「ちょっとも目を放すことじゃありませんよ！　ロージャが僕に許可してくれたんですからね。ロージャ自身がさっき僕に『妹を守ってくれ』ってそう言ったんですよ。ねえ、アヴドーチャ・ロマーノヴナ、あなたもお許しくださるでしょうね？」

ドゥーニャはにっこり笑って、彼に手を差し伸べたが、心痛の色はその顔から去らなかった。プリヘーリヤはおずおずと彼女の顔を盗み見ていた。とはいえ、三千ルーブリは明らかに彼女を安心させたらしい。

十五分の後には、一同はおそろしくはずんだ調子で話していた。ラスコーリニコフさえも、自分は話こそしなかったが、しばらくの間は熱心に耳を傾けていた。さかんに熱弁をふるっているのは、ラズーミヒンだった。

「いったいなぜ、なぜあなた方はお帰りにならなきゃならないんです！」彼は陶酔したような風で、歓喜にあふれることばをとうとうと吐き出すのであった。「それに、いなか町で何をなさろうというのです？　何よりかんじんなのは、あなた方がここで一緒にいらっしゃるということです、お互い同士が役に立ち合うってことです――全くどれだけ力になるか、まあ考えてもごらんなさい！

まあ、たとえしばらくの間でもね……そして、どうか僕を友人にしてください。話相手にしてください。そうすれば、嘘じゃありません、それこそすばらしい仕事が始められますよ。まあ、こうなんです、聞いてください、そいつをすっかり詳しくお話ししましょう――その計画をね！　まだ今朝の事で、まだなんにも起こらない前に、僕はふいと頭に浮かべたんですよ……実はこういうわけです。僕には伯父が一人あるんですが（いずれご紹介しますよ。いたってよくできた、なかなか上品ないいじいさんです！）その伯父が貯金を千ルーブリばかり持ってるんですが、自分は恩給で食ってるので、少しも不自由しない。で、伯父はもう二年越し、その金を使ってくれ、利子は年六分でいいからと、しつこく僕を責めるんです。しかし、その機関はわかってるんで、伯父はただ僕を助けたいんですよ。ところが、去年は僕もべつだん必要がなかったが、今年は伯父の出てくるのを待ちかねて、それを借りる決心をしたのです。その上に、あなた方も今度の三千ルーブリだけ提供してくだされば、手はじめと

してはまず十分です。こうしてわたしたちは合資したわけです。ところで、いったいなにをするとお思いになります」

ここでラズーミヒンは、自分の計画の説明に移った。そして、ほとんどすべての書籍や出版業者が、自分の商品の性質をよくわきまえていないから、したがって普通に出版業は成功しないと相場を決められているが、しっかりしたものさえ出せば、必ず収支つぐなって、利潤をあげるばかりか、時々は相当な儲けもあるということを一生懸命に説明した。ラズーミヒンはもう二年から人のために働いて来たし、三か国の欧州語にかなり通じていたので、出版業を始めることは、つねづね空想していたところである。もっとも六日ばかり前に、彼はラスコーリニコフに向かって、ドイツ語はいっこう「ぺけ」だといったが、それは彼に翻訳を半分引受けさせて、三ルーブリの先金を握らせるための方便だった。ラスコーリニコフも、それが嘘なことはよく知っていた。

「どうして、どうしてこの好機を逸するわけにゃゆきません。だって、一ばんかんじんな資本の一つ――つまり、自分の金がちゃんとあるんですもの！」とラズーミヒンは熱くなって言った。「もちろん、たいへんな努力が必要です、しかしわたしたちは働こうじゃありませんか。あなたとね、アヴドーチャ・ロマーノヴナ、それから僕とロジオンと……出版業者の中には、いま非常にいい成績をあげてるのがあるんですからね！　ところで、この事業の根本の基礎となるのは、結局何を訳せばいいか、それをよく知ることなんです。僕らは翻訳もすれば、出版もやり、勉強もやる、何もかも一緒なんです。今なら僕も役に立ちますよ。経験があるんですからね。何しろもう二年も方々の出版屋を歩き回って、やつらの内幕は知り抜いているんです。玄人だって別に神さまじゃありませんよ、全く！　なんだってわざわざご馳走を口の傍まで持ってきてもらいながら、素通りさせる必要があります？　僕はすてきな本を二つ三つ知っています。そいつを翻訳して出版するという案だけに対しても、一冊で百ルーブリずつも取れそうなのを、大切に胸の中に秘めているんですよ。その中の一冊などは、思想だけ五百ルーブリ出すといっても、僕は相手にしたくないくらいですよ。あなた方はどうお思いです？　もし僕が誰かにそんな話をしたら、こんなでくのぼうが！　といって、あるいはまだ疑うかもしれませんね。しかし、印刷とか、用紙とか、販売とかの雑務となったら、それはいっさい僕におまかせなさい！　僕が裏の裏まで承知していますから！　はじめは小体にやって、大きく仕上げるんですな。少なくとも、食ってゆくだけのものはありますよ。どう間違ったって、出した金くらいは戻って来ます」

ドゥーニャの目は輝いた。

「あなたのおっしゃることは、わたしたいへん気に入りましたわ、ドミートリイ・プロコーフィッチ」と彼女は言った。

「わたしはこういう話になると、むろん何もわかりませんけれど」とプリヘーリヤは応じた。「それはけっこう

なことかもしれませんが、これも先の事は誰にもわかりませんでね。なんだか新しいことだものだから、不安心なようでね。もっとも、わたしたちはどうしたって、ここに残らなければなりません、当分の間だけでもね……」

彼女はロージャを見やった。

「兄さんどうお思いになって？」とドゥーニャは言った。

「僕も非常にいい考えだと思うよ」と彼は答えた。「会社を作るなんてことは、もちろん、前から空想すべきことじゃないが、五、六冊の本の出版なら、実際必ず成功さすことができるよ。僕も間違いなく売れる本を一つ知っている。ところで、この男が経営をうまくやってゆくということは、少しも疑いがないね。仕事の頭があるから……もっとも、まだよく相談する暇はあるさ……」

「万歳！」とラズーミヒンは叫んだ。「ところで、ちょっと待ってください。ここに、この家に、同じ主人の持っている住まいがあるんです。それは独立した離れた部屋で、このあいまいな部屋とは通路がなくって、道具つきなんです。家賃も格安で、小さいながら三間あります。まあとりあえずこれをお借りなさい。時計は僕があした質屋へ持って行って、金にして来て上げます。それから先は何もかもうまく行くでしょう。何よりかんじんなのは、三人ご一緒におられるってことです、ロージャも一緒に……おや、ロージャ、君はどこへ行くんだい？」

「まあ、ロージャ、お前もう帰るの？」プリヘーリヤはほとんどぎくりとしたていでこうきいた。

「しかも、こういう時をねらって！」とラズーミヒンは叫んだ。

ドゥーニャは迂乱らしい驚きの色を浮かべながら、兄を見やった。彼の手には帽子があった。彼は出て行きそうにしていたのである。

「なんだかみんなまるで僕の野辺送りをするか、永久の別れでも告げてるようだね」なんとなく奇怪な調子で、彼はこう言った。

にやりと笑ったようでもあったが、それはまた微笑でないようでもあった。

「僕たちが顔を見るのも、これが最後かもしれないからね」と彼はさりげない様子で言い足した。

彼はこれをふと心の中で考えたのだが、どうしたはずみか、つい口へ出てしまったのである。

「まあ、お前はどうしたの！」と母は叫んだ。

「兄さん、あなたどこへいらっしゃるの？」なんとなく妙な調子で、ドゥーニャはこう尋ねた。

「ちょっと、僕どうしても行かなきゃならないんだ」自分の言おうとしたことに動揺を感じるらしい様子で、彼は漠然と答えた。が、その青ざめた顔には、一種きっぱりした決心の色が現われていた。

「僕そう言おうと思ったんです……ここへ来る道々……そう言おうと思ってたんです、お母さん、あなたにも……それからドゥーニャ、お前にも。つまり、僕たちはしばらく別れていた方がいいんです。……僕は気分がすぐれない、心が落ち着かないんです……僕そのうちに来ます、自分で来ます、もし……そうしていい時が来たら。

僕はあなた方を忘れやしません。愛しています……どうか僕にかまわないでください！　僕を一人きりにしといてください！　僕はそう決心したんです、もう前から……それは堅く決心したことなんです……たとえ僕の一身にどんなことがあろうとも、破滅してしまうようなことがあろうとも、僕は一人でいたいんです。僕のことはすっかり忘れてください。その方がいい……僕のことなど問い合せないでください。必要があれば、ぼく自分で来るか……あなた方を呼ぶかします。事によったら、何もかも復活するかもしれません！……けれど、いま僕を愛していらっしゃる間は、どうか思い切ってください……でないと僕はあなた方を憎みます、僕それを感じてるんです……さようなら！」

「まあ、どうしよう！」とプリヘーリヤは叫んだ。

母と妹は激しい驚愕（きょうがく）に打たれていた。ラズーミヒンとても同様だった。

「ロージャ、ロージャ！　仲直りしておくれ、昔通りになろうよ！」と哀れな母親は絶叫した。

彼はのろのろと戸口の方へくびすを転じ、のろのろと部屋から出て行った。ドゥーニャはそのあとを追った。

「兄さん！　いったいお母さんをどうするつもりなんですの！」憤りに燃える目で兄を見つめながら、彼女はさやいた。

彼は重苦しい視線で妹を見た。

「なんでもない、僕はまた来るよ、ちょいちょいやって来るよ！」自分が何を言おうとしているのか、よく意識していないように、彼は小声でこうつぶやくと、ぷいと出てしまった。

「情（じょう）なしのいじわるなエゴイスト！」とドゥーニャは叫んだ。

「あれは――き、ち、が、いです、情なしじゃありません！　あれは発狂してるんです！　いったいあなたはそれがわかりませんか？　それじゃ、あなたの方が情なしです！……」ラズーミヒンは彼女の手を堅く握りしめながら、その耳もとへ口を寄せ、熱した声でささやいた。

「僕すぐ来ますから！」死人のようになっているプリヘーリヤに叫び捨てて、彼は部屋の外へ駆け出した。

ラスコーリニコフは、廊下のはずれで彼を待ち受けていた。

「君が駆け出してくることは、僕もちゃんと知っていたよ」と彼は言った。「二人のところへもどって行って、あれたちと一緒にいてくれ……明日も来てやってくれ……そしていつも。僕は……また来るかもしれない……もしできたら。じゃ失敬！」

こう言うなり、手も差し伸べないで、彼はどんどん離れて行った。

「いったい君はどこへ行くんだい？　君どうしたんだ？　いったいこれはなんとしたことなんだい？　そんなのってあるかい！……」ラズーミヒンはすっかり途方に暮れてつぶやいた。

ラスコーリニコフはもう一度立ち止まった。

「これを最後に言うが、もうけっして何事も僕にきいて

くれるな。僕は何も君に答えることなんかないんだから……僕んとこへ来ちゃいけないよ。もしかすると、僕がやって来るかもしれない……僕を打っちゃっといてくれ……だが、あれたちは見すてないでくれ、わかったかい？」

廊下は暗かった。二人はランプのそばに立っていた。一分ばかり、彼らは黙って互いに顔を見合っていた。ラズーミヒンは生涯この瞬間を忘れなかった。ラスコーリニコフのらんらんと燃える刺し貫くような視線は、あたかも一刻毎に力を増して、ラズーミヒンの魂を、意識を貫くようであった。ふいにラズーミヒンはびくっとした。何か奇怪なものが二人の間をかすめたような感じだった……ある想念が、まるで暗示のようにすべり抜けたのである。何かしら恐ろしい醜悪なものが、突如として双方に会得された……ラズーミヒンは死人のようにさっと青くなった。

「今こそわかったろう？」ふいにラスコーリニコフは、病的にゆがんだ顔をして言った……「ひっ返して、あれたちのところへ行ってくれ」彼は急に言い足してくるりとくびすを返すと、家から外へ出てしまった……

この晩プリヘーリヤのもとであった事の顛末は、今さららしく書きたてまい。ラズーミヒンはひっ返して来ると、二人のものを慰めて、ロージャは病ちゅう静養が必要だ、あれは必ずやって来る、毎日やって来る、彼は非常に健康を害しているから、いらいらさせてはいけない、自分ラズーミヒンは彼によく気をつけて、一流のいい医者をつれて来てやる、それどころか、大勢の医者に立会診察をさせてやる、云々と誓った……一口に言えば、この晩からラズーミヒンは彼らのために息子ともなり、兄ともなったわけである。

四

ラスコーリニコフはいきなりその足でソーニャの住まっている濠端の家をさして行った。それは緑色に塗った古い三階家であった。彼は庭番を捜し当てて、裁縫師カペルナウモフがどこに住まっているか大体の見当を教えてもらった。裏庭の片隅で、狭い真っ暗な階段へ通ずる口を見つけ、彼はやっと二階へ上がった。そして、裏庭の方から二階を取り巻いている廊下へ出た。彼が暗闇の中をうろうろして、カペルナウモフの住まいへはいる口はどこだろうと思案に暮れていると、ふいに彼から三歩ばかり離れたところで、何か戸のようなものが開いた。彼は機械的にそれへつかまった。

「誰、そこにいるのは？」と不安らしい調子で女の声が問いかけた。

「僕です、あなたのところへ」とラスコーリニコフは答えて、思いきり小さな入り口の間へはいって行った。

そこには、ぺちゃんこになった椅子の上に、ひん曲がった銅の燭台にさしたろうそくがとぼっていた。

「あなたでしたの！　まあ！」とソーニャは弱々しい声で叫び、釘づけにされたように立ちすくんだ。

「あなたの部屋はどう行くんです？　こっちですか？」

こう言ってラスコーリニコフは、彼女の方を見ないようにしながら、大急ぎで部屋へ通って行った。

しばらくたって、ソーニャもろうそくを持ってはいってきた。そして、ろうそくを下へ置くと、思いがけない彼の訪問に驚かされたらしく、名状し難い興奮のていで、途方にくれたように彼の前に立っていた。と、にわかに紅の色がさっとその青白い顔にさし、目には涙さえにじみ出してきた……彼女は忌まわしくもあれば、恥かしくもあり、また甘い気持でもあった……ラスコーリニコフはつと顔をそむけ、テーブルに向かって椅子に腰をおろした。その間に彼はちらと一目で、部屋の様子を見てとることができた。

それは広いけれどいたって天井の低い部屋で、カペルナウモフが貸しに出している唯一の部屋だった。左手の壁に、その住まいへ通ずるしめきりの戸口があった。反対の側に当たる右手の壁には、いつもぴったりしめきりになっている、もう一つの戸口があった。そこはもう番号の違った隣りの住まいである。ソーニャの部屋はなんとなく物置きじみていて、恐ろしく不揃いな四辺形をしていたが、それがこの部屋に一種不具的な感じを与えるのであった。掘割に面した窓の三つある壁は、部屋を斜めに横切っているので一方の隅はひどい鋭角をなし、鈍い灯りではよく見分けられないほど奥深くはいり込んでいるのに反して、いま一方の隅はみっともないほど鈍角になっている。この大きな部屋全体に家具らしいものはほとんどなかった。右手の隅に寝台があって、その傍には戸口に近く椅子が一つ置いてあった。寝台のある壁に沿うて、よその住まいへ通ずる戸口のすぐ傍に、青いクロースのかぶせてある粗末な荒削りのテーブルがあっ

て、その回りには籐椅子が二つ置かれてあった。それから、反対側の壁に沿うて鋭角をした隅に近く、小さな雑木のたんすがからんとしたなかに置き忘れられたように立っていた。それがこの部屋にあるすべてであった。すれてぼろぼろになった黄ばんだ壁紙は、隅という隅が黒くなっている。定めし冬になると湿っぽく、炭酸ガスでもこもるに違いない。貧しさは一目でわかった。寝台のかたわらにすらカーテンがないほどであった。

ソーニャは無言のまま、注意深く無遠慮に部屋をじろじろ見回す客を、じっとながめていたが、しまいにはまるで裁判官か、自分の運命を決する人の前にでも立っているように、恐ろしさのあまりわなわな震え始めた。

「僕こんなに遅く……もう十一時でしょう？」やはり彼女の顔へは目を上げず、彼は尋ねた。

「ええ」とソーニャはつぶやいた。「あっ、そう、そうですわ！」まるでこの一言に救いがあるように、彼女は急にあわてて言った。「いま仕立屋さんのところで時計が打ちましたわ……わたし自分で聞きましたから……そうでございます」

「僕があなたのところへ来るのはこれが最後です」ここへ来たのは今が初めてなのに、ラスコーリニコフは気むずかしげな調子でことばをついだ。「僕はもしかすると、もうあなたにお目にかかれないかもしれません……」

「どこかへ……いらっしゃいますの？」

「わかりません……何もかも明日の事です……」

「では、明日カチェリーナ・イヴァーノヴナのところへも、いらしってくださいませんの？」ソーニャの声はぴくりと震えた。

「わかりません。何もかも明日の朝です……いや、しかし問題はそんなことじゃない。僕は一こと言いたいことがあって来たんです……」

彼は彼女の方へ物思わしげな視線を上げた。と、急に初めて、自分は腰をかけているのに、相手はまだずっと立ちどおしでいることに、ふと気がついた。

「なんだって立ってらっしゃるんです？　おかけなさいよ」彼は急に調子を変えて、穏やかな優しい声でそう言った。

彼女は腰を下ろした。彼は愛想のいい同情のこもったまなざしで、一分ばかり彼女を見つめていた。

「あなたはなんてやせてるんでしょう！　あなたのまあ、この手はどうでしょう！　まるで透き通るようだ。さわったらまるで死人のようだし」

彼は女の手をとった。ソーニャは弱々しげににっこりほほえんだ。

「わたしいつもこうでしたの」彼女は言った。

「家にいる時から？」

「ええ」

「いや、そりゃむろんだ！」彼はちぎれちぎれにこう言った。と、その顔の表情も声の響きも、また急に変わってしまった。

彼はもう一度あたりを見回した。

「この部屋はカペルナウモフから借りてらっしゃるんで

すか？」
「さようでございます……」
「それはあちらに、ドアの向こう側にあるんですか？」
「ええ……あちらにもやっぱりこれと同じ部屋がございますの」
「みんな一つ部屋に？」
「ええ、一つ部屋に」
「僕はこんな部屋にいたら、夜はさぞこわいだろうと思いますね」と気難かしげな調子で彼は言った。
「うちの人はそれはいい人たちですから。それはそれは優しい」まだなんとなくわれに返りかねて、よく前後が考え合されない様子で、ソーニャは答えた。「それに道具もみんな、何もかも……何もかも仕立屋さんのものですの。みんなたいへんいい人で、子供たちもしょっちゅうわたしのところへ遊びにまいりますの……」
「それはどもりの子供でしょう？」
「ええ……亭主はどもりでびっこでございます。おかみさんもやはり……どもるというほどでもないんですけど、なんだかすっかり皆まで言わないようなぐあいですの。おかみさんはそれはそれはいい人ですわ。主人はもと地主の邸（やしき）に奉公していた百姓出で、子供が皆で七人あります……ただ一ばん上のがどもるんですけど、あとの子はただ病身なだけ……別にどもりはいたしません……でも、そんなことどこからお聞きになりまして？」彼女はやや驚いた風でこう言いたした。
「あの時あなたのお父さんが、すっかり僕に話してくだすったのです……お父さんはあなたのこともみんな話してくれましたよ……あなたが六時に出かけて行って、八時過ぎに帰って来たことも、カチェリーナ・イヴァーノヴナがあなたの寝台のかたわらに膝（ひざ）を突いていたことも」
　ソーニャはどぎまぎした。
「わたし今日あの人を見たような気がしましたの」と彼女は思い切り悪そうにささやいた。
「誰を？」
「父ですの。わたし通りを歩いていました。すぐ近所の角のところで、九時過ぎでしたわ。すると、父が前の方を歩いてるようなんですの。それがまるで父そっくりなんですもの。わたし、カチェリーナ・イヴァーノヴナのところへ行こうかと思ったくらいですわ……」
「あなたは散歩してたんですか？」
「ええ」とソーニャはまたどぎまぎして目を伏せながら、引っちぎったように答えた。
「だってカチェリーナ・イヴァーノヴナは、ほとんどあなたを打たないばかりだったそうじゃありませんか、お父さんのところにいる時分？」
「まあ、とんでもない、まああなた何をおっしゃいますの、違いますわ！」とソーニャは何やらおびえたように、彼の顔をみつめた。
「じゃ、あなたはあの人を愛してるんですか？」
「あのひとを？　ええ、そりゃあ――もう！」突然切なそうに両手を組み合せながら、ソーニャは哀れっぽくこ

とばじりをひいた。「ああ！　あなたはあのひとを……もしあなたがあのひとをご存じでしたら。だってあの人はまるで子供なんですもの……だってあのひとはまるで頭が狂ったみたいになってるんですもの……苦労しすぎたせいで。まあ、もとはどんなに賢い人だったでしょう……どんなに気持の広い人だったでしょう……どんなに優しい人だったでしょう！　あなたはなんにも、なんにもご存じないんですわ……ああ！」

ソーニャはまるで絶望したもののように、わくわくして身をもだえ、手をもみしだきながら、これだけのことを言った。彼女の青白い頬はまたぱっと燃えて、目には苦痛の色が現われた。察するところ、彼女の心の琴線にいろいろ激しくふれることがあって、何かを表現し、物語り、弁護したくてたまらないらしかった。何かしら飽くことを知らぬ同情が（もしこういう表現が許されるなら）、突然彼女の顔の輪郭にくまなく描き出された。

「ぶったなんて！　いったいあなたは何をおっしゃるんですの！　まあ、ぶったなんて！　またかりにぶったにしても、それがなんですの？　ねえ、それがなんですの？

あなたはなんにも、なんにもご存じないんですわ……あの人はそりゃ不仕合せな人ですの。ああ、なんて不仕合せな人でしょう！　しかも病身なんですもの……あのひとは公平ってものを求めているんですわ……あのひとは清い人なんですの。あのひとは、何事にも公平というものがなくちゃならないと信じ切って、それを要求しているんですの……たとえあのひとはどんなに苦しい目にあっても、曲がったことなんかいたしません。あのひとはね、世の中のことが何もかも正しくなるなんて、そんなわけにゆかないってことに、自分じゃてんで気がつかないで、そしていらいらしてるんですの……まるで子供ですわ、まるで子供ですわ！　けども、あのひとは正しい人ですわ、正しい人ですわ！」

「ですが、あなたはどうなるんです？」

ソーニャは反問するような目つきで相手を見た。

「あの人たちはみんなあなたの肩へかかってきたわけじゃありませんか。もっとも、そりゃ前だってあなたにかかっていたにゃ相違ない。それに、なくなったお父さんも酒代をねだりに、あなたのところへちょいちょい来たという話ですからね。ねえ、そこでこれからどうなるんです？」

「わかりませんわ」とソーニャは沈んだ調子で答えた。

「皆あそこにずっと続けているんですか？」

「さあわかりませんわ、あの家には借りがあるんですものね。現に今日もおかみさんが立ちのいてもらいたいと言ったところ、カチェリーナ・イヴァーノヴナも、もう一刻だっていたくないと言ったんだそうですの」

「どうしてあのひとはそんなにいばってるんです？　あなたを当てにしてるんですか？」

「ああ、いけません、そんな風におっしゃらないでください！……わたしたちは一つ家のもので、一緒に暮らしてるんですもの」ソーニャは急にまた興奮し、いらいらさえしてきた。それはちょうどカナリヤか何か、そ

うした小鳥が、腹を立てたらこうもあろうかと思われるようなぐあいだった。「それに、あのひとはどうしたらいいのでしょう！　どうしたら、いったいどうしたらいいのでしょう？」と彼女は熱くなって興奮しながら、たたみかけて尋ねた。「それに今日だっても、あのひとはどんなに泣いたことでしょう！　あのひとは頭がめちゃめちゃになっていってるんですの。あなたはそれにお気がつきませんでした？　頭がめちゃめちゃになっているんですの。明日は何もかも式どおりにしたい、前菜や いろんなものをそろえなくちゃ、などと子供みたいに気をもんでいるかと思うと……両手を折れるようにもんだり、血を吐いたり、泣いたりして、今度は急にやけになったように、壁へ頭をぶっつけようとしたりするんですの。ところが、そのうちに気がしずまってくると、あのひとは今だにあなたを頼りにしましてね、今あの人はわたしの助け船だ、なんて申すんですの。それから今度は、どこかで少しお金を工面して、わたしと一緒に自分の生まれた町へ帰って、いいところのお嬢さん方を入れる寄宿学校を建てて、わたしをその舎監にする、こうして、まるっきり別な美しい生活を始めるんだなどと言って、わたしを接吻したり、抱きしめたり、慰めたりしてくれるんですの。だって、すっかり信じ切ってるんですもの！　そんな夢みたいなことを信じてるんですもの！　だけど、どうして、あのひとに逆らうことができましょう？　今日なども、いちんち自分で掃いたり、ふいたり、つくろったり、あの弱い力でたらいを部屋の中へ引っ張り込んだりしたあげく、とうとう息を切らして、床の上へぱったり倒れてしまったんですの。でもまだ今朝はわたしあのひとと二人で、ポーレチカとレーナの靴を買いに市場へ行って来たんですよ。もうすっかり破けてしまったものですから。ところが、胸算用して行ったのに、お金が足りなかったんですの。とても足りなかったんですの。あなたはご存じありませんけれど、あのひとはなかなか好みがあるもんですから、それはしゃれた可愛い靴を選ったんですの……でね、いきなりその店さきで、商人たちのいる前で、お金が足りないって泣き出すじゃありませんか……ああ、わたしそれを見ているのが、どんなに気の毒だったでしょう」

「そりゃそのはずですよ、あなた方が……そういう暮らしをしておられる以上……」とラスコーリニコフは、苦い薄笑いを浮かべて言った。

「まあ、いったいあなたは可哀想じゃないんですの？　可哀想じゃないんですの？」とソーニャはまたもや椅子からおどり上がるようにした。「だってあの時あなたは、まだなんにもごらんにならないうちから、ありたけのお金を恵んでくだすったじゃありませんか。ですもの、もし何もかもごらんになったら、ああそれこそどうでしょう！　わたしは幾度、ほんとに幾度、あの人を泣かせたことでしょう！　つい先週だってそうでしたわ！　ああ、わたし、なんて人間でしょう！　父のなくなるつい一週間前のことでした。わたしはむごたらしい仕打ちをしましたの！　それは幾度、幾度、したかわからないく

らいですわ。ああ、今日も今日とてそれを思い出して、一日どんなに苦しかったかしれませんわ！」
　ソーニャは思い出の苦しさにたえかねて、こういいながら両手をもみしだいた。
「それはあなたがむごたらしい人だとおっしゃるんですか？」
「ええ、わたしですわ、わたしですわ！　わたしがその時参りますと」と彼女は泣きながらことばを続けた。「なくなった父がこう申しますの。『ソーニャ、わしに本を読んで聞かせてくれんか。なんだか頭痛がして仕方がない。読んでくれ……ほら、この本だよ』といって何かの本を出しました。それはすぐ隣りに住んでいるアンドレイ・セミョーヌイチのところで――レベジャートニコフのところで借りてきたんですの、いつもそんな滑稽本（こっけいぼん）を借りてきていましたわ。その時わたしは、『もう帰る時刻ですもの』と言って、そのまま読もうとしなかったんですの。わたしがその時寄ったのは、ただカチェリーナ・イヴァーノヴナに襟を見せたいのが主だったんですもの。古着屋をしているリザヴェータが、襟と袖口（そでぐち）を安く持って来てくれたんですけどね、それはきれいな、まだまだ新しい品で、模様がついていますの。すると、たいへんカチェリーナ・イヴァーノヴナの気に入りましてね、自分でかけて鏡に映してみたりして、それこそもうすっかり気に入ってしまったんですもの。そして、『わたしにおくれよ、ソーニャ、後生だから』っていうじゃありませんか。『後生だから』といったんですもの、よくよく欲しかったものとみえますわ。だって、あのひとがそんなものを掛けたって仕様がないじゃありませんか？　ただなんとなしに、昔の幸福な時代が思い出されたんですわね！　あのひとは自分の姿を鏡に映して、つくづくと、見とれてたんですけど、着物なんて何一つないんですの、持物なんて何一つありゃしません、もうなん年も前から！　でもあのひとはこれまでついぞ一度も、人にものをねだったことはありませんでした。気位の高い人で、かえって自分の方から、なけなしのものでもやってしまうたちなんですの。それが急にくれというのですから、よくよく気に入ったものに相違ありませんわ！　ところが、わたしは上げるのが惜しかったんですの。『あなたに上げたって、仕様がないじゃありませんか、カチェリーナ・イヴァーノヴナ？』ほんとうにそう言ったんですのよ。『仕様がないじゃありませんか』って。全くこれこそほんとうに余計なことだったんですわね！　すると、あのひとはじっとわたしをみつめました。わたしが断ったのが、つらくてつらくてたまらなくなったのでございます。ほんとに見ているのも気の毒なくらい……それは襟のためにつらかったのじゃなくて、わたしが断ったそのためなんですの。わたしちゃんとわかりましたわ。ああ、今となると、何もかももう一度元へもどして、やり直しができたらと思いますわ。前（せん）に言ったことをすっかり……ああ、わたしは……え、どうなさいまして！……だってこんなこと、あなたにはどうだって同じじゃございませんの！」

「あの古着屋のリザヴェータを知ってますか？」
「ええ……では、あなたもご存じでしたの？」やや驚いたさまで、ソーニャは問い返した。
「カチェリーナ・イヴァーノヴナは肺病です、しかも質(たち)の悪い方です。あのひとは間もなく死にます」
ラスコーリニコフはしばらく無言の後、彼女の質問には答えないでそう言った。
「いいえ、違います、違います、違います！」
こう言って、ソーニャは無意識に彼の両手を握った。それは、どうかそんなことのないようにしてくれと、哀願でもするような風情(ふぜい)だった。
「だって、その方がいいじゃありませんか、なくなった方が」
「いいえ、よかありません、よかありません、けっしてよかありませんわ！」と彼女はおびえたように、口を突いて出るままくり返した。
「だが、子供たちは？　もしそうなったら、あなたはどこへ子供らをやるつもりです、あなたのところでないとすると？」
「ああ、わたしもうわかりませんわ！」とほとんど絶望の調子でソーニャは叫ぶと、いきなり両手で頭をかかえた。
察するところ、この考えはもう幾度も幾度も、彼女自身の頭にひらめいたもので、彼はただそれをまたつっつき出したのにすぎないらしかった。
「したが、もしあなたが、今まだカチェリーナ・イヴァーノヴナの生きてるうちに、病気にかかって病院送りになったら、その時はどうします？」と彼は容赦なく問いつめた。
「ああ、あなたは何をおっしゃるんですの、何をおっしゃるんですの！　そんなことこそあろうはずがありませんわ！」
こう言ったソーニャの顔は、恐ろしい驚愕(きょうがく)にゆがんだ。
「どうしてあろうはずがないんです？」とラスコーリニコフは残酷な薄笑いを浮かべながら、ことばをついだ。「あなただって保証されてるわけじゃないでしょう？　もしそうなったら、あの人たちはどうなるんです？　一家族ぞろぞろ往来へ物乞いに出かける。あのひとはごほんごほん咳(せき)をして、袖乞(そでご)いをする。そして今日のように、どこかの壁へ頭をぶっつけ始める、子供らは泣く……やがてあのひとはたおれて警察へ運ばれる。それから病院送りになって死んでしまう。ところで、子供らは……」
「ああ、違います……そんなことは神様がおさせになりません！」しめつけられたソーニャの胸からやっとこれだけのことばがほとばしり出た。
彼女はことばに出さぬ哀願に両手をあわせ、まるでいっさい彼の意志で左右されることであるかのごとく、祈るような目つきで彼の顔を見ながら、じっと聞いていた。
ラスコーリニコフは立ち上がり、部屋の中を歩き始めた。一分ばかり過ぎた。ソーニャは恐ろしい悩みに、手と首とをぐったりたれたまま、そこに立ちつくしていた。

「貯金することはできないですか？　万一の時の用意にのけておくことは？」ふいに彼女の前に立ち止まりながら、彼はこう尋ねた。
「いいえ」とソーニャはささやいた。
「もちろん、だめでしょう！　しかし、ためしてみたことがありますか？」と彼は心もちあざけるような調子で言い足した。
「やってみましたわ」
「そして、もち切れなかったんですね！　いや、そりゃ知れきった話だ！　聞いてみるがものはありゃしない！」
　彼はまた部屋の中を歩き出した。また一分ばかり過ぎた。
「毎日もらうわけじゃないんでしょう？」
　ソーニャは前よりいっそうどぎまぎした。紅（くれない）が再びさっと顔を染めた。
「いいえ」彼女はせつない努力をしながら、ささやくように答えた。
「ポーレチカもきっと同じ運命になるんだろうな」と彼はだしぬけにこう言った。
「いいえ！　いいえ、そんなことのあろうはずがありません、違います！」とソーニャは死にもの狂いの様子で、まるで誰かふいに刀で切りつけでもしたかのように叫んだ。「神様が、神様がそんな恐ろしい目にはおあわせになりません！」
「だって、ほかの人にはあわせてるじゃありませんか」
「いいえ、いいえ！　あの子は神様が守っていてくださいます、神様が！……」と彼女はわれを忘れてくり返した。
「だが、もしかすると、その神様さえまるでないかもしれませんよ」一種の意地悪い快感を覚えながら、ラスコーリニコフはそう言って笑いながら、相手の顔を見やった。
　ふいにソーニャの顔には恐ろしい変化が生じ、その上をぴりぴりとけいれんが走った。ことばに現わせない非難の表情で、彼女はじっと彼を見つめた。何かものいいたげな様子だったけれど、一言も口をきくことができないで、ただ両手で顔を隠しながら、なんともいえぬ悲痛なすすり泣きを始めた。
「あなたは、カチェリーナ・イヴァーノヴナの頭がめちゃめちゃになりかかってるとおっしゃったが、あなたご自身の頭だって、めちゃめちゃになりかかってるんですよ」しばらく無言の後に、彼はこう言った。
　五分ばかり過ぎた。彼は絶えず無言のまま、彼女の方は見ないようにしながら、あちこち歩き回っていた。やがてついに彼女の傍へ近づいた。彼の目はぎらぎらと光った。彼は両手で女の肩を押えて、ひたとその泣き顔に見入った。彼のまなざしはかさかさして、しかも燃えるように鋭く、唇はわなわなと激しく震えていた……突然彼はすばやく全身をかがめて、床の上へ体をつけると、彼女の足に接吻した。ソーニャは愕然（がくぜん）として、まるで相手が気ちがいかなんぞのように、彼から一歩身を引いた。

じっさい、彼はまるっきり気ちがいのような目つきをしていた。
「あなたは何をなさるんです、何をなさるんです？　わたしなんかの前に！」と彼女は真っ青になってつぶやいた。と、急に彼女の心臓は痛いほど強く強くしめつけられた。
　彼はすぐ立ち上がった。
「僕はお前に頭を下げたのじゃない。僕は人類全体の苦痛の前に頭を下げたのだ」彼はなんとなくけうとい声で言い、窓の方へ離れた。「実はね」一分ばかりたって、また彼女の傍へもどって来ながら、彼はつけ足した。「僕さっきある無礼なやつに言ってやったよ。そいつなんかは、お前の小指一本の値打ちもないって……それからまた、きょう僕が妹をお前と並んですわらせたのは、妹に光栄を与えたわけだって」
「まあ、あなたは何をおっしゃいましたの！　しかもお妹さんの前で？」とソーニャはおびえたように叫んだ。
「わたしと並んでかけるのが！　光栄ですって！　だってわたしは……けがれた女じゃありませんか……ああ、あなたはまあ何をおっしゃったんでしょう！」
「僕はお前の不名誉や、罪悪に対してそういったのじゃない、お前の偉大なる苦痛に対していったのだ。ところで、お前が偉大なる罪人（つみびと）だってことは、そりゃそのとおりだ」と彼は感激に満ちた調子で言い足した。「お前が罪人なわけは何よりも第一に、役にも立たぬことに自分を殺したからだ、売ったからだ。これが恐ろしいことでなくてなんだろう！　そうとも、それほど憎んでいるこの泥沼の中に住んでいて、しかも同時に、ちょっと目を開きさえすれば、こんなことをしていたって誰を助けることにもならないし、どんな不幸を救うことにもならないのを、自分でもちゃんと知っているんだもの。これが恐ろしいことでなくてなんだろう！　それに、第一ききたいことがある」と彼はほとんど狂憤に近い様子で言った。「どうしてそんなけがらわしい卑しいことと、それに正反対な神聖な感情が、ちゃんと両立していられるんだろう？　いっそまっさかさまに水の中へ飛び込んで一思いに片づけてしまった方がずっと正しい、千倍も正しい、りこうなやり方じゃないか！」
「じゃ、あの人たちはどうなりますの？」とソーニャは悩ましげに、けれど同時に、彼のこうした提議にべつだん驚いた様子もなく、相手をちらと見上げて、弱々しい声でこう問い返した。
　ラスコーリニコフは不思議な顔をして彼女を見やった。
　彼はいっさいのことを、彼女のまなざし一つに読んだのである。してみると、この考えはじっさい彼女自身にも前からあったのだ。事によったら、彼女はもう幾度も絶望のあまり、どうしたらひと思いに片づけることができようかと、真剣に考えたのかもしれない。いま彼のことばを聞いても、かくべつ驚くこともないくらい、真剣に考えたのかもしれない。彼女は相手のことばの残酷なことにすら、気がつかなかったのである（彼の非難の意

味にも、彼の汚辱に対する彼女の特殊な見方の意味にも、彼女はもちろん気がつかなかった。そして、それは彼にもわかっていた)。けれど、この浅ましい恥ずべき境遇を思う心が、もう以前から悪夢のように激しく彼女を苦しめ、さいなんでいたことは彼も十分に了解した。今日の日まで、一思いに死のうという、彼女の決心をひかえさす力を持っているのは、はたしてなんであるか？　それを彼は考えた。と、その時初めて、あの哀れな幼いみなし児たちと、半気ちがいのようになって頭を壁へぶっつけたりする、あのみじめな肺病やみのカチェリーナが、彼女にとっていかなる意味を持っているかを悟ったのである。

しかしそれにしても、これだけの気性をそなえ、曲がりなりにも教育を受けているソーニャが、どんなことがあろうとも今のままでいられないのは、彼も明瞭にわかっていた。なぜ彼女があまりにも長い間、こうした境遇に甘んじていられたのか？　身投げすることができなかったとすれば、どうして発狂せずにいられたのか？――これはなんといっても彼には疑問だった。もちろん、ソーニャの位置は不幸にして、唯一の例外とはけっして言えないながらも、とまれ社会における偶然の現象である。その点は彼も了解していた。けれどもつまりこの偶然性と、彼女の受けた多少の教育と、彼女のそれまで送ってきた生活などは、この忌まわしい道へはいる第一歩において、たちまち彼女を殺す原因となりえたはずである。いったいなにが彼女を引き止めているのか？　まさか淫蕩の味ではなかろう！　そんなことはない、この汚辱はただ機械的に彼女に触れたのみで、まだ真の淫蕩は一しずくも彼女の心にしみ込んではいない。彼はそれを見てとった。彼女はまのあたり彼の前に立っているではないか……

『彼女の取るべき道は三つある』と彼は考えた。『濠へ身投げするか、ふうてん病院へはいるか、それとも……それとも最後の方法として、理知をくらまし心を化石させる、淫蕩のただ中へ飛びこむかだ』最後の想像は彼にとって、もっとも忌まわしいものであった。けれど、彼はあまりに懐疑派であり、若年であり、抽象家であり、したがって残酷であったから、最後の解決すなわち淫蕩が、何よりも一番ありうべきことと信じないわけにゆかなかった。

『しかし、いったいそれが真実なのだろうか』と彼は心の中で叫んだ。『今だに心の清浄を保って来たこの少女も、はたして最後にはあの汚らわしい悪臭に満ちた穴の中へ、意識しながら引き込まれてゆくのだろうか！　いったいその緩慢な堕落はすでに始まっているのだろうか？　そして、彼女が今までそれをがまんしていられたのも、この悪行がそれほどいとわしいものに思われなくなったからだろうか？　いや、いや、そんなことがあろうはずはない！』と彼は先ほどソーニャが叫んだ通りに、心の中でこう叫んだ。『いや、今まで身投げから彼女を引き止めていたのは、罪という観念だ。そしてあの人たちだ……もし彼女が今まで気が狂っていないのなら……

しかし、彼女の気が狂っていないなんて、そもそも誰が言った？　いったい彼女は健全な判断力を持っているだろうか？　健全な判断力を持っていて、さっきいったような、あんなことがいえるだろうか？　いったい彼女の持っているあんな考え方ができるだろうか？　滅亡の深淵のふちに――もうそろそろ自分を引きずり込みかけている臭い穴の上に立って、危険の警告されているのを聞こうともせず、手を振り耳をおおっているなんてことが、いったいまあできるものだろうか？　ひょっとしたら、何か奇跡でも待っているのじゃなかろうか！　いや、確かにそうだ。はたしてこうしたいろいろの事実は、発狂の徴候でないといわれるか？』

彼はしつようにこの想念を守ろうとした。この結論は何よりも彼の気に入った。彼は一そう目をこらして彼女の顔に見入った。

「で、ソーニャ、お前は一心に神様にお祈りをするのかい？」と彼は尋ねた。

ソーニャは黙っていた。彼はその傍に立って、返事を待っていた。

「もし神様がなかったら、わたしはどうなっていたでしょう？」と彼女は力をこめて早口にささやきながら、急にきらきら輝いてきた目をちらと男に投げ、その手をぎゅっと堅くにぎった。

『ああ、やっぱりそうだった！』と彼は考えた。

「で、神様はその褒美に何をしてくださるんだい？」彼はどこまでも追求しながら、こう尋ねた。

ソーニャは答えかねるように、長い間黙っていた。その弱々しい胸は興奮のために波打った。

「どうか黙っててください！　きかないでください！　あなたにそんな資格はありません！……」いかつい腹立たしげな目つきで彼を見据えながら、彼女は急に叫んだ。

『そうだったのだ！　そうだったのだ！』と彼は執拗く心の中でくり返した。

「なんでもみんなしてくださいます！」また目を下へ伏せて、彼女は早口にささやいた。

『これが解決だ！　これが解決の説明なんだ！』むさぼるような好奇心をいだいて、しげしげと彼女を見ながら、彼は一人で心に決めてしまった。

新しい、不可思議な、ほとんど病的な感情をいだきながら、彼はその青白くやせて輪郭のふぞろいなこつこつした顔や、ああいう激しい火に燃え立ったり、峻厳な力強い感情に輝きうる、つつましやかな青い目や、憤懣と激昂になおも震えているその小柄な体に見入った。すると、それらすべてのものが、彼の目にいよいよ不思議な、ほとんどありうべからざるもののように思われてきた。

『狂信者だ！　狂信者だ！』と彼は心の中でくり返した。

たんすの上に何やら本が一冊のせてあった。彼はあちこち歩きながらその前を通るたびに気づいていたが、とうとう手にとってみた。それは露訳の新約聖書であった。古い手ずれのした皮表紙の本である。

「これはどこで手に入れたの？」と彼は部屋の端から声

をかけた。
　彼女はテーブルから三歩ばかり離れた同じ場所に、やはりじっと立っていた。
「人が持ってきてくれましたの」彼女は気の進まぬ調子で、彼の方を見ずに答えた。
「誰が持ってきたの？」
「リザヴェータが持ってきてくれましたの、わたしが頼んだものですから」
『リザヴェータ！　奇妙だなあ！』と彼は考えた。
　ソーニャの持っているすべてのものが、彼にとって一刻一刻、いよいよ奇怪に不可思議になって行く。彼は本をろうそくの傍へ持ってきて、ページをめくり始めた。
「ラザロのことはどこにあるだろう？」と彼はだしぬけに尋ねた。
　ソーニャは執拗くうつ向いたまま、返事をしなかった。彼女はテーブルへややはすかいに立っていた。
「ラザロの復活はどこ？　ソーニャ、捜し出してくれないか」
　彼女は横目に彼を見やった。
「そんなところじゃありませんわ……第四福音書です！……」彼の方へ寄ろうともしないで、彼女はきびしい声でつぶやいた。
「捜し出して、読んで聞かせておくれ」と彼は言って腰をおろし、テーブルに肘をついて、片手で頭をかかえ、聞こうという身構えをしながら、気むずかしげな顔をして脇の方へ目を据えた。
『三週間もたったら、別荘の方へおいでを願いますよ。どうやら僕自身もそちらへ行ってるらしいんだから――もしそれ以上悪いことさえなければ』と彼は腹の中でつぶやいた。
　ソーニャは会得のゆきかねるような風で、ラスコーリニコフの不思議な望みを聞きおわると、思い切り悪そうにテーブルへ近づいたが、それでも、本を取り上げた。
「いったいあなたはお読みにならなかったんですの？」彼女はテーブルの向こう側から、上目づかいに、相手を見ながら、こう尋ねた。彼女の声はしだいしだいにいかつくなってきた。
「ずっと前……中学校の時分に。さあ読んで！」
「教会でお聞きにならなかったんですの？」
「僕は……行ったことがないんだ。お前はしょっちゅう行くの？」
「い、いいえ」とソーニャはささやくように答えた。
　ラスコーリニコフはにやりと笑った。
「そうだろう……じゃ、明日お父さんの葬式にも行かないの？」
「行きますわ。わたし先週も行きました……ご法事に」
「誰の？」
「リザヴェータ。あのひとは斧で殺されたんですの」
　彼の神経はしだいに強くいらだってきた。頭がぐらぐらし始めた。
「リザヴェータとは仲がよかったの？」
「ええ……あれは心の真っ直ぐな人でした……ここへも

来ましたわ……たまにね……たびたびは来られなかったんですもの……わたしはあのひとと一緒に読んだり、そして……話したりしましたわ。あのひとは親しく神を見るでしょうよ」

こうした書物めいたことばが、彼の耳には異様に響いた。のみならず、リザヴェータとの秘密な会合や、二人とも狂信者であるという事実も、やはり耳新しく感じられた。

『こんな所にいると、自分も狂信者になってしまいそうだ！　感染力を持っている！』と彼は考えた。

「さあ、読んでくれ！」と彼は突然強情らしい、腹立たしげな調子で叫んだ。

ソーニャはいつまでもちゅうちょしていた。彼女の心臓はどきどき鼓動した。なんとなく彼に読んで聞かせるのがためらわれたのである。彼はこの『不幸な狂女』を、ほとんど苦しそうな表情で見つめていた。

「あなたに読んであげたって、仕様がないじゃありませんの？　だって、あなたは信者じゃないんでしょう？……」と彼女は小さな声で、妙に息を切らせながらささやいた。

「読んでくれ！　僕はそうしてもらいたいんだ！」と彼は言いはった。「リザヴェータにゃ読んでやったんじゃないか」

ソーニャはページをめくって、その場所を捜し出した。彼女は手が震えて声が出なかった。二度も読みかけたけれど、最初の一句がうまく発音できなかった。

「ここに病める者あり、ラザロといいてベタニアの人なり……」と彼女は一生懸命にやっとこれだけ読んだ。が、突然第三語あたりから声が割れて、張り過ぎた弦のようにぷっつり切れた。息がつまって、胸が苦しくなったのである。

ラスコーリニコフは、なぜソーニャが自分に読むのをちゅうちょするのか、そのわけが多少わかっていた。しかし、そのわけがわかればわかるほど、彼はますますいらだって、ますます無作法に朗読を迫った。彼女はいま自分の持っているものを、何もかもさらけ出してしまうのが、どんなにかつらかったのだろう。それは彼にわかりすぎるほどわかっていた。彼女のこうした感情は実際むかしから、事によったらまだほんの子供の時分から、不幸な父と悲嘆のあまり気のふれた継母の傍で、飢餓に迫っている子供たちや、聞くにたえぬ叫声や叱責などにみちた家庭にいる時分から、彼女の真髄ともいうべき秘密をなしていたに相違ない。そのことも彼は了解した。が、それと同時に、こういうことにもはっきり気がついた……いま彼女は朗読にかかりながら、心を悩ましたり、何やらひどく恐れたりしているくせに、一面ではそうした悩みや危惧を裏切って、ほかならぬ彼という人間にぜひとも今、あとで何事が起ころうとも！……読んで聞かせたい、聞いてもらいたいという願望が、苦しいまでに彼女の心を圧していたのである。彼はそれを彼女の眸に読み、感激にみちた興奮によって会得した……彼女は自分を制御して、第一節の初めに声をとぎらせた喉のけ

いれんを押しつけながら、ヨハネ伝の第十一章を読み続けた。こうして彼女は十九節まで読み進んだ。

「多くのユダヤ人、マルタとマリアをその兄弟のことに因りて慰めんとて、すでに彼らのところに来たりおれり。マルタは、イエス来たまえりと聞きて、これを出迎え、マリアはなお家に坐せり。その時マルタ、イエスに言いけるは、主よ、なんじもし此処にいましならば、わが兄弟は死なざりしものを。さりながらたとえ今にても、なんじが神に求むるところのものは、神なんじに賜うと知る」

ここで彼女はまたことばを切った。またしても声が震えてとぎれるだろうという恥ずかしさを、予感したからである……

「イエス彼女に言いけるは、なんじの兄弟は甦るべし。マルタ、イエスに言いけるは、終わりの日の甦るべき時に、彼甦らんことを知るなり。イエス彼女に言いけるは、われは甦りなり、命なり、われを信ずるものは、死すとも生くべし。すべて生きてわれを信ずるものは、永遠に死することなし。なんじこれを信ずるや？　彼女イエスに言いけるは――」

（ソーニャはさも苦しげな息をつぎ、句読ただしく力をこめて読んだ。それはさながら全世界に向かって、説教でもしているような風であった。）

「主よ、しかり！　我なんじは世に臨るべきキリスト、神の子なりと信ず」

彼女はちょっと朗読をやめて、ちらとすばやく彼の顔へ目を上げたが、大急ぎで自己を制し、さらに先を読み続けた。ラスコーリニコフは腰をかけたまま、その方をふり向こうともせず、テーブルに肘突きしてそっぽを見ながら、身動きもしないで聞いていた。ついに第三十二節まで読み進んだ。

「マリア、イエスのところに来り、彼を見て、その足もとに伏して言いけるは、主よ、なんじもし此処にいましならば、わが兄弟は死なざりしものを。イエス彼女の哭きと、彼女と共に来りしユダヤ人の泣くを見て、心を痛ましめ身震いて言いけるは、なんじいずこに彼を置きしや？　彼ら言いけるは、主よ、来りて見たまえ。イエス涙を流し給えり。ここにおいてユダヤ人言いけるは、見よ、いかばかりか彼を愛するものぞ。その中なるもの言いけるは、盲者の目を啓きたるこの人にして、彼を死なざらしむる能わざりしや？」

ラスコーリニコフは彼女の方をふり向いて、胸をおどらせながらその顔を見た。そうだ、はたしてそうだった！

彼女はすでにまぎれもなく本当の熱病にかかったように、全身をぶるぶる震わせていた。彼はそれを期待していたのである。彼女は偉大な前後未曾有の奇跡を語ることばに近づいた。偉大な勝利感が彼女をつかんだ。彼女の声は金属のようにさえた響きを帯びてきた。内部に満ちあふれる勝利と歓喜の情がその声に力をつけた。目の中が暗くなったので、行と行が入り交じってきたが、彼女は諳でちゃんと読むことができた。『盲者の目を啓きたるこの人にして……能わざりしや？』という最後の一

節では、彼女はちょっと声を落として、信ぜざる盲目のユダヤ人の疑惑と、非難と、中傷を伝え、また彼らが一分の後に、さながら雷にでも打たれたように、大地に伏して号泣しながら信仰にはいった気持を、燃えるような熱情をこめて伝えたのである……『この人も、この人も――同じように盲目で不信心なこの人も、すぐにこの奇跡を聞いて、信ずるようになるだろう、そうだ、そうだ！

すぐこの場で、たった今』と彼女は空想した。彼女は喜ばしい期待に全身を震わしていた。

「イエスまた心を痛ましめて墓に至る。墓は洞にて、その口のところに石を置けり。イエス言いけるは、石を除けよ。死せし者の姉妹マルタ彼に言いけるは、主よ、彼ははや臭し、死してよりすでに四日を経たり」

彼女はことさらこの四日ということばに力を入れた。

「イエス彼女に言いけるは、なんじもし信ぜば神の栄を見るべしと、われなんじにいいしにあらずや。ついに石を死せし者を置きたる所より取り除けたり。イエス天を仰ぎて言いけるは、父よ、すでにわれに聴けり、われこれをなんじに謝す。われなんじが常に聴くことを知る。しかるにわがかく言うは、傍に立てる人々をして、なんじのわれを遣わししことを信ぜしめんとてなり、かく言いて、大声に呼びいいけるは、ラザロよ、出でよ、死せし者……」

（彼女はさながら自分がまのあたり見たもののように、感激にふるえて身内をぞくぞくさせながら、声高く読み上げた。）

「……布にて手足をまかれ、顔は手巾にてつつまれて出ず。イエス彼らに言いけるは、彼を解きて歩かしめよ」

「その時マリアと共に来りしユダヤ人イエスのなせしことを見て多く彼を信ぜり」

彼女はもうその先を読まなかった。また読めなかったのである。彼女は本を閉じて、つと椅子から身を起こした。

「ラザロの復活はこれだけです」と彼女はきれぎれに、きびしい調子でこう言うと、彼の方へ目を上げるのを恥じるかのように、わきの方へくるりと体を向けて、身動きもせずにじっと立っていた。彼女の熱病的な戦慄はなお続いていた。ゆがんだ燭台に立っているろうそくの燃えさしは、奇しくもこの貧しい部屋の中に落ち合って、永遠な書物をともに読んだ殺人者と淫売婦を、ぼんやりと照らし出しながら、もうだいぶ前から消えそうになっていた。五分かそれ以上もたった。

「僕は用があって、その話に来たんだ」ラスコーリニコフは眉をしかめながら、突然声高にこう言って立ち上がり、ソーニャの傍へ近よった。

こちらは無言で彼の方へ目を上げた。彼のまなざしはことに峻烈で、その中には一種の荒々しい決意が現われていた。

「僕はきょう肉親を捨ててしまった」と彼は言った。「母と妹を。僕はもうあれたちのところへは行かないのだ。あっちですっかり縁を切ってきた」

「なぜですの？」とソーニャはどぎもを抜かれたように

尋ねた。
　先ほど彼の母と妹に会見したことは、自身でこそはっきりしないけれど、彼女に並々ならぬ印象を残していた。彼女は親子兄弟絶縁の報告を、ほとんど恐怖に近い気持で聞いた。
「今の僕にはお前という人間があるばかりだ」と彼は言い足した。「一緒に行こうじゃないか……僕はわざわざお前のところへ来たのだ。僕らはお互いにのろわれた人間なのだ。だから一緒に行こうじゃないか！」
　彼の目は輝いた。『まるで半分きちがいだ！』とソーニャは考えた。
「どこへ行くんですの？」と彼女は恐ろしそうに尋ねて、思わず一歩あとへしさった。
「僕がどうして知ってるもんか？　ただ同じ道づれだということが、わかっているだけだ。それだけはたしかに知っている――ただそれだけなんだ。目あては一つだ！」
　ソーニャは彼をじっと見てはいたが、何一つわからなかった。彼女はただ彼がこの上なく、限りなく不幸だということだけ了解した。
「お前があいつらに話をしたって、誰一人わかってくれるものはない」と彼はことばを続けた。「ところが、僕はわかった。お前は僕にとって必要なんだ。だから、僕お前のところへやって来たんだよ」
「わかりませんわ……」とソーニャはささやいた。
「そのうちにわかるよ。お前だって僕と同じことをしたじゃないか。お前もやっぱり、踏み越えたんだよ……踏み越えることができたんだよ。お前は自分で自分に手をくだした。お前は一つの生命を滅ぼしたんだ……自分の生命を（それはどっちだって同じだからな！）お前は精神と理性で生きていける人間なんだよ、しかし結局乾草広場（センナヤ）で終わる運命なのだ……けれど、お前には持ちきれまい。もし一人きりになったら、僕と同じように気が狂うだろう。お前はもう今でも気ちがいじみている。してみると、僕ら二人は一緒に同じ道を行くべきなんだ！　行こうよ！」
「なぜ？　なぜそんなことばかりおっしゃるの！」彼のことばに怪しくとどろく胸を騒がせながら、ソーニャはそう言った。
「なぜだって？　なぜといって、いつまでもこうしてはいられないからだ――これがそのわけなのさ。それに第一、子供みたいに泣いたり、神様が許さないなどとわめいたりしてないで、真剣に端的に分別しなくちゃならないんだよ！　もし明日にでもお前がほんとうに病院送りになったら、いったいどうなると思う？　半きちがいの肺病やみは、やがて死んでしまうだろうが、子供はどうする？　いったいポーレチカが身を滅ぼさずにすむと思う？　お前は町の角々で、母親のために物乞（ものご）いに出されている子供たちを、見たことはないのかい？　そういう母親たちがどこで、どんな風に暮らしているか、僕はちゃんと知っている。そこでは子供も、子供ではいられないんだ。そこには七つの子供も性的に堕落したり、泥棒になったりするんだ。ところが、子供はキリストの化身

なのじゃないか。『天国は彼らのものなり』だ。イエスは彼等を敬い愛せよと命じた。彼らは未来の人類なのだ……」

「どうしたら、いったいどうしたらいいんでしょう？」ソーニャはヒステリックな泣き声をあげ、両手を、もみしだきながらくり返した。

「どうしたらいいかって？　破壊すべきものを一思いに破壊してしまう、それだけのことさ。そして苦痛を一身に負うのだ！　え？　わからないかい？　あとでわかるよ……自由と権力、ことに権力だ！　震えおののくうぞうむぞうに対して、蟻塚（ありづか）のような群れに対して権力を握るのだ！　これが目的だ！　これを覚えておくがいい！　これがお前に対する僕のはなむけだ！　ことによったら、お前と話をするのも、これが最後かもしれない。もしあした僕が来なかったら、何もかも自然と耳にはいるだろう。そうしたら、今のことばを思い出しておくれ。そのうちにいつか、何年か後に、生活を重ねるにつれて、そのことばの意味がわかるかもしれない。が、もしあした来たら、その時には、誰がリザヴェータを殺したか、お前に言って聞かそう。じゃ、さようなら！」

ソーニャは驚きのあまりぴくりと身を震わした。

「まあ、いったいあなたは誰が殺したのか、知っていらっしゃるの？」恐怖のあまり氷のようになり、けうとい目つきで相手を見つめながら、彼女はこう尋ねた。

「知ってる、だから言って聞かせるんだ……お前に、お前一人だけに！　僕はお前を選んだのだ。僕はお前のところへ許しを請いにくるんじゃない、ただ言いに来るだけなんだよ。僕はずっと前から、初めてお父さんがお前の話をした時から、僕はこのことを聞かせる人にお前を選んでいたのだ。リザヴェータがまだ生きてる時から、それを考えていたのだ。さよなら。手を出さないでくれ。では明日！」

彼は出て行った。ソーニャは気ちがいでも見るように、彼を見送っていた。けれど、彼女自身もまるで気ちがいのようであった。そして、自分でもそれを感じた。彼女はめまいがしていた。『ああ！　あの人はどうしてリザヴェータを殺した下手人を知ってるのだろう？　あのことばはどういう意味なんだろう？　恐ろしい！』けれどこの瞬間、そうした想念は彼女の頭に浮かばなかった。夢にも、夢にも浮かばなかった！……『ああ、あの人は恐ろしく不仕合せなのに違いない！……お母さんや妹さんを捨ててしまったって、なぜだろう？　何があったんだろう？　そしてあの人は何をもくろんでいるのだろう？　いったいあの人はわたしに何を言ったんだろう？　あの人はわたしの足に接吻（せっぷん）して、そう言った……そう言った。（そうだ、あの人ははっきりそう言った。）わたしを離れては、もう生きていられないって……おお、なんということだ！』

ソーニャは一夜を熱と悪夢の中に過ごした。彼女は時おりはね起きて、泣いたり、両手をもみしだいたりするかと思うと、また熱病やみのような眠りに前後を忘れた。そして夢にポーレチカや、カチェリーナや、リザヴェー

タや、福音書を読んだことや、それから彼……青ざめた顔をして、目を燃えるように輝かしているラスコーリニコフなどを見た。彼は彼女の足に接吻して、泣いている……おお、神よ！

右手のドア、ソーニャの部屋をゲルトルーダ・カールロヴナ・レスリッヒの住まいとへだてているドアの向こう側には、同じくレスリッヒ夫人の住まいに属する中間の部屋があって、もう長いこと空き間になっていた。それは貸しに出されているので、その広告が門口や、掘割に面した窓ガラスなどにはりつけてあった。ソーニャはずっと前から、この部屋には人が住まっていないものと思い込んでいた。ところが、その空き間のドアの傍には、スヴィドリガイロフ氏がその間ずっとたたずんで、息をこらしながら、立聞きをしていたのである。ラスコーリニコフが出て行ったとき、彼はしばらく立って考えたのち、爪先立ちで空き間に隣った自分の部屋へもどり、一脚の椅子を取って、ソーニャの部屋へ通ずるドアの傍へそっと運んだ。二人の会話は彼にとって興味のある意味深いものに思われて、すっかり気に入ってしまった――で、彼はこの先、たとえば明日にもさっそく、今のようにまる一時間もじっと立ちどおすような不快な目を二度とまたくり返さないために、そしてあらゆる点において十分満足をうるために、少しでもぐあいよく落ち着こう――とこういうわけで、わざわざ椅子を運んできたのである。

五

翌朝きっかり十一時に、ラスコーリニコフが警察の予審部へはいって行って、ポルフィーリイに取次ぎを頼んだ時、彼はあまり長く通してくれないのに、むしろ驚いたくらいだった。彼が呼ばれるまでには、少なくとも十分くらいたった。彼の目算によると、いきなり向こうから飛びかかって来なければならぬはずだった。それにもかかわらず、彼が控室に立っていると、見うけたところ、彼などになんのかかわりもなさそうな人々が、彼の傍をしきりにあちこちしていた。事務室らしい次の間には、幾人かの書記が控えて、書きものをしていたが、そのうちの誰一人として、ラスコーリニコフが何者でどういう人物なのか、そんなことはかいもく知らないらしかった。落ち着きのない疑わしげな目つきで、彼は周囲を見回しながら、その辺に誰か看守のような者がいはしないか、彼がどこかへ行ってしまわぬように監視を命ぜられた何かの秘密な目はないか、見つけ出そうとした。しかし、そんなものはいっこうなかった。彼はただこせこせと忙しげな事務の連中の顔と、ほかにいくたりかの人を見たばかりで、よしんば彼が今すぐ勝手にどこへ飛び出しても、誰一人それを問題にする者はなかった。で、もしあの謎のような昨日の男が――あの地からわき出したような幻がほんとうにいっさいのことを見、いっさいのことを知っているとしたら――いま彼ラスコーリニコフにこ

うして立って、悠々と待っているようなことを、させておくはずがない――こういう想念が、だんだん彼の頭の中に固まってきた。それに、彼が十一時ころになって、自分の都合でやっと足を運んで来るまで、のんべんだらりと待っているはずがなかろうじゃないか？　してみると、あるいはあの男がまだ何も密訴していないのか……あるいはやっぱりなんにも知らないので、自分の目ではまるきり何も見なかったのか、二つに一つである（そうだ、どうしてやつに見ることができるものか？）としてみれば、きのう彼ラスコーリニコフの身に起こったいっさいのことは、またぞろ例のいらいらした病的な想像に誇張された幻影にすぎなかったのだ。こうした推測はまだ昨日、もっとも激しい不安と絶望のただ中に、彼の心中に固まりかけていたのである。今これらすべてのことを思い返し、新しい闘争の心構えをしながら、彼は突然自分の体が震えているのを感じた――あの憎んでも余りあるポルフィーリイを恐れて震えているのだと思うと、彼の心中には忿懣（ふんまん）の情さえわき立ってきた。彼にとって何より恐ろしいのは、またあの男と顔を合わせることだった。彼はこの男を底の知れぬほど、限りなく憎んでいた。憎悪のあまりについ何かの拍子で、自己を暴露するようなことがありはしないかと、それを恐れるくらいだった。その忿懣の情があまりに強かったので、震えはすぐに止まってしまった。彼は落ち着いた不敵な顔つきではいって行く準備をした。そしてできるだけ沈黙を守り、目をこらし耳を澄まして様子をうかがおう、せめて今度だけはどんなことがあろうとも、病的にいらいらした自分の性質に打ちかとうと、心に誓った。ちょうどこの時、彼はポルフィーリイのもとへ呼ばれた。行ってみると、この時ポルフィーリイは自分の部屋に一人でいた。彼の部屋は大きくもなければ小さくもなく、その中には大型の書物卓（ライティングテーブル）、その前に置かれた模造皮張りの長椅子、事務卓（ビューロー）、片隅にある戸棚、それから数脚の椅子などで、すべて磨きのかかったマホガニー製の公有品だった。正面の壁というよりむしろ仕切り板の隅に、しめ切った戸口があった。その仕切り板の向こうには、確かまた何かの部屋が続いているに相違ないらしかった。ラスコーリニコフがはいると、ポルフィーリイはすぐそのドアをしめてしまったので、彼らは二人きり差し向かいになった。彼は見たところこの上もなく愉快そうな、愛想のいい態度で客を迎えた。しかしもう幾分かたった時、ラスコーリニコフは二、三の徴候によって、彼がなんとなくまごついているらしいのに気がついた。それはふいに何かで面くらわされたか、あるいは一人で何か秘密な事をしているところを、人に見つけられたような風であった。

「ああ、これは大人（たいじん）、ようこそ……こんな遠路をはるばると恐れ入りますな……」彼の方へ両手を差し出しながら、ポルフィーリイは口を切った。「さあ、先生どうぞおかけください！　それとも、あなたは大人とか……先生とか呼ばれたりするのが、お好きじゃないのかもしれませんな――まあ tout court?（つまり）どうか慣れ慣れしいなどと、お考えにならないでください……さあ、

どうぞこの長椅子へ」
　ラスコーリニコフは、相手から目を放さないで、腰をおろした。
『こんな遠路をはるばると』だの、慣れ慣れしさの謝罪だの、tout court などというフランス語だの、――すべてこういったものは、特殊な徴候であった。『だが、この男はおれに両手を差し出しておきながら片手も握らせないで、うまくひっ込めてしまいやがった』こういった想念が彼の頭にうさんくさくひらめいた。二人は互いに様子をうかがい合ったけれど、双方の目が出会うやいなや、二人は稲妻のような早さで、それをそらすのであった。
「僕は届を持って来たんです……例の時計のことで……これなんですが、書式はこれでいいでしょうか、それともまた書き直さなくちゃいけないでしょうか？」
「なんですって？　届ですか？　いいです、いいです、ご心配なく、それでけっこうです」ポルフィーリイはまるでどこかへ急いでいるように、せかせかとこう言ったが、言ってしまってから届を手にとり、それに目を通した。「そうです、これでけっこうです。ほかに何もいりません」と彼は同じ早口でくり返して、紙をテーブルの上においた。
　それから、一分ばかりたった時、何かほかのことを話しながら、またそれをテーブルから取り上げて、自分の傍の事務卓（ビュロー）へ移した。
「あなたは確かきのう僕に……あの……殺された老婆との関係を……正式に……尋ねたいと、おっしゃったようですね？」とラスコーリニコフはまた言いだした。
『ちょっ、なんだっておれは確かなんてよけいなことを入れたんだろう？』という考えが、電光のように彼の頭をかすめた。『ちょっ、またなんだっておれは、この確かを入れたことを、気にしてるんだろう？』とすぐにほかの考えが電光のようにひらめいた。
　と、彼はふいに直覚した――彼の猜疑心（さいぎしん）はポルフィーリイにたった一度接触しただけで、わずか一言二言かわしただけで、一、二度目を見合せただけで、一瞬の間にものすごいほどの大きさに成長してしまった……これはきわめて危険なことだ、と彼は感じた。神経がいらいらすると興奮は増してくる。『困ったことだ！　困ったことだ！　またうっかり口をすべらすぞ！』
「そう、そう、そうです！　ご心配にゃ及びません！　時間はたっぷりあります、時間はたっぷりあります」テーブルのまわりをあちこち歩きながら、ポルフィーリイはつぶやいた。けれど、別になんの目的があるという様子もなく、窓の方へつかつかと行ったかと思うと、事務卓（ビュロー）の方へ突進したり、またテーブルへもどったりした。そして、ラスコーリニコフのうさんくさそうな視線をさけているかと思えば、今度は急に一つところに立ち止まって、彼の顔をまともにぴったり見つめるのであった。
　その時彼のふとった小さな丸々した姿が、まりのようにあちこち飛んで行って、四方の壁や隅々からすぐはね

返って来るのが、なんともいえず奇怪に感じられた。
「間に合いますとも、間に合いますとも！……ときに、煙草をおやりになります？　お持ち合わせですかな？　さあ、お一つ」と彼は紙巻煙草をすすめながら、ことばを続けた……「実は、今ここへお通ししておりますが、わたしの住まいはすぐそこの仕切り板の向こうにあるんです……官舎がですね、今は私宅におります。当分の間だけ。ちょっと修繕をしなくちゃならないもんですから。もうほとんどでき上がりましたよ……官舎ってものは、いやはや、ありがたいものですて――え？　あなたどうお考えですな？」
「さよう、ありがたいものですよ」ほとんど嘲るように彼を見ながら、ラスコーリニコフは答えた。
「ありがたいものです、ありがたいものです……」急に何かほかのことを考え出したような調子で、ポルフィーリイはこうくり返した。「さよう、ありがたいものです！」彼はふいにラスコーリニコフに視線を投げて、彼から二歩ばかりのところに立ち止まりながら、とうとうほとんど叫ぶような声で言った。この官舎はありがたいものだという馬鹿げたことばの反覆は、その俗悪な点からいって、彼がいま客の方へそそいでいるまじめな、意味ありげな、謎めいたまなざしと、あまりに矛盾しているのであった。
　しかし、それがラスコーリニコフの憤怒を、いやが上にもわき立たせた。で、彼はかなり不用意な冷笑的な挑戦を、もうがまんすることができなかった。
「ときに、どうでしょう」彼はほとんど不敵な目つきで相手を見つめ、その不敵さに一種の喜びを感じながら、ふいに問いかけた。「こういう場合には――あらゆる種類の検察官にとって――一種の司法的原則というか法律家的方法というか、そんなものがあるようですね。つまり最初は遠廻しにごくくだらないことか、それとも、よしまじめな問題にもせよ、まるで関係のない事から始めて、それでもって被訊問者に元気をつけ、いやむしろ注意をそらして、その警戒心を眠らせておき、その後でふいにそれこそとうとつに、のるかそるかという危険な質問をまっこうから浴びせかけるんです。そうじゃありませんか？　察するところ、このことはあらゆる法則や訓戒の中に、今でも依然として説かれてるんでしょう？」
「すると、すると……あなたはなんですか、わたしが官舎の話をしたのも、やはりその、なにだと……え？」
　こういって、ポルフィーリイは目を細め、ぱちりとまたたきした。何やら愉快そうな狡猾らしいものが彼の顔面を走り過ぎた。額の皺が伸びて、目が細くなり、顔の輪郭が長くなったかと思うと、彼はラスコーリニコフの目をまともに見入りながら、ふいに全身を波のようにゆすぶり、神経的な長い笑いを立て始めた。こちらも幾分自ら強いる気味で笑い出した。しかし、ポルフィーリイがそれとみて、顔が紫色になるほど腹をかかえて笑い出したとき、ラスコーリニコフの嫌悪の情は突如いっさいの警戒心を圧倒してしまった。彼は笑いやめて眉をしかめ、ポルフィーリイが何か思わくありげにとめどなく、

長々と笑いつづけている間じゅう、相手から目を放さず、いつまでも憎々しげにその顔をみつめていた。とはいえ、不注意は明らかに双方に認められた。ポルフィーリイも客を面と向かって嘲笑しながら、客がその笑いを憎悪で受け取っているにもかかわらず、その状態を大して気にしている様子もなかった。この最後の事実はラスコーリニコフにとって、きわめて意味深いものであった。彼は悟った。ポルフィーリイはさっきもいっこうまごつきなどしたのでなく、かえって彼ラスコーリニコフの方がわなに落ちたのかもしれない。ここには明瞭に、彼の知らない何かがある。何かの目的がある。もしかすると、もはやすべて準備が整っていて、今すぐにもそれが暴露し、頭上にくずれかかるのかもしれない……

彼はさっそくいきなり用件に取りかかろうと、席から立ち上がって、帽子をつかんだ。

「ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ」断乎たる口調ではあったが、かなり癇の強い声で、彼は口を切った。「昨日あなたは何かの尋問のために、僕に来てほしいとおっしゃった（彼は特に尋問ということばに力を入れた）。で、僕はやって来ました。何かご用があれば、どうか尋ねてください。でなければもう失礼させていただきたいのです。僕いそがしいんですから、ぼく用があるんですから……あの、あなたも……ご存じの、馬に蹴殺された官吏の葬式に行かなくちゃならないんです……」と彼はつけ足したが、すぐこのつけ足しにいらいらしてしまった。それから、またすぐにいっそういらいらしながら、「僕もうこのいきさつにはすっかりあきあきしてしまいました。おわかりですか、もうずっと前からです……一つはこれがもとで病気になったんです……一口に言えば」病気云々の一句がいっそうへまだったと感じて彼はほとんど叫ぶように言った。「一口に言えば、尋問するか、つきまとうのをよすかしてください……だが、もし尋問するなら、ぜひ必ず正式にやっていただきたい！ それ以外には承知しません。だから、今日のところは失敬します。今われわれ二人きりでは何も仕様がありませんから」

「とんでもない！ いったいあなたは何をおっしゃるんです！ 何をあなたに尋問することなんかありましょう？」ポルフィーリイは急に笑うのをやめて、調子も顔つきも改めながら、まるでめんどりが鳴くような声でせかせかと言い出した。「まあ、どうぞご心配なく」またしても四方八方へひょこひょこ歩き出したかと思うと、今度はふいにラスコーリニコフを席に着かせようと世話を焼いたりしながら、彼はあたふたやり出した。「時間はたっぷりありますよ、時間はたっぷりありますよ。それに、こんなことはなんでもありません！ それどころか、あなたがとうとういらしってくだすったのを、非常に喜んでいるくらいです……あなたをお客様として迎えているんですからね。もっとも、さっきのいまいましい無作法な笑いに対してはロジオン・ロマーヌイチ、お許しを請わなくちゃなりません。ロジオン・ロマーヌイチ、たしかそうでしたね、あなたの父称は？ わたしは神経

家だもんですから、あなたの恐ろしい穿(うが)った観察に笑われされてしまったんですよ。どうかすると、まったくゴム細工のように体じゅうぶるぶる震え出すほど笑うことがあるんです。かれこれ半時間くらいぶっ通しに……笑いっぽい質(たち)でしてな。わたしの体質ですから、卒中を恐れてるくらいなんですよ。がまあお掛けになったら、あなたどうしたのです？……さどうぞ、あなた、でないと、すっかりご立腹になったのだと思いますよ……」

ラスコーリニコフは依然として腹立たしげに眉をしかめたまま、黙って相手のことばを聞きながら、じっと観察していた。もっとも、彼は腰をおろしたけれど、まだ帽子は手から離さなかった。「ねえ、ロジオン・ロマーヌイチ、わたしは自分のことを、いわば性格の説明として申し上げておきましょう」部屋の中を気ぜわしなげに歩きながら、相変わらず客と視線を合わすのをさけるような風で、ポルフィーリイはことばを続けた。「実はわたしは独身者で、社交界というものを知らない、名もない一介の人間です。しかもそれでいて、もうでき上がってしまった人間、固まってしまった人間で、もう種になりかかっているんです。で……で……で、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたはお気づきかどうか知りませんが、わがロシアでは、とりわけこのペテルブルグの社会では、お互いにかくべつ深い知合いではないが、両方で尊敬し合っている二人の聡明(そうめい)な人間が、まあたとえば、今のあなたとわたしのような人間が、一緒に落ち合ったとすると、まる三十分くらい、どうにも話題を見つけることができず、お互いに固くなってしまって、腰かけたまま照れ合っているんです。いったい話題というものは誰でも持っているもので、たとえば女の人なんかそうです……上流の社交界の人たちでも、話題はいつだって持ち合わせています。C'est de rigueur（それは必要欠くべからざるものですからね）ところが、我々みたいに中流の人間になると――皆はにかみやで、話下手(はなしべた)です……つまり、思索人ですな。いったいこれはどういうわけなのでしょう？　われわれには社会的な興味が欠けているのか、あるいはまたあまり正直すぎて、お互いにだまし合うのを望まないからか、どうもわからんです。え？　あなたなんとお考えですな？　まあ、その帽子をおおきになりませんか、まるで今にも帰ろうとしていらっしゃるようで、まったく、見てても変ですよ……わたしはそれどころか、やたらにうれしくって……」

ラスコーリニコフは帽子をおいたが、依然として無言のまま、まじめに眉をしかめながら、ポルフィーリイの空虚な、とりとめのない饒舌(じょうぜつ)に耳を傾けていた。『いったいこの男はこんな愚にもつかないおしゃべりで、おれの注意をそらそうとでも思ってるんだろうか？』

「コーヒーは別に差し上げません、場所が場所ですから。しかし、五分やそこいら友人と対談して、気晴しをやるのがいけないというわけはありますまい」とポルフィーリイはのべつしゃべり立てた。「何しろ、こうしたいろんな職務上の仕事というやつは……ですが、あなた、わたしがこう始終あちこちと歩き回るのを、どうかお腹立

ちにならんでください。失礼ですが、わたしはあなたの気を悪くしやしないかとはらはらしてるんですが、運動というやつはわたしにとって、なんとしても必要なんでしてね。年じゅう腰をかけどおしなもんですから、五分間でも歩き回れるのが、うれしくてたまらないんですよ……痔がありますんでね……いつも体操で治療しようと思ってるんですが。なんでも噂で聞くと、五等官や四等官の連中、いや三等官あたりの役人までが、進んで縄飛びをやってるそうですよ。全くどうも今日は科学万能の時代ですからな……さよう……ところで、ここの職務だとか、尋問だとか、そうしたいろんな形式的なことになると……現にあなたも今ご自分で、尋問ということをおっしゃったが……そりゃ実際、あなた、ロジオン・ロマーヌイチ、この尋問てやつは、どうかすると尋問される者よりか、尋問者の方をまごつかすものですよ……それはあなたがいま実に正鵠を穿った、皮肉な観察をお述べになったとおりです（ラスコーリニコフはそんな事など何もいわなかったのである）。混乱してしまいますよ！　実際、混乱してしまいますよ！　いつもいつも同じことばかり、太鼓でもたたくように言ってるんですからな！　このごろ改革が始まりかけていますから、われわれもせめて名称だけでも変えてもらえるだろうと、嘱望しているしだいです、へ、へ、へ！　ところが、法律家的方法となると（あなたの巧みな表現をかりるとですな）、もう完全にあなたのご意見に賛成です。ねえ、そうじゃありませんか、どんな被告だってどんな頭のかたい百姓出の被告だって、ちゃんと心得ていないものはありませんよ。たとえば、初めは無関係な質問を浴びせかけて（あなたの的確な表現に従えばです）、その後でふいに斧をふるってまっこうからみね打ちを食わせる。へ、へ、へ！　その真っ向からですな、あなたの巧みな譬喩に従えばね！　へ！　へ！　それくらいのことはみんな心得ていますよ。じゃ、あなたはわたしが本当に、官舎の話であなたを……なにしようとしたなんて、そんなことをお考えになったんですか……へへ！　あなたもなかなか皮肉な人ですな。いや、もう言いません！　あっ、そうだ、ついでに一つ。どうもことばでも思想でも、一つがまた一つを誘い出すものでしてな――ほらあなたは先ほど正式にとおっしゃいましたね、つまり尋問の態度について……しかし、正式にっていったいなんでしょう！　形式なんて、あなた、多くの場合くだらんものです。時によると、友達づき合いで話した方が、案外有利なことがありますよ。形式はけっして逃げてゆきやしません。その点はどうかご安心ください。それに、本質的に見て、形式とはいったいなんでしょう、一つお尋ねしたいくらいですよ。形式なんて、いかなる場合でも、予審判事を拘束することはできません。予審判事の仕事は、いわば一種の自由芸術ですからな。一種のというより、むしろそのなんですな……へ、へ、へ！……」

　ポルフィーリイはちょっと息をついだ。彼は少しも疲れる様子がなく、やたらにまくし立てた。無意味な空虚な文句を並べているかと思うと、急に何か謎めいたこと

ばを漏らしたり、かと思うと、すぐまた無意味な饒舌に落ちてゆきながら、とうとうと喋(しゃべ)りつづけた。彼は部屋の中をもうほとんど駆け回っていた。太った短い足をいよいよ早く動かしながら、絶えず足もとをみつめたまま、右の手を背中へ回し、左手をひっきりなしにふり回しては、驚くほどことばの意味に一致しない、さまざまな身振(ジェスチュア)りをするのであった。彼は部屋を駆け回るうちに、二度ばかりドアの傍にほんのちょっと立ち止まり、耳を澄ましたらしいのに、ラスコーリニコフはふと気がついた。

『やつ何か待ってでもいるんだろうか？』

「いや、実際あなたのおっしゃったことは、全く真理です」とまたもやポルフィーリイはさも愉快げに、並みはずれて気さくな様子でラスコーリニコフを見ながら（そのためこちらはぶるっと身震いして、一瞬間に心構えをした）、こうことばをついだ。「実際あなたが法律上の形式に対して、あの鋭い嘲笑を加えられたのは、ぜんぜん正鵠を穿っております。へ、へ！　どうもあの（もちろん、全部ではないが）、意味深長な心理的方法というやつは、いやはや滑稽(こっけい)なもので、あまり形式に拘泥(こうでい)すると、むしろ有害無益なくらいですて。さよう……おや、わたしはまた形式のことを言い出してしまった。ところでもし仮りにわたしが委任された何かの事件で、甲にしろ乙にしろ丙にしろ、いわば犯罪者として認める、いや、もっと適切に言えば、嫌疑をかけるとする……ときに、あなたは法律家になるつもりで勉強しておられたのでしょう、ロジオン・ロマーヌイチ？」

「ええ、そのつもりでしたが……」

「でしょう、だから一つあなたに、いわば将来のご参考として――しかし、わたしは生意気にあなたをつかまえて、講義をするなんて思ってくだすっちゃ困ります。とんでもない、あなたはああいう堂々とした犯罪論を発表していらっしゃるんですからなあ！　とんでもない、わたしはただ一つの事実としてちょっとした例をご参考に供するだけなんです――そこで、仮りにわたしが、たとえば甲なり乙なり丙なりを犯人と考えたとしましょう。で二つ伺いますが、その場合よしんば多少の証拠を手に入れたにせよ、時機の熟さぬうちに当人を騒がせる必要がどこにあります？　もっとも、中には一刻も早く捕縛しなければならん相手もある。ところが、また中には別な性質の人間もありますよ、全く。そんなのに対しては、しばらくの間街を歩き回らしたっていいじゃありませんか、へ、へ！　しかしどうやら、あなたはよくおわかりにならんらしいですね。じゃ、もう少しはっきり説明しましょう。たとえばですね、もしわたしがその男をあまり早くから未決へぶち込むと、それによって、わたしはその男に、いわば精神的支点を与える事になるかもしれませんから、へ、へ！　あなたは笑っておいでですな？

（ラスコーリニコフは笑おうなどとは考えてもいなかった。彼は唇を堅く結んで、燃えるような視線をポルフィーリイから放さず、じっと腰をかけていた）。しかし、実際ある種の連中に対しては、ことにそうなんですよ。

人間は多種多様ですが、実地応用の方法は誰に対しても一つしかありません。たった今あなたは証拠といわれました。そりゃまあ、仮りに証拠は必要だとしてもいいですが、しかし証拠というやつは、あなた、大部分両方に尻尾を持っているのでしてな。われわれ予審判事なんて弱い人間ですから懺悔しますが、予審というものは数学的に明瞭にやりたい、二二が四といったような証拠を握りたくてたまらない！　抜きさしのならないまともの証拠を手に入れたくてたまらないんですよ！　もしわたしがその男を時期尚早なのに収監してごらんなさい――たとえこれこそそうだという確信を持っていたにせよ――その時わたしはその男に対して、それ以上の証拠を握る方法を、われとわが手で奪うようなものじゃありませんか。なぜとおっしゃる？　ほかでもありません、わたしはその男にいわば一定の地位を与える、いわば心理的に一定の方向を与えて、その男を落ち着かせてしまうからです。するとその男はわたしから離れて、自分の殻の中へもぐり込んでしまいます。つまり、いよいよ自分は囚人だと悟るわけなのです。なんでもあのセヴァストーポリでは、アリマ役の直後、今にも敵が正面攻撃で一挙にセヴァストーポリを陥落させるだろうと識者連が恐れおののいたものです。ところが、敵が正攻法による包囲を選んで、最初の平行壕を開鑿するのを見ると、その識者連が大喜びに喜んで、安心したという話です。つまり正攻法による包囲ではいつらちがあくかわからないから、少なくともふた月は先へ延びることになるからです！　またあなたは笑っておいでですな、また本当にならないんですな？　そりゃなんです、もちろんあなたが正しいともいえます。正しいですとも、正しいですとも！　今のような話はみな特殊な場合です、あなたのおっしゃるとおりです。こんなことはみんな特殊の場合です！　しかし、ロジオン・ロマーヌイチ、この際つぎの事実も観取しなけりゃなりません――つまりあらゆる法律上の形式や規則が適用され、それらのものの対象となり、書物にまでちゃんと書き込まれている普遍的な場合なんてものは、ぜんぜん存在していないんですよ。というのは、すべての事件、たとえば犯罪などでも皆、それが現実に発生するやいなや、直ちにぜんぜん特殊な一個の場合になってしまうからです。時によると、まるっきり前例のないようなものになってしまいます。したがって、そんな意味で滑稽きわまる事件が生ずることも、往々ありますよ。まあ仮りにわたしがある男を勝手に一人でうっちゃっておくとしましょう――逮捕もしなければ、いっさい迷惑をかけるようなこともしない。ただこっちがいっさいの秘密を知り尽くしていて、夜も昼もその行動に注目し、油断なく監視していることを、当人にしょっちゅうたえまなく感じさせる。少なくとも、疑うように仕向けるのです。こうして、その男が絶えずわたしから嫌疑を受け、脅威を与えられているものと意識してごらんなさい。それこそ全く頭がぐらぐらしてきて、あげくの果てには自首するようになります。しかもその上に二二が四といったような、いわゆる数学的に正確な

証拠となるようなことをしでかすに決まっています――なかなか愉快なもんですて。こういうことは熊みたいな百姓にもありうる例なんですから、まして我々仲間の現代的頭脳を持った、おまけにある方向に発達を遂げた人間はなおさらです！　だから、その男がいかなる方向に発達を遂げた人物か、それを知るのが一ばんかんじんですて。それから神経ですな、神経というやつ、あなたはこいつを忘れていらっしゃる！　現今この種の連中の神経はみな病的で、栄養不良で、おまけにいらいらしているんですからな！……つまり胆汁の作用ですな。彼らにはこの胆汁がどれくらいあるか底がしれないほどですよ！　これは実際言ってみれば一種の鉱脈みたいなものでしてな！　だから、その男が縄をつけられないで街を歩き回っていても、わたしには別段なんのけねんもありゃしません！　なに、勝手にしばらくのあいだ散歩さしとけばいいのです、勝手に。わたしは何をしなくたって、その男が要するにこっちの獲物で、わたしの手からどこへも逃げられないのが、ちゃんとわかっているんですから！　それに、どこへ逃げて行く先があります。へ、へ！　外国ですかね？　外国へ逃げるのはポーランド人くらいなもので、その男じゃありません。ことにわたしはしじゅう監視して、相当の手段を講じているんだからなおのことです。では、内地の奥深くへでも逃げ込みますかな？　しかし、そこには百姓どもが住んでいるんですぜ。正真正銘のむくつけきロシアの百姓ですよ。教養のある現代人だったら、わが国の百姓みたいな外国人と一緒に暮らすよりは、むしろ監獄の方を選ぶでしょうよ、へ、へ！　しかし、こんなことはみんなくだらない、外面的な問題です。いったい逃亡とはなんのことでしょう？　そんなことは形式的なものにすぎません。かんじんなことはそれと違います。その男はどこへも逃げる先がないというだけの理由で、わたしの手から逃げないのじゃありません。心理的にわたしの傍を逃げ出されないのです、へ、へ！　どうです、この表現は！　つまり、その男は自然の法則によって、よしんば逃げる先はあっても、逃げられないのです。あなたはろうそくの火を慕ってくる蛾をごらんになったでしょう？　ねえ、ちょうどあれと同じように、その男はわたしのまわりを始終ぐるぐる回るでしょう。ちょうど蛾がろうそくのまわりを回るようにね。自由もうれしくなくなり、考え込んだりうろたえたりしだす。そして、蜘蛛の巣へまきこまれたように、自分で自分をすっかり縛り上げてしまい、死ぬほど一人で苦しい目をするに決まっております！……そればかりか、二二が四といったような数学的に正確な証拠を、自分でこしらえてこっちへ提供してくれます――ただ少しばかり幕間を長くしてやりさえすればね……そして、絶えずひっきりなしにわたしのまわりで圏を描きながら、その直径をだんだん狭くして、最後にぱたっと引っかかる！　真っ直ぐにわたしの口へ飛び込むんです。すると、わたしがそれをがぶりと飲み込むという寸法でさあ。ねえ、これは実に愉快なもんですよ。へ、へ、へ！　あなた本当になさいませんか？」

ラスコーリニコフは返事をしなかった。彼は始終おなじ緊張した表情で、ポルフィーリイの顔を見つめながら、真っ青な顔をして、身動きもせず腰をかけていた。

『けっこうなお説教だ！』彼は全身に寒さを覚えながら考えた。『こうなると昨日のように、猫が鼠をおもちゃにしてるどころの話じゃない。まさかこの男はおれに意味もなく自分の力を示して……助言してくれてるわけじゃあるまい。そんなへまをするには、この男少しりこうすぎるて……これには何かほかに目当てがあるんだが、いったいそれはなんだろう？　ちぇっ、ばかばかしい、きさまはおれをおどかして、裏をかこうとしてるんだろう！　ところが、きさまにはなんの証拠もないんだし、昨日の男だってこの世にいやしない！　ただきさまはおれをまごつかせた上、早まっていらいらさせておき、その隙にぱっさりいこうという魂胆だろう。ご冗談でしょうよ、しくじるに決まってる、しくじるに決まってるとも！　だがなぜ、いったいなぜ、これほどまでに入れ知恵をするんだろう？……おれの病的な神経をねらってでもいるんだろうか！……なあに、だめなこった、きさまがどんな小細工をしたって、しくじるに決まってるんだ……まあ、一つ見てやろうよ、きさまがどんな細工をしているか』

こう考えた彼は、恐ろしい測りしれぬ破局（カタストロフ）に対して心構えをしながら、全身の力をこめて心を強く持とうとした。どうかするとポルフィーリイにおどりかかって、その場で締め殺してしまおうか、と思うことがあった。彼はここへ来る途中から、この憎悪が起こるのを恐れていたのである。彼は唇がからからにかわいて、心臓がどきんどきんと鼓動し、唇に唾（つば）がひからびつくのを感じた。が、それでも彼は沈黙を守って、時機の来るまで一言も漏らすまいと覚悟した。彼は自分の立場として、これが最善の戦術なのを悟ったのである。なぜなら、そうすれば自分の方でうっかり口をすべらす心配がないのみか、かえってその沈黙によって敵自身をいらいらさせ、あまつさえまだ何かうっかりしゃべらすことさえできるかもしれない。少なくとも、彼はこれを当てにしていた。

「いや、お見受けするところ、あなたは本当になさらんらしい。そして、まだわたしが何か罪のない冗談でも並べているように、思っていらっしゃるらしい」ポルフィーリイはますます愉快そうな様子になり、満足のあまり絶えずひひひと笑いながら、こうわれとわがことばを引きとって、またもや部屋の中をぐるぐる回り出した。「そりゃもちろんごもっともなしだいです。わたしはもうこの風体からして、人に滑稽な感じしか起こさせないように、神様から創られてるんですからな。ずんぐり男ですよ。しかし、わたしはこう申し上げたいのです。もう一度くり返して申しますが、ロジオン・ロマーヌイチ、どうか老人の差し出口をお許しください。あなたはまだお若くて、いわば青春の花ともいうべき時期にある人です。だから一般に若い人の例に漏れず、人知というものを何より尊重しておいでになる。遊戯的な機知の発露や理知の抽象的な演繹（えんえき）などが、あなたを誘惑しているようです。

それはちょうど、わたしが軍事に関して判断しうる限りでは、オーストリアの軍事会議（ホフ・クリーグスラート）にそっくりそのままですな。彼らは紙の上ではナポレオンを粉砕して、捕虜にまでしてしまいました。とにかく自分たちの書斎では、縦横の機知を弄（ろう）していっさいを計画し、敵を術中におとしいれました。ところが事実の上ではどうでしょう、あにはからんやマック将軍、全軍を率いて降伏してしまった。へ、へ、へ！　いや、わかっていますよ、わかっていますよ、ロジオン・ロマーヌイチ、わたしが文官の身でありながら、軍事上の例ばかりを引くのを、あなたはおかしく思っておいでになるのでしょう。だが、どうもいたし方がありませんよ、これがわたしの弱点なんですから。軍事上のことが好きでしてな、戦争報告類を読むのが大好きなんですよ……全くわたしは自分の進路を誤りましたよ。わたしなどは軍隊に勤めるとよかったんです、全く、ナポレオンにはなれなかったにしても、まあ少佐くらいにはなれたでしょうにね、へ、へ、へ！　さて、ここでわたしはあなたにそのなんですな、特殊な場合という事について、ほんとうのことを詳しくお話ししましょう。ねえ、あなた、現実とか自然とかいうものは実に重要なものですよ。時とすると、それは周到をきわめた計画をも瓦解（がかい）さしてしまいますからね！　ま、ま、老人のいうことをお聞きなさい。わたしはまじめにいってるんですから、ロジオン・ロマーヌイチ（こう言った時、三十五になったばかりのポルフィーリイが全く急にすっかり年をとったように見えた。声まで変わって、腰もかがんだように思われた）。それにわたしはあけっ放しな男でしてな……わたしはあけっ放しでしょう、それとも違いますかな？　どうですあなたのお考えは？　もう十分そうだろうと思われますがね。何しろこんな事まであなたにただでお教えして、おまけになんのお礼も請求しないんですからな、へ、へ！　さて、そこで先を続けますが、機知というものはすばらしいもので、いわば自然の美であり、人生の慰めであって、いかなる細工でもみごとにやってのけられそうに思われます。どうかすると、自分の妄想に夢中になっているどこかのみじめな予審判事などには、とてもそいつを見破ることなんかできそうもない、という気がするくらいです。これはよくあるやつで、何しろ予審判事もやはり人間ですからな！　ところが、自然性というやつが、そのみじめな判事を救ってくれるんで、これが困りものなんですよ！　それだのに、機知に深入りして『あらゆる障害を踏み越して行く』（これは昨日あなたがいわれた賢明かつ巧妙無比な表現なんですが）青年は、この点をまるで考えようともしないのです。で、そりゃ仮りにうまく嘘をつくとしましょう、ある男がですよ。つまり特殊な場合のことですよ。人知れず、手ぎわよく、巧妙無比な嘘をつきおおせるとしましょう。もうこれで大成功、いよいよ自分の機知の成果を楽しむことができる、とこう思っていると、あにはからんや、先生、ぱったりいってしまう！　もっとも大切な、もっとも騒動を起こしやすい場所で卒倒なんかしてしまう。そりゃまあ病気だとか、あるいは部屋

の中が息苦しかったとか、いうようなことはありましょうが、それにしてもねえ！　やはりある暗示を与えたことになります！　先生、嘘だけは無類につきおおせたが、自然性を勘定に入れることを忘れたんです！　ここにその、天の配剤があるんですな！　またどうかすると、その男は自分の機知の遊戯性につり込まれて、自分に嫌疑をかけている相手を愚弄し始めるんです。さもわざとらしく、さもお芝居らしく青くなって見せるが、しかしあまり自然らしすぎるくらいに、あまりまことしやかに青くなって見せる。で、結局やはり暗示を与えるわけになってしまう！　よし初め一度は欺きおおせても、相手がまぬけでない限り、一晩のうちにこっちだって悟ってしまいます。何しろまあ、一歩毎にこの調子なんです！　いや、何もいちいち言うがものはありませんよ。自分の方からお先き回りをしたり、問われもしないことに口を出したり、またその反対に、黙ってなければならんことを、やたらにぺらぺらしゃべったり、いろんな謎をかけたりするようになるんですよ、へ、へ！　しまいには自分からのこのこやって来て、なぜわたしをこんなに長く捕縛しないんです？　なんて尋ね始める。へ、へ、へ！　しかも、これはきわめて機知の発達した心理学者や文学者などにも生じうる現象なんですからね！　自然は鏡です、この上もなく澄みきった鏡です！　まあ、せいぜい自分を映して、よく見惚(みと)れるんですな、全くの話！　おや、ロジオン・ロマーヌイチ、なんだってあなたはそう青くなってしまったんです、息苦しいんじゃないんですか、窓でもあけましょうか？」

「いや、どうかご心配なく」ラスコーリニコフはこう叫ぶと、だしぬけにからからと笑い出した。「どうかご心配なく！」

ポルフィーリイは彼に向かい合って立ち止まり、しばらく待っていたが、やがて続いて自分でも急にからからと笑い出した。ラスコーリニコフはその純発作的な笑いを急にぷつりと切り、長椅子から立ち上がった。

「ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ！」彼はわなわなと震える足で、ようやく立っていたにもかかわらず、声高にきっぱりと言った。「僕はとうとうはっきりわかりました。あなたはあの老婆と妹リザヴェータの殺害者として、間違いなく僕に嫌疑をかけておられるのです。僕は自分の方として声明しますが、僕はもうずっと前から、そういう事にはあきあきしてしまいました。もしあなたが法律によって僕を調べる権利があると考えておられるのなら、どうか調べてください。捕縛するなら、捕縛なさい。しかし、僕を面と向かって嘲弄(ちょうろう)したり、苦しめたりするのを、許すわけにゆきません」

ふいに彼の唇は震え出して、双の目は狂憤に燃え、今まで押えていた声がりんりんと響き出した。

「許すわけにいきません！」と彼はだしぬけに叫ぶと、力いっぱい拳(こぶし)でテーブルをたたきつけた。「あなた聞こえますか、ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ？　許すわけにいきません！」

「こりゃどうも、あなたはまた何をおっしゃる！」すっ

かりおびえ上がった様子で、ポルフィーリイは叫んだ。
「あなた、ロジオン・ロマーヌイチ！　え！　しっかりなさい！　いったいどうなすったんです？」
「許すわけにいきません！」とラスコーリニコフはもう一度叫ぼうとした。
「あなた、もう少し静かに！　人が聞きつけて、やって来るじゃありませんか！　そうしたらなんと言います、考えてもごらんなさい！」ポルフィーリイは自分の顔をラスコーリニコフの顔の、すぐ傍へすり寄せながら、さも恐ろしそうにささやいた。
「許すわけにいきません、許すわけに！」とラスコーリニコフは機械的にくり返したが、急にこれも全くのひそひそ声になってしまった。
　ポルフィーリイはすばやく身をひるがえして、窓をあけに駆け出した。
「新しい空気を入れなくっちゃ！　そして、あなた、水でも少し上がるといい。何しろこれは発作ですからね！」
　こう言って、彼は水をいいつけに戸口の方へ飛んで行こうとしたが、折よくすぐそこの片隅に、水のはいったびんがあった。
「さあお飲みなさい」びんを持ってラスコーリニコフの傍へとんで来ながら、彼はささやくように言った。「ちっとはよくなるかもしれません……」
　ポルフィーリイの驚愕と介抱ぶりがあまり自然らしかったので、ラスコーリニコフは思わず口をつぐんで、けうとい好奇の表情で彼をじろじろ見回した。もっとも、水は受け取らなかった。
「ロジオン・ロマーヌイチ！　ねえ！　ほんとにそんな風にしていらっしゃると、自分で自分を気ちがいにしておしまいになりますよ、ほんとうに、ええっ！　ああっ！　お飲みなさい！　ね、少しでもいいからお飲みなさい！」
　彼は無理やりに水のはいったコップを彼の手に持たせた。こちらは機械的にそれを唇まで持って行ったが、ふと気がついて、嫌悪の表情を浮かべながら、テーブルの上に置いた。
「そうです、あれは発作だったんですよ！　そんなことをしていると、あなた、また以前の病気をぶり返してしまいますよ」とポルフィーリイは親身の同情を帯びた調子で、例のめんどりが鳴くような声をたて始めたが、しかしまだなんとなく途方に暮れたような顔つきをしていた。「ああ！　あなたはなぜそう自分の体を大切になさらないんです？　昨日もラズーミヒンがやって来ましてね――もっとも、わたしの性分が皮肉でよくないってことは、自分でも異存ありませんさ、異存ありませんとも。しかし、あの連中はそれからどんな結論を引出したと思います！……ああ、やりきれない！　あの男、昨日あなたの帰られた後でやって来て、一緒に食事をしましたが、先生しゃべるわしゃべるわ。わたしはただ両手を広げて、あきれ返るばかりでしたよ！　やれやれまあまあ……と思いましてね！　いったいあの男はあなたの使者で来たんですか？　まあ、あなた、おかけなさい、ちょっと腰

をおろしてください、お願いですから！」
「いや、僕の使者じゃありません！　だが、あの男がお宅へ伺ったことも、なんのために伺ったかということも、ちゃんと知っていました」とラスコーリニコフはきっぱりと答えた。
「知っておられたんですって？」
「知っていました。で、それがどうしたというんです？」
「ほかでもありません、ロジオン・ロマーヌイチ。わたしはあなたのご行跡は、まだこれどころじゃない、大したものを知っておりますよ。何もかも承知しております！　もう日が暮れて夜近いころに、あなたが貸間を捜しにお出かけになって、呼鈴を鳴らしたり、血のことをきいたりして、職人や庭番どもを煙にまかれたことまで、ちゃんと知ってるんですからね。そりゃその時のあなたの精神状態はわたしだってわかっております……が、それにしても、あんな事をしていたら、それこそ自分で自分を気ちがいにしておしまいになりますぜ、全くのところ！　頭がぐらぐらしてきますよ！　あなたの内部にはさまざまな侮辱――第一には運命から、次には警察の連中から受けた侮辱のために、高潔な忿懣が激しくわき立ったので、そのためにあなたはなんですな、少しも早く皆に口を開かせて、それでもって一時にすっかり片をつけてしまおうというので、あちこちもがき回っておられるんでしょう。つまり、あんな愚にもつかない想像や、ああした嫌疑が、厭で厭でたまらなくなったんですな。え、そうでしょう？　あなたの気持をうまくいい当てたでしょう？……そんな風にしておられると、あなたは自分一人だけじゃない、ラズーミヒンまで逆上させてしまいますよ。あの男はそんな役回りにはあまり善人すぎますからね。ご自分だって承知しておいででしょう。あなたのは病気で、あの男のは友情だが、しかし病気ってやつは感染しやすいものですからな……いや、今にあなたの気分が落ち着いたら、わたしがよくお話ししますよ……まず、ともかくおかけなさい、ね、お願いですから！　どうか少し休んでください、まるで顔の色ったらありませんよ。さ、少しおかけなさい」
　ラスコーリニコフは腰をおろした、戦慄はしだいにおさまり、体じゅうが一面にぽっぽっとしてきた。深い驚きに打たれながら、彼は注意を緊張させて、びっくりしたようにまめまめしく世話を焼くポルフィーリイのことばに、じっと耳を傾けていた。けれども彼は、信じたいと思う一種の不思議な要求を感じながら、その一言もほんとうにしなかった。貸間捜し云々という、ポルフィーリイの思いもよらぬことばは、根底から彼に激しい衝動を与えた。『これはいったいどうしたことだ？　してみると、あすこへ行ったのを知ってやがるんだな？』という考えがふいに浮かんだ。『しかも、自分の方からおれにしゃべるなんて！』
「さよう、ちょうどそれと同じような心理的事件が、われわれの扱った裁判事件の中にありましたよ。そういう病的な事件がね」とポルフィーリイは早口に続けた。「やはりある男が自分で自分に殺人罪を塗りつけてしまった

んですが、しかもその妄想の程度がひどいんですよ。自分の見た幻覚を引っ張り出して、事実は具陳する、その場の状況は詳述するという風で、みんな誰も彼もことごとく煙にまかれてしまっている、とまあどうでしょう！

その男は全く偶然に意識せずして、多少殺人の原因になったとはいうものの、全く多少という程度にすぎないんです。ところがその男は、自分が殺人の導因を与えたと知ってから、急にくよくよし出し、頭の調子が変になり、いろんな妄想に悩まされ出して、すっかり気ちがいみたいになってしまいましてね、あげくの果てに自分を犯人と思いこんだわけなのです！　しかし、結局大審院が事件を明瞭に審理したので、不幸な男はやっと無罪を証明されて、監視つき釈放ということになりました。これなんかひとえに大審院の功によるものですな！　いやはや、どうも驚くべき事じゃありませんか！　だから、あなた、そんな風にしてると、どんなことになるかわかりゃしませんよ。夜中に呼鈴を鳴らしに行ったり、血のことを尋ねたりして、自分で自分の神経をいらいらさせたがる傾向が現われ出したら、脳炎くらいひき起こすのは、造作もないことでさあ！　だってこうした心理は、わたしが経験によって研究したんですからね。こういう風なことが昂じると、場合によっては、窓や鐘楼からでも飛びおりたくなってきますよ。そういった感覚は魅惑の強いものですからな。呼鈴のことだって同じりくつですて……病気ですよ、ロジオン・ロマーヌイチ、病気ですとも！　あなたは自分の病気をあまり軽視しておられますよ。いかがです。経験のある医者にお診せになったら？　だって、あなたのかかりつけの太っちょ、ありゃいったいなんです！……あなたは熱に浮かされてるんですよ！　あんなことはみな熱に浮かされて夢中でやっておられるんですよ！……」

一瞬間、ラスコーリニコフの周囲のものが、ぐるぐると回り出した。

『いったい、いったいいまもこの男は嘘をついてるんだろうか？』という想念が彼の頭にひらめいた。『それはあり得ない、あり得ないことだ！』と彼はこの想念を追いのけるようにした。彼はこの想念が自分をいかなる狂憤におとしいれるかわからない、またそうした狂憤の結果、発狂さえしかねないということを、あらかじめ感じたからである。

「あれは熱に浮かされてしたのじゃありません、あれは正気だったのです！」ポルフィーリイの戦術を見抜こうと、あらん限りの理知の力を緊張させながら、彼はそう叫んだ。「正気だったのです、正気だったのです！　おわかりですか？」

「いや、わかっていますよ、聞いていますよ！　あなたは昨日も、熱に浮かされちゃいないとおっしゃって、なんだか特別それを強調なすった！　あなたの言われそうなことは、みなよくわかっていますよ！　ええ、どうしてどうして！……しかし、ねえ、ロジオン・ロマーヌイチ、一つこれだけでも聞いてください。もし仮りにあなたが、じじつ、本当に罪があるとか、あるいはあの忌ま

わしい事件になんらかの関係があるとかすれば、ね、あなたは何もかも夢中でやったのじゃない、完全に意識してやったのだなんて、冗談じゃない、そんなことを自分で言い張ったりなさるでしょうか？　しかも、格別それを強調する、強情なくらいに強調する、ねえ、いったいそんなはずがあるでしょうか？　ねえ、全く、そんな理屈ってあるものでしょうか、考えてもごらんなさい！　わたしに言わせると、全然その反対です。だって、もしあなたに何か後ろめたいことがあれば、あなたはどうしたって『たしかに夢中だった！』と主張なさらなけりゃならんはずです。そうじゃありませんか？　ね、そうでしょう？」

この問いの中には、何かしら悪ごすい感じのするものが響いていた。ラスコーリニコフはかがみ込んでくるポルフィーリイを避けて、長椅子の背へ身をもたせた。そして無言のまま、思い惑うようにじいっと相手を見つめていた。

「それからまた、あのラズーミヒン君のことにしてもそうです。つまり、あの男が昨日わたしのところへ話しに来たのは、自分の意志から出たことか、それとも、あなたの使嗾（しそう）によるものか？　という問題ですな。あなたの立場にあったら、あれは自分の意志で来たのだと答えて、あなたの使嗾によるものだということは、隠さなくちゃならんはずです！　ところが、あなたはお隠しにならないんですからな！　それどころか、自分の使嗾によるものだと主張なさる！」

ラスコーリニコフは、けっしてそんなことを主張した覚えがなかった。悪寒が彼の背筋を走って通った。

「あなたは嘘ばかり吐いていらっしゃる」彼は病的な微笑に唇をゆがめながら、弱々しい声でのろのろと言った。「あなたはまたしても、僕の戦術をすっかり見抜いている、僕の答えを全部あらかじめ承知している、というような顔がして見せたいんですね」自分でももうことばの選択に対して、当然の注意を払っていないと感じながら、彼はこう言ってしまった。「あなたは僕をおどかそうとしていらっしゃるんです……でなけりゃ、ただもう僕を愚弄（ぐろう）していらっしゃるんだ……」

彼はそう言いながら、いつまでもひた押しに相手をじっと見つめていた。と、ふいにまた限りなき憎悪が彼の目にひらめいた。

「あなたは嘘ばかりいってるんです！」と彼は叫んだ。「あなたは自分でもよく知っていらっしゃるでしょう――犯人にとって一番いいごまかしの方法は、隠さないでもいいことはできるだけありのままを言うことなんです……できるだけ。僕はあなたを信用しない！」

「あなたはなんというひねくれ者だ！」ポルフィーリイはひひひと笑った。「あなたにゃ手こずってしまいますよ。どうもあなたには何か偏執狂（モノマニア）みたいなところがありますな。じゃ、わたしを信用しないとおっしゃるんですね？　ところが、わたしはこう言いますよ――あなたはもう信用していらっしゃる、四分の一尺くらい信用していらっしゃるんです。しかも、わたしは一尺ぜんぶ信用

させて見せますよ。だって、わたしは誠心誠意あなたを愛し、心からあなたのためよかれと願っているんですからね」

ラスコーリニコフの唇はわなわなと震え出した。

「そうです、願ってるんです。ですから、はっきり言いますがね」ラスコーリニコフの手を肱の少し上のところで、さも親しげに軽く握って、彼はことばを続けた。「はっきり言いますがね、あなた病気に注意なさい。おまけに、今あなたのところへ、家族の方が見えてるんですから、その人たちのことも少しお考えにならなくちゃ。あなたはその人たちを安心させて、いたわってあげなきゃならないのに、びっくりさせてばかりいらっしゃるんだからなあ……」

「それがあなたになんの関係があるんです？　どうしてあなたはそれをご存じなんです？　なんのためにそんなことに興味をお持ちになるんです？　してみると、あなたは僕を監視しておられるんだな。そしてそれを見せつけようとしてらっしゃるんだ！」

「とんでもない！　それはみんなあなたから、あなた自身から聞いたことじゃありませんか！　あなたは興奮のあまりご自分で、わたしやほかの人たちに、先走りしてお話しなすったのに、お気がつかないんですね。ラズーミヒン君――ドミートリイ・プロコーフィッチからも、昨日いろいろ興味のある詳細な話を聞きましたよ。いや、あなたはわたしの話の腰をお折りになった。で、続けて言いますがね、あなたはその猜疑心のために、鋭い機知を持ちながら、事物に対する健全な判断力までなくしてしまわれたのです。まあ、たとえば、また同じ題目になりますが、あの呼鈴のことだってそうです。あんな貴重な材料を、あんな大きな事実を（全く大した事実ですよ！）わたしは何もかもそっくり、あなたにぶちまけてしまったじゃありませんか。予審判事のわたしがですよ！　ところが、あなたはそれになんの意味も認めていらっしゃらんでしょう？　ねえ、もしわたしがほんのちょっとでもあなたを疑っていたら、こんなことをしていいものでしょうか？　どうしてそれどころか、まず初めあなたの疑念を眠らせておいて、わたしがすでにこの事実を知っているということは、おくびにも出さないようにすべきはずです。あなたの注意をまるで別な方へそらしておいて、ふいに斧で脳天へみね打ちを食わせ（あなたの表現法をかりればですね）、それからやつぎばやに、『いったいあなたは晩の十時、いやもうかれこれ十一時に近い刻限に、殺人のあった住まいで何をしましたか？

なんのために呼鈴を鳴らしましたか？　なんのために血のことを尋ねましたか？　なんのために庭番どもに変なことをいって、警察へ――副署長のところへ行けなどとすすめましたか』ときく。まあさしずめこんなぐあいにやるべきはずなんです。もしわたしが爪の垢ほどでもあなたを疑ってたらね。それから、すっかり正式に口供をとって、家宅捜索をやるばかりか、しだいによっては、あなたを捕縛さえしなくちゃならないかもしれません……してみると、そういう態度に出ない以上、わたしはあ

なたに対してなんの嫌疑もいだいていないわけです！ ところが、あなたは健全な判断力を失っておられるもんだから、くり返して申しますが、何一つお見えにならないんです」

ラスコーリニコフはぴくりと全身を震わせたので、ポルフィーリイは明瞭すぎるほど明瞭にそれを見て取った。

「あなたはやはり嘘をいってるんです！」と彼は叫んだ。「あなたのねらっていることは、何かわからないけれど、あなたは嘘ばかりついているんです……さっきあなたが言われたのは、そんな意味じゃなかった。ぼく誤解なんかするはずがない……あなたは嘘をついてるんです！」

「わたしが嘘をついてる？」とポルフィーリイはかっとしたらしく、ことばじりを押えたが、例の愉快らしい嘲笑的な表情を保ったまま、ラスコーリニコフが自分のことをどう思っていようと、少しも気にしていないらしい様子だった。「わたしが嘘をついてるんですって？……ではさっきわたしはあなたに対してどんな行動をとりました（わたしがですよ、予審判事がですよ）。わたしは自分の方からあなたにありったけの弁護法を暗示したり、ぶちまけたりしたじゃありませんか。曰く、『病気、熱病の発作、極度の侮辱、憂鬱症、警察の連中』などといったような心理描写まで、自分の口から拾い上げたじゃありませんか？ え？ へ、へ、へ！ もっともそれは――ついでに申し上げておきますがね――すべてそうした心理的弁護法や口実や言いぬけなどきわめて効力のないもので、どうにでもとれるやつなんですよ。『病気、熱病の発作、うわごと、幻覚だ。覚えていない』これはみな実際にそうに違いないが、しかし、その病気の時、うわごとの間に、いつも決まってそういう幻覚ばかり見えて、なぜほかの事が現われなかったのでしょう？ ほかの事だって幻に現われていいはずじゃありませんか？ そうでしょう？ へ、へ、へ、へ！」

ラスコーリニコフは傲然と、さげすむように相手を見やった。

「一口に言えば」彼は立ち上がりながら、その拍子にポルフィーリイを少しばかり突きのけ、どこまでも主張するような調子で声高く言った。「一口に言えば、あなたは僕を絶対に嫌疑の余地のないものと思っていらっしゃるのか、あるいはそうでないのか、それを僕は知りたいんです。どうか聞かしてください。ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ、はっきりと決定的に言明してください、さあ早く、今すぐ！」

「いやはや、こりゃどうもやっかい千万な！ やれやれ、あなたを相手にするのは実にやっかいですなあ」とポルフィーリイは愉快らしい、狡猾な、いささかも心配そうにない顔つきで叫んだ。「それに、あなたがそんなことを知って何になるんです、まだあなたにご迷惑をかけようともしない先から！ なんのためにそういろんなことを知ろうとなさるんです。全くあなたはねんねえですな。手の中へ火を入れてくれ、早く入れてくれとねだってる形ですものね！ それに、あなたはなぜそう心配なさる

んです？　どうしてそう自分の方から押しつけがましくおっしゃるんです、なんの理由で？　え？　へ、へ、へ！」
「くり返して言いますが」とラスコーリニコフは狂暴な勢いで叫んだ。「僕はもうこの上我慢ができません！……」
「何がです？　未知の不安というやつがですか？」とポルフィーリイはさえぎった。
「毒口をきくのはよしてください！　僕はもういやだ！……もういやだと言ってるんですよ！……我慢ができない、いやです！……わかりましたか！　わかりましたか！」また拳でテーブルをどんとなぐりつけ、彼は大喝した。
「まあ静かに、静かに！　人に聞こえるじゃありませんか！　わたしはまじめにご注意しますが、自分というものをだいじになさい。わたしは冗談言ってるのじゃありませんぞ！」とポルフィーリイはささやくような声で言ったが、今度はさっきのような女じみた善良さも、おびえたような表情もその顔に浮ばなかった。それどころか、いま彼は眉をしかめて、いっさいの秘密とあやふやな態度を一度に破り捨てるような風で、おおっぴらに厳然と命令したのである。
　けれど、それはほんの刹那にすぎなかった。荒肝をくじかれたラスコーリニコフは、しかしたちまち正真正銘の狂憤におちいったが、不思議にも、彼は憤怒の発作の頂上にあったにもかかわらず、またもや静かに話せという命令に服従したのである。
「僕はおめおめと人に苦しめられなんかしませんぞ！」と彼は急にさっきと同じ調子でささやいたが、命令に従わずにいられない自分自身を、苦痛と憎悪の念とともに稲妻のように意識した。そして、その意識のために、一そう激しい狂憤のとりこになったのである。「僕を逮捕してください、家宅捜索をしてください。しかし、いっさいの行動を正式にやってもらいましょう。人をおもちゃにするのはよしてください！　そんな失敬なまねは承知しません……」
「いや、形式のことはご心配に及びませんよ」ポルフィーリイは以前の狡猾そうな微笑を浮かべ、満足そうな様子さえ見せて、ラスコーリニコフの狂憤に見とれながら、そのことばをさえぎった。「わたしは今日あなたを家庭的にお招きしたので、つまりまあ、ぜんぜん友人関係なんですよ！」
「僕はあなたの友誼なんか望みません。そんなものは、唾でも引っかけてやりたいくらいだ！　いいですか？　さあこの通り、僕は帽子を取って出て行くんだ。おいどうだ、捕縛するつもりなら、これに対してなんというね？」
　彼は帽子をつかんで、戸口の方へ行きかけた。
「ときに、一つ思いがけない贈物があるんですが、見たかありませんかね？」またもや彼の肘の少し上をつかんで、戸口で引止めながら、ポルフィーリイはひひひと笑った。
　彼は目に見えてますます愉快げな、遊戯的な気分にな

って行った。そのためにラスコーリニコフはすっかり前後を忘れてしまった。
「思いがけない贈物とはなんです？　どんなものだ？」彼はふいに立ち止まって、おびえたようにポルフィーリイを見やりながら尋ねた。
「思いがけない贈物は、そら、あすこに、ドアの向こうのわたしの住まいの方にいますよ。へ、へ、へ！　（と彼は自分の官舎へ通ずる、仕切り壁に設けたしまった戸口を指さした）。逃げて行かないように、鍵をかけてしめ込んどいたのです」
「いったいなんです？　どこに？　何ものです？……」
　ラスコーリニコフはそのドアへ歩み寄り、あけようとしたが、ドアには鍵がかかっていた。
「かかってるんです、さあ鍵！」
　と言いながら、ほんとうに彼はポケットから鍵を取り出して、それをラスコーリニコフに見せた。
「きさまはのべつ嘘ばかりついてやがる！」ラスコーリニコフはもうこらえきれなくなって、怒号を始めた。「でたらめを言うな、このいまいましい道化め！」彼はこうわめきながら、ドアの方へあとずさりしてはいたものの、いささかも臆した様子のないポルフィーリイに飛びかかった。
「おれは何もかもみんなわかったぞ！」と彼はポルフィーリイの傍へ駆けよった。「きさまは嘘ばかりついてるんだ、おれに尻尾を出させようと思って、人をからかってるんだ……」
「いや、もうそのうえ尻尾を出すわけにはゆきませんよ、ロジオン・ロマーヌイチ。あなたはまるで夢中になっておられる。そんなにどなるのはおよしなさい、人を呼びますよ」
「嘘をつけ、何があるもんか！　人を呼ぶなら呼ぶがい！　きさまはおれの病気を知ってるものだから、人を夢中になるまでからかって、尻尾を押えようと思ってるんだ。それがきさまの魂胆なんだ！　そんな手はだめだ、証拠を出せ！　おれは何もかもわかったぞ！　きさまにゃ証拠なんかありゃしない。ただザミョートフ式の愚にもつかぬ、くだらない邪推があるだけなんだ！……きさまはおれの性格を知ってるもんだから、おれを夢中になるほどおこらした上、ふいに牧師や陪審員などを引張って来て、どぎもを抜くつもりだったんだろう……きさまはその連中を待ってるんだろう？　おい？　何を待ってるんだ？　どこにいるんだ？　出して見せろ！」
「どうも、あなた、こんなところに陪審員なんかいてたまるもんですか！　人間ってとんでもない妄想を起こすもんだ！　そんな風じゃ、あなたのおっしゃるように、正式にやることも何もできやしませんよ。あなたはその辺のことをなんにもご存じないんだ……正式にはどこへも逃げやしませんよ。今に自分でおわかりになりますよ！……」と、ドアの方へ耳をそばだてながら、ポルフィーリイはつぶやいた。
　実際この瞬間、次の間のすぐ戸口のところで、何かしら物音らしいものが聞こえた。

「あっ、来たぞ」とラスコーリニコフは叫んだ。「きさまはあいつらを呼びにやったんだな！……きさまはあいつらを待ってたんだろう？　きさまは思わくがあったんだ……さあ、そいつらをみんなここへ出せ。陪審員でも、証人でもなんでも好きなものを……さあ出せ！　おれも用意ができてるぞ！　用意が！」

けれども、その時奇怪なことが持ち上がった。それこそラスコーリニコフはもちろん、ポルフィーリイでさえも、こんな大団円は予期することができなかったくらい、普通の場合では思いがけないでき事である。

六

後になってラスコーリニコフが、この瞬間のことを思い出すたびに、すべてが次のような形で浮かんでくるのであった。

ドアの向こう側で聞こえていた物音は、とたんにたちまち大きくなって行き、ドアが細目に開かれた。

「どうしたんだ、いったい？」とポルフィーリイはいまいましそうに叫んだ。「前からちゃんと注意しといたじゃないか……」

その瞬間、答えはなかったが、察するところ、ドアの向こうには四、五人の人がいて、誰かを突きのけようとしているらしかった。

「おい、どうしたんだよ？」とポルフィーリイは不安そうにくり返した。

「未決囚のニコライをつれてまいりました」という誰かの声が聞こえた。

「いけない！　向こうへ連れて行け！　もうしばらく待つんだ！……なんだってあいつこんな所へのこのこ来たんだ！　だらしのない！」戸口の方へ飛んで行きながらポルフィーリイはこうどなった。

「でも、こいつが……」とまた同じ声が言いかけたが、急にとぎれてしまった。

二秒ばかり（それより長くはなかった）、戸の外では本物の格闘が続いた。それからふいに、誰かが誰やらを

力まかせに突き飛ばしたらしい気配がした。と、続いて誰か真っ青な顔をした男が、いきなりポルフィーリイの書斎へつかつかとはいってきた。

男は見るからに奇妙な様子をしていた。彼は真っ直ぐに前の方を見ていたが、誰の顔も目に入らないような風である。目には決心の色がひらめいていたが、同時に、まるで刑場にでも引かれて行く人のように、死のような青みがその顔をおおい、血の気を失った白い唇は軽くおののいていた。

それは、平民らしい服装をして、頭を短かくおかっぱに刈りこみ、妙に乾いたような細い顔の輪郭をした、やせぎすで中背の、まだいたって若い男だった。思いがけなく突き飛ばされた男は、彼のあとから第一番に部屋へ飛び込んで、その肩をつかまえた。それは看守だった。がニコライは手をぐいとしゃくって、またもや振りほどいてしまった。

戸口の所には、いくたりかの物見だかい連中が集まった。あるものは、部屋の中まではいりこもうとしていた。以上のことはほとんど一瞬時に起こったのである。

「あっちへ行け、まだ早い。こっちから呼ぶまで待っておれ！……なんだって先へ連れてくるんだ？」とポルフィーリイはやや度を失った形で、いまいましくてたまらないというようにつぶやいた。

ニコライはいきなりぱたりと膝を突いた。

「なんだおまえ？」とポルフィーリイは驚いてこうどなった。

「悪うございました！　あれはわっしの仕業なので！わっしは人殺しでございます！」とふいにニコライは、いくらか息をはずませてはいたが、かなり高い声で言った。

十秒ばかりの間、沈黙が続いた。一同はあきれてものが言えないというような風だった。看守さえ思わず一歩後ろへたじろいで、もうニコライの傍へ寄ろうともせず、機械的に戸口の方へあとずさりして棒立ちになった。

「なんだって？」つかの間の麻痺状態からわれに返って、ポルフィーリイはこう叫んだ。

「わっしは……人殺しでございます……」ほんの心もち無言でいた後、ニコライはまたくり返した。

「なんだって……お前が！……どうして……誰を殺したのだ？」

ポルフィーリイは明らかに狼狽していた。ニコライはまたほんの心もち無言でいた。

「アリョーナ・イヴァーノヴナと、妹さんのリザヴェータ・イヴァーノヴナを、わっしが……殺しました……斧で。魔がさしたんでございます……」彼はふいにこう言い足すと、また黙ってしまった。

彼はその間ずっと膝をついていた。

ポルフィーリイはややしばらく、思いめぐらすように立っていたが、急にまたおどり上がり、呼ばれもしないのに集まった証人連に手を振って見せた。こちらはすぐに姿を消してドアはぴったりしまった。それから彼は片隅に立ったまま、けうとい目つきでニコライをながめて

いるラスコーリニコフをちらと見て、その方へ足を向けようとしたが、急にまた立ち止まり、彼を見やったと思うと、すぐさま視線をニコライの方へ移した。それから、またラスコーリニコフとニコライを見比べたが、急に夢中になったようなようすで、またもやニコライの方へ飛んで行った。

「なんだってきさまは魔がさしたなんかって、出しゃばったまねをするんだ？」と彼はほとんど憎々しげにどなりつけた。「お前に魔がさしたかささないか、おれはまだ尋ねちゃおらんじゃないか、さあ言え……お前が殺したのか？」

「わっしが下手人（げしゅにん）なので……申し立てをいたします……」とニコライは言った。

「ちょっ！　なんで殺したんだ？」

「斧でございます。前から用意しておいたんで」

「ちょっ！　先ばかり急いでやがる！　一人でか？」

ニコライは問いがわからなかった。

「一人で殺したのか？」

「一人なんで。ミーチカにゃ罪はありません。あの男はまるっきりこれにかかわり合いがないんで」

「ミーチカのことなんかあわてて言わなくてもいい！　ちょっ！……じゃ、お前はどうして、どうしてお前はあの時階段を走っておりたのだ？　だって、庭番がお前たち二人に出会ったじゃないか？」

「あれはみんなの目をくらますためなんで……そのためにその時……ミーチカと一緒に走っておりたんで」ニコライはせき込みながら、前から用意しておいたらしくこう答えた。

「ふん、やっぱりそうだ！」と憎々しげにポルフィーリイは叫んだ。「腹にもないことを言ってるんだ！」と彼はひとり言のようにつぶやいたが、ふいにまたラスコーリニコフが目についた。

察するところ、彼はニコライのことにすっかり気を取られて、ちょっとの間ラスコーリニコフのことをほとんど忘れていたらしい。で、いま急にわれに返ると、きまり悪そうな様子さえ見せた……

「ロジオン・ロマーヌイチ！　失敬しました」と彼はラスコーリニコフの方へ飛んで行った。「それじゃいけません……どうぞ、失礼ですが……あなたはここにおられても仕様がありませんから……わたし自身も……ごらんのとおり、どうもこういう思いがけない贈物なんでして！……さあどうぞ！……」

彼はラスコーリニコフの手をとって、戸口を指さして見せた。

「あなたもどうやら、こんなこととは予期なさらなかったようですね？」とラスコーリニコフはもちろん、まだ何一つはっきりわからないなりに、もうこの間にかなり元気づいて問い返した。

「あなただって思いがけなかったでしょう。ほうら、手が、こんなに、震えている！　へ、へ！」

「それにあなたも震えていらっしゃいますね、ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ」

「わたしも震えていますよ。あまり意外だったもんですからね！……」
　彼らはもう戸口のところに立っていた。ポルフィーリイは、ラスコーリニコフが出て行くのを、じれったそうに待っていた。
「ところで、思いがけない贈物は、結局、見せてくださらないんですか？」だしぬけにラスコーリニコフは、あざけるような調子で言った。
「とはおっしゃるが、そのご当人の口の中じゃ、歯の根が合わずがちがちいってるじゃありませんか、へ、へ！　あなたも皮肉な人ですな！　ではまた、いずれ改めて」
「僕はもうこれでさようならだろうと思いますが！」
「何事も神さまの思召しです、何事も神さまの思召しです！」妙にひん曲がったような微笑を浮かべながら、ポルフィーリイはそうつぶやいた。
　事務室を通り抜けるとき、ラスコーリニコフは、大勢のものがじっと自分の方をみつめているのに心づいた。控室の群衆の中で彼は目ざとく、あの時夜中に警察へ行けといったあの家の庭番二人を見分けた。彼らは立って、何かを待っていた。けれど、彼が階段へ出るが早いか、ふいにまた自分のうしろに、ポルフィーリイの声を聞きつけた。振り返ってみると、ポルフィーリイがはあはあ息を切らしながら、追っかけて来るのであった。
「もう一言だけ、ロジオン・ロマーヌイチ。ああしたいろんなことは、みんな神さまの思召しですが、しかしやっぱり正式に、なんとかお尋ねしなくちゃならんことになるでしょう……そういったわけで、またお目にかかれるはずですな、そうでしょう！」
　こう言って、ポルフィーリイは微笑を含みながら、彼の前に立ち止まった。
「そういったわけですな」と彼はもう一度言い足した。
　彼はもっと何か言いたかったのだが、なんとなく、言い出しにくいらしい、とも想像ができた。
「いや、ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ、どうか先ほどのことは何分お許しを願います……少々とりのぼせたものですから」ちょっとからいばりがしてみたいという欲望を抑えかねるほど、もうすっかり元気を回復したラスコーリニコフは、こんな風なことを言いかけた。
「どうしまして、どうしまして」とほとんどうれしそうな調子で、ポルフィーリイは引きとった。「わたしもご同様ですよ……わたしはどうも皮肉な性分でしてな、慙愧にたえません、慙愧にたえません！　またお目にかかりましょう。神さまのお手引があれば、必ず必ずお目にかかりますよ！――」
「そして、徹底的にお互い同士を認識しあいますかね？」とラスコーリニコフは引きとった。
「そう、徹底的にお互い同士を認識しあいましょう」とポルフィーリイはおうむ返しに言った。そして、目を細めながら、まじめくさって彼をじろりと見た。「これから命名日の祝に？」
「葬式です」
「ああ、そうだったっけ、葬式にね！　まあ、お体を大

切に、お体を」
「どうも、僕の方からはなんと申し上げたらいいやら、見当がつきません！」もう階段をおりかけたラスコーリニコフは、こう相手のことばを受けたが、ふいにくるりとポルフィーリイの方へ振り返って、「まあ、今後いっそうのご成功をお祈りする、とでも申しましょうか。だが、なんですね、あなた方の職務も実に滑稽なもんですね！」
「なぜ滑稽なんです？」同じく帰りかけていたポルフィーリイは、たちまち耳をそばだてた。
「だって、そうじゃありませんか。ほら、あの可哀想なミコールカ（ニコライ）を、あなたはずいぶん責めさいなんだことでしょうね。心理的に、あなた一流のやり方で、あの男が白状するまで、ね。昼も夜も『きさまは人殺しだ、きさまは人殺しだ……』と言っていじめつけなすったに相違ない。ところで今度あの男が白状してしまうと、あなたはまた、『嘘つけ、きさまは人殺しじゃない！　きさまにそんなことのできるはずがない！　腹にもないことを言ってやがる！』なんて体じゅうの骨がみしみしいうほど痛めつけようとなさる。ねえ、これでも滑稽な職務じゃないでしょうか？」
「へ、へ、へ！　今わたしがニコライに『腹にもないことばかり言ってやがる』といったのに、ちゃんとお気がついたんですね？」
「どうして気がつかないでいられます？」
「へ、へ！　なかなか敏感ですね、実に敏感だ。なんにでも気がおつきになる！　全くユーモアの天分を持っていらっしゃる！　滑稽の真髄を把握なさるんですからな……へ、へ！　作家の中ではゴーゴリが、こういう天分をきわめて豊富に持っていたそうですな？」
「そう、ゴーゴリがね」
「さよう、ゴーゴリがね……じゃいずれまた」
「いずれまた……」
ラスコーリニコフは真っ直ぐに家路へ向かった。彼はすっかり頭が混乱して、何が何かわからなくなってしまったので、家へ着くが早いか、いきなり長椅子に身を投げて、やっと体を休めながら、いくらかでも考えをまとめようと努めながら、十五分間ばかりじっとしていた。ニコライのことに至っては、とかくの判断に取りかからないことにした。彼は激しい衝動を受けたのを感じていた。ニコライの自白の中には、今の彼にはどうしても理解することのできない、説明の仕様もない、驚くべきものがひそんでいる。しかし、ニコライの自白は厳然たる事実であった。この事実の結果は、彼にとってたちまち明瞭になった。虚偽は暴露しないでいるはずがない。その時はまた彼の取調べを始めるに違いない。しかし、少なくともそれまで彼は自由である。だから、ぜひ何か自分を守るために工作しておかなければならぬ。なぜなら危険は避けがたいからであるから。
とはいえ、それはどの程度だろう？　状況は段々はっきりしてきた。ポルフィーリイとの先刻の一幕を、ざっと、荒筋だけ拾って思い出したとき、彼は恐怖のあまり、

もう一度戦慄(せんりつ)せずにいられなかった。もちろん、彼はまだポルフィーリイの目算を、すっかり知っているわけではない。先ほどは彼の作戦を残りなく看破することができなかった。けれど作戦の一部は暴露された。そして、ポルフィーリイの作戦上のこの『一手』が、彼にとっていかに恐ろしいものであったかということは、もちろんなん人といえども、彼以上に理解することはできなかったはずだ。ほんのいま一歩で、彼はもう完全に、実質的に、正体を現わしてしまったかもしれないのだ。彼の病的な性格を知って、一目で確実に彼を見抜きかつ把握したポルフィーリイは、あまり思い切りがよすぎたものの、しかしほとんど確実な行動を取ったのである。先ほど、ラスコーリニコフはずいぶん自分の立場を傷つけた。それはなんとしても争われないにしても、しかし事実にまではやはりまだ達していなかった。これらはすべてまだ相対的なものにすぎない。が、はたしてそうだろうか？

はたして彼は今すべてを理解してるのだろうか？　誤算してはいないか？　今日ポルフィーリイはどんな結果へ導いてゆこうとしたのだろう？　実際、彼は今日なにか準備していたのか？　そうだとすれば、それはいったいなんだろう？　実際、彼は何か待っていたのだろうか、どうだろう？　もしニコライのおかげで、あの思いがけない破局(カタストロフ)がやって来なかったら、二人は今日どんな風に別れたろう？

ポルフィーリイは自分の作戦を、ほとんど全部見せてしまった。もちろんそれは冒険だったに相違ないが、とにかく見せてしまった。もし実際ポルフィーリイに何かあれ以外の計画があったとすれば、それをも出して見せたに相違ない（ラスコーリニコフはどうもそう思われて仕方がなかった）、いったいあの『思いがけない贈物』とはなんだろう？　ただの嘲弄(ちょうろう)にすぎないのか？　それとも何か意味があるのか？　この謎の下に何か具体的な証拠なり、有力な起訴理由なりに類したものが、ひそんでいるだろうか？　昨日の男は？　あの男はいったいどこへ消えてしまったのだろう？　今日どこにいたのだろう？　もしポルフィーリイが何か確かなものを握っているとすれば、もちろん、それは昨日の男と関連したことに相違ない……

彼は頭を垂れて膝に肘(ひじ)を突き、両手で顔をおおい、長椅子に腰かけていた。神経的な戦慄はまだ全身を走り続ける。ついに彼は帽子をつかんで立ち上がり、ちょっと考えたのち、戸口の方へ足を向けた。

彼はなんとなく、少なくも、きょう一日だけはほとんど絶対に安全と見なしていい、そういう予感がした。ふいに心の中でほとんど喜びに近い感じを覚えた。彼は少しも早くカチェリーナのとこへ行きたくなった。葬式にはむろん遅れてしまったが、法事には間に合うだろう。そうすれば、そこですぐソーニャに会える。

彼は立ち止まって、ちょっと考えた。病的な微笑がその唇に押し出された。

『今日だ！　今日だ！』と彼は口の中でくり返した。『そうだ！　どうしても今日だ！　きっとそうしなくちゃ…

…』

彼がドアをあけようとしたとたん、急にそのドアがひとりでに開き始めた。彼は思わず震え出し、あとへ飛びしさった。ドアはそろそろと静かに開いて、ふいに人の姿が現われた――あの大地からわき出たような昨日の男である。

男はしきいの上に立ち止まって、無言のままラスコーリニコフをちらと見た後、部屋の中へ一足踏み込んだ。彼は昨日と寸分違わぬ身なりをし、同じような格好をしていたが、顔と目つきには著しい変化が生じていた。今彼はなんとなくしょげた様子で、しばらくじっとたたずんでいたが、やがてほっと深いため息をついた。もしこのうえ掌を片頬におしあてて、首を一方に傾けさえすれば、まるで百姓女そのままという形だった。

「なんの用です？」ラスコーリニコフは生きた心地もなくこう尋ねた。

男はしばらく黙っていたが、急に低く腰を曲げて、ほとんど床に届くほどの会釈をした。すくなくとも、右手の指は床に触れた。

「君どうしたんです？」とラスコーリニコフは叫んだ。

「わっしが悪うございました」と男は低い声で言った。

「何が？」

「悪い了簡（りょうけん）を起こしまして」

二人はたがいに顔を見合せていた。

「いまいましくなったんでございます。あの時あなたがあそこへおいでになって、たぶん酔っておられたのではありましょうが、庭番に警察へ行けといったり、血のことを尋ねたりなさいましたね、それをぼんやり酔っ払いだと思って、うっちゃっておいたのが、いまいましくなりましたんで。あんまりいまいましくって、夜の目も寝られないようになりました。で、わっしゃあなたの所番地を覚えておりましたんで、昨日ここへ来て尋ねましたようなわけで！……」

「誰が来たんです？」ラスコーリニコフは瞬間的に記憶を呼びさましながら問い返した。

「わっしでございます。つまり、あなたにゃ申し訳のない事をしましたんで」

「じゃ、君はあの家にいるんですか？」

「へい、あすこなんで。わっしゃあの時みんなと一緒に、門の下に立っておったんですが、それともうお忘れになりましたかね？　わっしどもはもうずっと昔からあすこに仕事場を持っておりますんで。わっしどもは毛皮屋商売の町人で、家で注文仕事をしておりますんですが……なんともいえないほどいまいましくなりまして……」

ふいにラスコーリニコフは、一昨日の門下の情景がはっきり思い出された。あの時そこに庭番のほか、まだいくたりかの男と、女も二、三人立っていたことが、思い合わされた。あの時いきなり警察へ突き出せといった一人の声を思い起こした。その顔は思い出せないし、いま会っても気がつくまいけれど、自分がその時そっちを向いて、何やら答えたことが頭に残っている……

してみると、これで昨日のあの恐怖は、すっかり解消

したわけである。今かんがえてみてさえ何よりも恐ろしいのは、こんなつまらないことのために、危うく破滅に瀕していたことである。危うく自分で自分をほろぼそうとしていたことである。これで見れば、間借りの一件と血の問答以外、この男には何も話せないわけである。したがってポルフィーリイもやっぱりあの夢中でしたことよりほか、全く何も握っていないはずだ。首鼠両端の例の心理よりほか、なんの証拠もなければ、確かなつかまえどころもいっさいないはずである。してみれば、この上なんの事実も上がらないとすれば（そんなものはもう上がるはずがない、はずがない、はずがない！）その時……彼らは自分をどうすることができよう？　たとえ捕縛したところで、なんの理由で自分を断然有罪にすることができよう？　これで見れば、ポルフィーリイはたった今、つい先ほど、貸間捜しのことを聞いたばかりで、それまではまるで知らなかったのだ。

「じゃ、今日ポルフィーリイに話したのは君なんですね……僕が行ったということを話したのは？」思いがけない想念に打たれて、彼は叫んだ。

「ポルフィーリイって？」

「予審判事ですよ」

「わっしが話しました。あのとき庭番が行かなかったので、わっしが出かけました」

「今日？」

「あなたのお見えになるほんのちょっと前でございます。そして、あの人があなたをいじめてるところを、すっかり聞いておりましたよ」

「どこで？　何を？　いつ？」

「なに、やはりあすこでございますよ。あの仕切り壁のかげで。わっしゃ、ずっとあすこにおりましたんで」

「えっ？　じゃ、君があの思いがけない贈物だったんだな？　どうしてそんなことができたんだろう？　ああ！」

「実はこういうわけなんで」と町人は語り始めた。「わっしゃね、庭番たちがわっしのいうことを聞かないで、もう時刻が遅いから、かえって今ごろなにしに来たと叱られる、なんかって、警察へ行こうとしないんでね、もういまいましくって、夜の目もおちおち寝られないようになりましたので、いろいろと調べにかかりました。昨日すっかり調べ上げたんで、きょうは出かけて行ったわけでございます。初め行ったとき、あの方はお留守でした。一時間ほどしてから行ってみたら、今度は会ってくださいませんでした。三度目に行って、やっと通されましたんで。そこでわっしは何もかも、ありのまま申し上げました。するとあの方は、部屋の中をあちこち歩き出しなすって、拳固でご自分の胸をたたきながら『きさまはこのおれをなんという目にあわすのだ、悪党！　そんなことと知っていたら、護送つきで召喚するところだったに！』とおっしゃいました。それから駆け出して、誰かを呼んで来て、その人と隅の方で話を始めなすったが、さてまたわっしの所へ来て、いろいろ尋ねたり、怒りつけたりなさいました。そしてさんざんわっしをお責めに

なりましたよ。わっしは何もかも申し上げて、昨日あなたがわっしのことばに対して、何ひとつ返事ができなかったことや、わっしが誰かおわかりにならなかったことなどを話しました。その時もまた、あの方は部屋の中を駆け回り出して、自分の胸をたたいたり、腹を立てたり、また駆け出したりなさいましたが、あなたのお見えになったことを取りついで来ると――さあ、仕切り壁の向こうに隠れろ、そしてしばらくの間、どんな事が聞こえても身動きもしないでじっとすわっていろ、とこうおっしゃいましてね、自分で椅子を運んだりして、戸に鍵をかけておしまいになりました。ひょっとしたら、お前も尋問するかもしれんという事でございました。ところで、ニコライが連れられて来ると、あなたのお帰りになった後でわたしを出してくださいました。そして、またいずれ呼び出して、尋問するとおっしゃいました……」

「君の前でニコライを尋問したのかい？」

「あなたを送り出すと、わたしもすぐに出してしまって、それからニコライの尋問を始めました」

町人はことばを切って、ふいにまた指が床に着くほど頭を下げた。

「どうかわっしが讒訴したり、悪心を持ったりしたのを、かんべんなすってくださいまし」

「神様が許してくださるさ」とラスコーリニコフは答えた。

彼がこのことばを発するやいなや、町人は今度は床まででなく、帯の辺まで頭を下げて、ゆっくりくびすを転じ、そのまま部屋から出て行った。『何もかも両端に尻尾ができたぞ、これですっかりどっちへでもとれるようになったぞ』とラスコーリニコフはくり返し、いつにもまして元気よく部屋を出た。

『さあ、これからまだ闘うんだ』彼は階段をおりながら、憎々しげな薄笑いを浮かべてそう言った。その憎悪は自分自身に関するものであった。彼は侮蔑と羞恥の念を覚えながら、自分の『気の狭い行為』を思い浮かべた。